一般県道出雲インター線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ

玉泉寺裏遺跡　浜井場4号墳　間谷東古墳

2008年3月

島根県教育委員会

一般県道出雲インター線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ

玉泉寺裏遺跡　浜井場4号墳　間谷東古墳

2008年3月

島根県教育委員会

間谷東古墳　礫床

間谷東古墳　遺物出土状況

序

本書は、島根県教育委員会が島根県土木部から委託を受けて、平成17・18年度に実施した一般県道出雲インター線建設予定地内に所在する玉泉寺裏遺跡、間谷東古墳、浜井場４号墳の発掘調査の成果をとりまとめたものです。

これらの遺跡は出雲市東神西町及び知井宮町に所在し、神西湖の東側に展開する低丘陵に立地しています。周辺には出雲平野では数少ない古墳時代前期の古墳である山地古墳や出雲部最大級の前方後円墳である中期の北光寺古墳、戦国時代には尼子氏・毛利氏の合戦の舞台となった神西城跡などが存在し、出雲平野の歴史を物語る遺跡が多く残されています。

玉泉寺裏遺跡では、弥生時代後期の墓、古墳時代中期の竪穴住居跡や後期の掘立柱建物跡のほか、弥生時代後期を中心とする遺物が多量に見つかりました。間谷東古墳では、埋葬施設に礫床を有する古墳時代前期末から中期初頭に造られた古墳であることがわかり、この時期の古墳の様相を考えていくうえで貴重な資料となりました。

これらの調査結果は島根県の歴史を明らかにするうえで欠くことのできない貴重な成果であるといえます。本書が地域の歴史と埋蔵文化財に対する理解と関心を高めるための一助となれば幸いに思います。

最後になりましたが、発掘調査と報告書の作成にあたりご協力いただきました地元住民の皆様や、出雲市ならびに島根県土木部をはじめとする関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成20年3月

島根県教育委員会

教育長　藤　原　義　光

例　　言

１．本書は、島根県土木部道路建設課から委託を受けて、島根県教育委員会・出雲市文化観光部文化財課が平成17・18年度に合同で調査を実施した一般県道出雲インター線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査 における報告書のうち、出雲市文化財課担当分の報告書である。

２．発掘調査地は下記のとおりである。

出雲市東神西町１４７５－１外　　玉泉寺裏遺跡（平成17年度）

出雲市東神西町１４５８－１　　浜井場４号墳（平成18年度）

出雲市知井宮町２４４９－１　　間谷東古墳　（平成18年度）

３．調査組織は次のとおりである。

調査主体　島根県教育委員会・出雲市文化財課

平成17年度　現地調査

「事　務　局」　卜部吉博（島根県埋蔵文化財調査センター所長）、永島静司（総務グループ課長）、川原和人（調査第１グループ課長）

「調　査　員」　景山真二（出雲市文化財課）、岡本育子（県臨時職員）、村尾俊樹（同）

「調 査 指 導」　田中義昭（島根県文化財保護審議会委員）、蓮岡法暲（同）、渡邊貞幸（島根大学法文学部教授）

平成18年度　現地調査

「事　務　局」　卜部吉博（島根県埋蔵文化財調査センター所長）、坂本憲一（総務グループ課長）、川原和人（調査第１グループ課長）

「調　査　員」　曽田辰雄（出雲市文化財課）、岡本育子（県臨時職員）、村尾俊樹（同）

「調 査 指 導」　田中義昭（島根県文化財保護審議会委員）、蓮岡法暲（同）、渡邊貞幸（島根大学法文学部教授）

平成19年度　報告書作成

「事　務　局」　卜部吉博（島根県埋蔵文化財調査センター所長）、川原和人（調整監）、坂本憲一（総務グループ課長）、廣江耕史（調査第３グループ課長）

「調　査　員」　曽田辰雄（出雲市文化財課）、岡本育子（県臨時職員）

４．発掘調査、ならびに報告書作成にあたっては、埋蔵文化財調査センター各職員及び以下の方々から有益なご指導・ご助言・ご協力をいただいた。記して謝意を表させていただく。

中村唯史（三瓶自然館サヒメル指導員）、赤澤秀則（松江市教育委員会）

５．挿図で使用した方位は、測量法による第３座標系Ｘ座標方向を指し、平面直角座標系XY座標は日本測量地系による。レベル高は海抜高を示す。

６．本書で使用した玉泉寺裏遺跡第２・３図、浜井場４号墳第１図及び間谷東古墳第１図は出雲市都市計画平面図を使用して作成した。

７．遺構の略称記号は基本的に次のとおりであるが、遺構によっては性格が異なる場合もある。

SI:竪穴住居跡　SB:掘立柱建物跡　SD:溝状遺構　SK：土坑　SX：その他の遺構

８．本調査に伴って行った自然化学分析は、文化財調査コンサルタントに委託して実施した。その分析結果は第３章に掲載した。

9．本書に掲載した写真は、航空写真を株式会社ワールド航測に委託し、その他の写真は各調査員が撮影した。

10. 本書に掲載した遺物実測図の作成は、各調査員のほか、今岡一三、松山智弘、大田晴美、田中裕貴が行った。遺物・遺構の浄書は調査員のほか、陶山佳代、井上美由紀が行った。

11. 本書の執筆、編集は、景山、曽田が協議して行った。

12. 本書掲載の遺跡出土遺物、実測図、写真などの資料は島根県教育庁埋蔵文化財調査センターで保管している。

本文目次

第１章　調査に至る経緯と経過

第１節　調査の経緯……（曽田）……1

第２節　位置と歴史的環境……（曽田）……2

第２章　調査の結果

第１節　玉泉寺裏遺跡……（景山、曽田）……5

第２節　浜井場４号墳……（曽田）……42

第３節　間谷東古墳……（曽田）……43

第３章

玉泉寺裏遺跡発掘調査に伴う花粉分析及び植物珪酸体分析……53

渡辺正巳（文化財調査コンサルタント株式会社）

挿図目次

第１図　遺跡の位置

第２図　周辺の遺跡……3

第３図　玉泉寺裏遺跡周辺の地形……5

第４図　玉泉寺裏遺跡調査前測量図及び調査範囲……6

第５図　玉泉寺裏遺跡Ⅰ区遺構配置図……7

第６図　玉泉寺裏遺跡Ⅰ区　ＳＩ－０１実測図……8

第７図　玉泉寺裏遺跡Ⅰ区　ＳＩ－０１出土遺物実測図……9

第８図　玉泉寺裏遺跡Ⅰ区　ＳＫ－０１実測図……9

第９図　玉泉寺裏遺跡Ⅰ区　ＳＸ－０１実測図……10

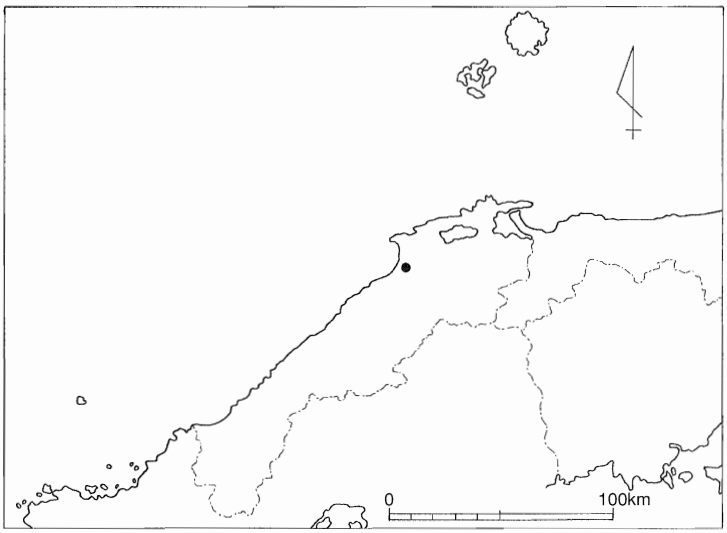
第10図　玉泉寺裏遺跡Ⅰ区　ＳＸ－０１出土遺物実測図……10
第11図　玉泉寺裏遺跡Ⅱ区　遺構配置図……11
第12図　玉泉寺裏遺跡Ⅱ区　ＳＢ－０１．０２実測図……12
第13図　玉泉寺裏遺跡Ⅱ区　ＳＫ－０１及び０２出土遺物実測図……12
第14図　玉泉寺裏遺跡Ⅱ区出土遺物実測図……13
第15図　玉泉寺裏遺跡Ⅲ区第２層実測図及び柱状図……15
第16図　玉泉寺裏遺跡Ⅳ区遺構配置図……16
第17図　玉泉寺裏遺跡Ⅴ区遺構配置図……16
第18図　玉泉寺裏遺跡出土遺物実測図（１）……18
第19図　玉泉寺裏遺跡出土遺物実測図（２）……19
第20図　玉泉寺裏遺跡出土遺物実測図（３）……20
第21図　玉泉寺裏遺跡出土遺物実測図（４）……21
第22図　玉泉寺裏遺跡出土遺物実測図（５）……22
第23図　玉泉寺裏遺跡出土遺物実測図（６）……23
第24図　玉泉寺裏遺跡出土遺物実測図（７）……24
第25図　玉泉寺裏遺跡出土遺物実測図（８）……25
第26図　玉泉寺裏遺跡出土遺物実測図（９）……26
第27図　玉泉寺裏遺跡出土遺物実測図（10）……27
第28図　玉泉寺裏遺跡出土遺物実測図（11）……28
第29図　玉泉寺裏遺跡出土遺物実測図（12）……29
第30図　玉泉寺裏遺跡出土遺物実測図（13）……29
第31図　玉泉寺裏遺跡出土遺物実測図（14）……30
第32図　玉泉寺裏遺跡出土遺物実測図（15）……31
第33図　玉泉寺裏遺跡出土遺物実測図（16）……32
第34図　玉泉寺裏遺跡出土遺物実測図（17）……33
第35図　玉泉寺裏遺跡出土遺物実測図（18）……34
第36図　玉泉寺裏遺跡出土遺物実測図（19）……34
第37図　玉泉寺裏遺跡出土遺物実測図（20）……34
第38図　玉泉寺裏遺跡出土遺物実測図（21）……35
第39図　浜井場４号墳　周辺地形図……42
第40図　浜井場４号墳地形測量図……42
第41図　間谷東古墳　位置図……43
第42図　間谷東古墳　調査前地形測量図……44
第43図　間谷東古墳　調査成果図……45
第44図　間谷東古墳　土層堆積状況……46
第45図　間谷東古墳　主体部実測図（１）……47
第46図　間谷東古墳　主体部実測図（２）……48
第47図　間谷東古墳　主体部実測図（３）……49

第48図　間谷東古墳　主体部　出土遺物実測図（１）……49
第49図　間谷東古墳　主体部　出土遺物実測図（２）……49
第50図　間谷東古墳　周辺出土遺物実測図……50

写真図版目次

巻頭カラー　　間谷東古墳　主体部礫床
　　間谷東古墳　遺物出土状況
図版１　玉泉寺裏遺跡（南から）
　　玉泉寺裏遺跡（西から）
図版２　玉泉寺裏遺跡Ⅰ区　調査前全景
　　玉泉寺裏遺跡Ⅰ区　ＳＩ－０１
図版３　玉泉寺裏遺跡Ⅰ区　ＳＫ－０１
　　玉泉寺裏遺跡Ⅰ区　ＳＸ－０１検出状況
　　玉泉寺裏遺跡Ⅰ区　ＳＸ－０１
図版４　玉泉寺裏遺跡Ⅰ区　ＳＤ－０１
　　玉泉寺裏遺跡Ⅰ区　ＳＤ－０５・０６
　　玉泉寺裏遺跡Ⅰ区　ＳＤ－０３・０４
図版５　玉泉寺裏遺跡Ⅱ区（西から）
　　玉泉寺裏遺跡Ⅱ区　ＳＢ－０１
図版６　玉泉寺裏遺跡Ⅱ区　ＳＢ－０２
　　玉泉寺裏遺跡Ⅲ区　ピット検出状況
図版７　玉泉寺裏遺跡Ⅲ区　遺物出土状況１
　　玉泉寺裏遺跡Ⅲ区　遺物出土状況２
図版８　玉泉寺裏遺跡Ⅲ区　遺物出土状況３
　　玉泉寺裏遺跡Ⅲ区　遺物出土状況４
図版９　玉泉寺裏遺跡Ⅲ区　調査後全景
　　玉泉寺裏遺跡Ⅳ・Ⅴ区（北から）
図版10　玉泉寺裏遺跡Ⅳ区　ＳＤ－０２
　　玉泉寺裏遺跡Ⅴ区　溝状遺構検出状況
図版11　玉泉寺裏遺跡　出土遺物　１
図版12　玉泉寺裏遺跡　出土遺物　２
図版13　玉泉寺裏遺跡　出土遺物　３
図版14　玉泉寺裏遺跡　出土遺物　４
図版15　玉泉寺裏遺跡　出土遺物　５
図版16　玉泉寺裏遺跡　出土遺物　６
図版17　玉泉寺裏遺跡　出土遺物　７

図版18　玉泉寺裏遺跡　出土遺物　8
図版19　玉泉寺裏遺跡　出土遺物　9
図版20　玉泉寺裏遺跡　出土遺物　10
図版21　玉泉寺裏遺跡　出土遺物　11
図版22　玉泉寺裏遺跡　出土遺物　12
図版23　玉泉寺裏遺跡　出土遺物　13
図版24　玉泉寺裏遺跡　出土遺物　14
図版25　玉泉寺裏遺跡　出土遺物　15
図版26　玉泉寺裏遺跡　出土遺物　16
図版27　間谷東古墳　調査前（南から）
　　間谷東古墳　表土除去後（南から）
図版28　間谷東古墳　礫床検出状況１（南から）
　　間谷東古墳　礫床検出状況２（北から）
図版29　間谷東古墳　遺物出土状況１
　　間谷東古墳　遺物出土状況２
図版30　間谷東古墳　礫床除去後（南から）
　　間谷東古墳　墓壙内小土坑
図版31　間谷東古墳　主体部完掘状況１
　　間谷東古墳　主体部完掘状況２
図版32　間谷東古墳　調査後１（南から）
　　間谷東古墳　調査後１（南から）
図版33　間谷東古墳　出土遺物



第１図　玉泉寺裏遺跡・浜井場古墳・間谷東古墳の位置

第１章　調査に至る経緯と経過

第１節　調査の経緯

一般県道出雲インター線は、山陰自動車道「鳥取益田線」の出雲インターチェンジ（仮称）と一般国道９号及び一般国道431号を直接結ぶ道路であるとともに、出雲インターチェンジ（仮称）を起点とした宍道湖・中海都市圏の連携を強化する地域高規格道路「境港出雲道路」の重要な部分を担う道路として計画されたものである。

平成15年４月14日、島根県出雲土木建築事務所より出雲市文化観光部文化財課（以下、出雲市文化財課と称す）に対して、当道路予定地内における埋蔵文化財の有無について照会があった。出雲市文化財課では事業予定地内には浜井場古墳や間谷東古墳が存在し、その周辺には大規模な前方後円墳である北光寺古墳が所在していることから、事業予定地内に新たな遺跡の存在する可能性が高いものとして、確認調査が必要な旨を回答した。それにより同年から翌年にかけて合計３回の確認調査を実施し、玉泉寺裏遺跡ほか４ヶ所の遺跡を確認したため、新発見の遺跡については島根県教育委員会あて10月23日付けで遺跡発見の通知を行い、同日付けで事業者である島根県出雲土木建築事務所から島根県教育委員会あてに文化財保護法第57条の３（現第94条）に基づく周知の埋蔵文化財包蔵地内における土木工事の通知が提出されるに至った。そして、新発見された浜井場２号墳の存在する丘陵については、早急に工事着手が必要であったことから、平成15年11月から出雲市文化財課により発掘調査が実施され、平成17年２月に報告書が刊行されている。

また、浜井場２号墳を除く当該事業地内の遺跡については、島根県出雲土木建築事務所から島根県教育委員会あてに、平成16年５月11日付けで文化財保護法第57条の３（現第94条）に基づく周知の埋蔵文化財包蔵地内における土木工事の通知が提出され、同年５月13日付けで工事着手前に発掘調査が必要な旨を島根県出雲土木建築事務所へ回答した。

平成16年度の調査については、出雲市文化財課は多数の事業を抱えていることから市単独での対応が困難な状況であったため、島根県教育委員会及び島根県出雲土木建築事務所と三者協議を行った。その結果、平成16年度に対応が急がれる九景川遺跡Ｉ区については、島根県教育委員会が実施することになり、出雲市内の東林木バイパス発掘調査班から１班を派遣して応急的に対応することになった。

平成17年度以降については、島根県と出雲市の２パーティ編成による合同調査を実施することになったが、予算執行、契約等については島根県が受け持ち、出雲市は調査員１名が事業地内の発掘調査に対応することとなった。平成17年度の調査は、島根県が引き続き九景川遺跡の調査を行い、出雲市は玉泉寺裏遺跡を調査した。平成18年度の調査については、工事を急ぐ御崎谷遺跡について島根県・出雲市と合同で調査を実施した後、島根県は間谷東遺跡、出雲市は浜井場４号墳、間谷東古墳の調査を担当した。

本書は平成17・18年度に出雲市文化財課が担当した遺跡の調査報告書である。

第２節　位置と歴史的環境

（１）遺跡の地理的環境

本報告書掲載の遺跡は、玉泉寺裏遺跡、浜井場４号墳、間谷東古墳であり、出雲市南西部の知井宮町、東神西町の町境に位置している。それぞれ出雲平野南側の丘陵上あるいは丘陵裾部分に位置し、間谷東古墳がある標高約43mの尾根上からは、北方に北山山系、西には神西湖と日本海を見ることができ、出雲平野が眼下に広がる眺望の優れた場所である。

出雲平野は、斐伊川と神戸川によって形成された沖積平野で、中国山地と北山山麓に南北を挟まれている。現在、斐伊川は東の宍道湖へ注ぎ、神戸川は西の神西湖から日本海へ流れている。

奈良時代に編纂された『出雲国風土記』によれば、出雲平野には、「出雲大川」と称される斐伊川の本流が、現在とは逆の西向きに流れており、神門水海へ注いでいたとあるが、寛永16（1639）年の大洪水以来、流れを東の宍道湖に向け現在に至っている。また、神門水海は現在の神西湖よりも広く内陸に入り込んでいたものと推定される。

（２）周辺の歴史的環境

この地域周辺では、縄文時代の遺跡として、三田谷Ⅰ遺跡、保知石遺跡が知られ、弥生時代中期頃からは、知井宮多聞院遺跡、大規模な環濠の可能性がある大溝や居住遺構が確認された下古志遺跡や古志本郷遺跡で大規模な集落が古墳時代前期頃まで継続されている。しかし、古墳時代前期になると多量の土器と共に環濠は埋没し、集落の規模は縮小傾向となる。

古墳時代前期以降の遺構・遺物としては、出雲平野西南部に位置する浅柄遺跡で古墳時代前期末から中期にかけての住居跡が確認されており、玉泉寺裏遺跡の東に存在する御崎谷遺跡では、古墳時代中期頃の土器が出土し、平野中央部でも中野美保遺跡・中野西遺跡等で古墳時代中期の土器が確認されている。

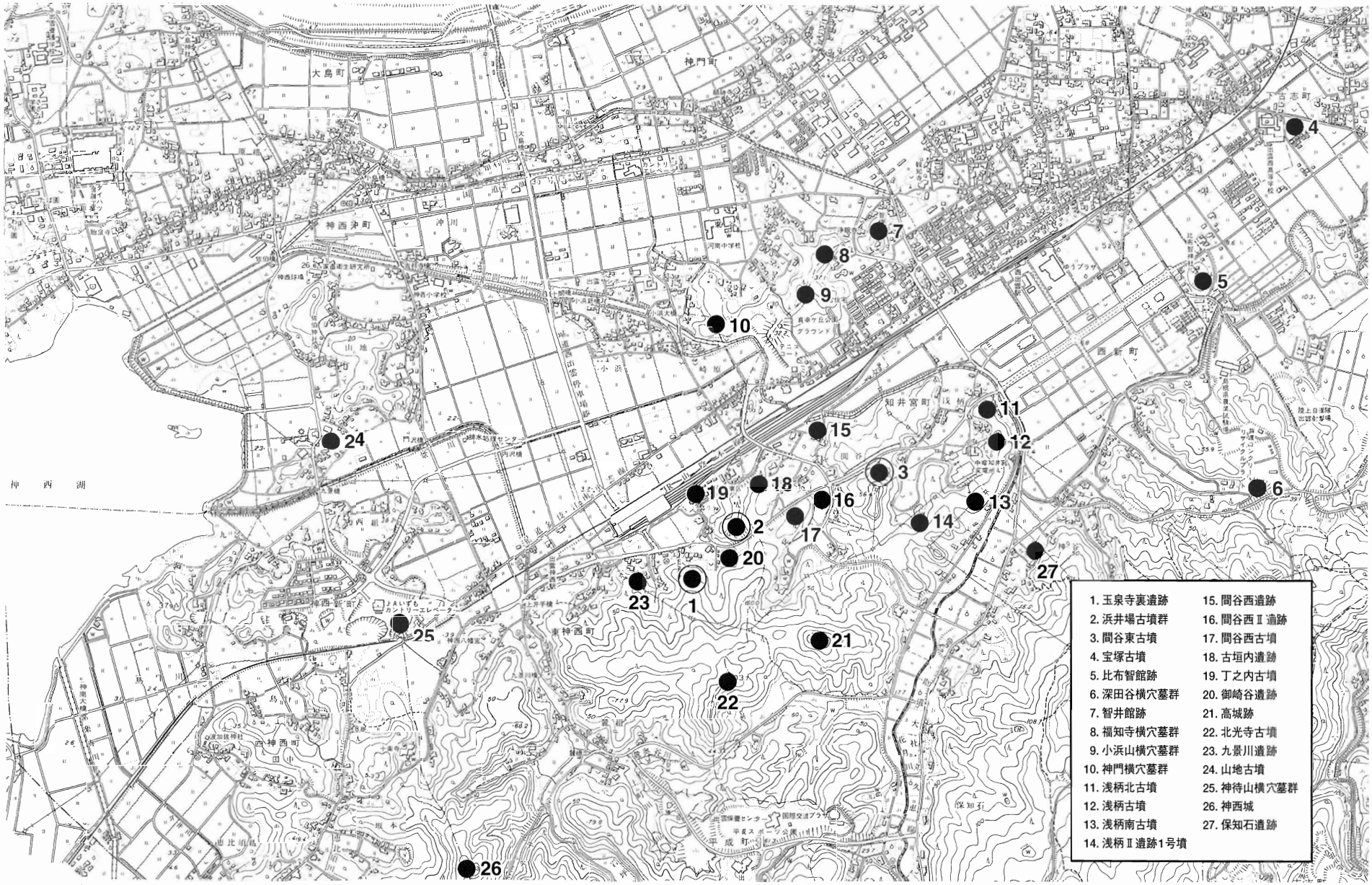
古墳としては、今回の調査地域周辺で、浅柄Ⅱ遺跡、山地古墳などの前期古墳が知られている。浅柄Ⅱ遺跡の古墳は、礫敷きの粘土槨と礫槨の箱式木棺墓の２基の主体部があり、排水溝を共有している。山地古墳は小型の箱式石棺や礫床を有す主体部など３基の主体部があり、仿製二神二獣鏡、小型仿製珠文鏡、筒型銅器や青銅鏡、碧玉製管玉などを副葬した円墳である。

古墳時代中期には、神門水海の南側丘陵上に出雲西部最大級の前方後円墳である北光寺古墳が築造され、その他、浜井場２号墳、古垣内遺跡、丁之内古墳などの小規模古墳があり、出雲市内における当時期の古墳の集中地帯となっている。

古墳時代後期になると、今市大念寺古墳、上塩冶築山古墳、上塩冶地蔵山古墳などの横穴式石室を有する大型の古墳が築造されるようになる。神戸川左岸においては、妙蓮寺山古墳、放レ山古墳、宝塚古墳などの古志古墳群が知られる。また、終末期には神門横穴墓群のように玄室の形態が妻入り家型の大規模な横穴墓群が出現する。

奈良時代になると、神門郡古志郷新造院に推定される神門寺境内廃寺などが建立されるほか、石製骨臓器を納めた光明寺３号墓や石室内に石櫃を置く小坂古墳などの初期火葬墓が知られ、仏教文化の背景が窺える。

また、中世の城館跡として、比布智神社、智伊神社の小丘陵が比布智城跡、智伊城跡として知ら



第２図　周辺の遺跡　（S＝1：10,000）

れ、保知石谷には保知石氏の居城であった高城跡があるほか、玉泉寺裏遺跡から南西へ約800mに位置する丘陵上には戦国時代の有力国人であった神西氏の居城である神西城跡がある。

参考文献

出雲市教育委員会　1989『神門地区遺跡詳細分布調査報告書』

出雲市教育委員会　1988『古志地区遺跡分布調査報告書』

出雲市教育委員会　2000『西出雲駅南と地区各整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告書　浅柄遺跡』

出雲市教育委員会　1986『山地古墳発掘調査報告書』

出雲市教育委員会　2005『(一) 出雲インター線新世紀道路（改良）工事地内　浜井場古墳発掘調査報告書』

出雲市教育委員会　1982「丁之内古墳」『出雲車両基地建設工事に伴う埋蔵文化財調査報告書』

出雲市教育委員会　1982「古垣内遺跡」『出雲車両基地建設工事に伴う埋蔵文化財調査報告書』

島根県教育委員会　2005『畑ノ前遺跡・菅原Ⅰ遺跡・クボ山遺跡・菅原Ⅱ遺跡・菅原Ⅲ遺跡・廻田Ⅴ遺跡・保知石遺跡・浅柄Ⅱ遺跡・ノ内Ⅰ遺跡　山陰自動車道鳥取益田線（宍道～出雲間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書２』

島根県教育庁古代文化センター・埋蔵文化財調査センター　2007『北光寺古墳発掘調査報告書』

出雲市教育委員会　2002　平成11年度古志遺跡群範囲確認調査報告書　古志本郷遺跡　下古志遺跡』

島根県教育委員会　2001『古志本郷遺跡Ⅱ』

島根県教育委員会　2002『古志本郷遺跡Ⅳ・放レ山横穴墓群・只谷間府・上沢Ⅲ遺跡（分析編）』

湖陵町誌編纂委員会　2000『湖陵町誌』

第２章　調査の結果

第１節　玉泉寺裏遺跡

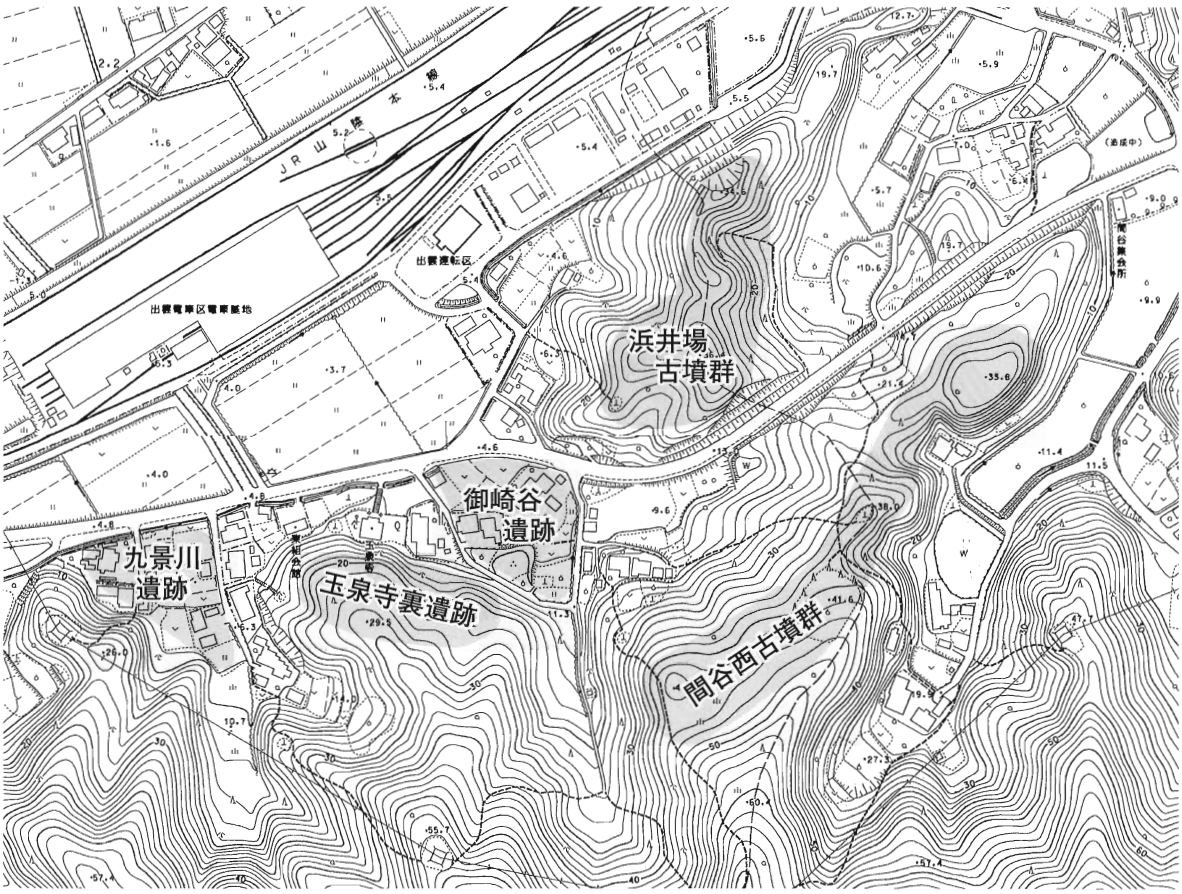
（１）調査の経過と概要

本遺跡は、出雲市東神西町1475－１外に所在し、出雲平野の南西部の低丘陵に位置している。調査前の遺跡の現況は山林で、北に広がる平野は水田として利用され、西には九景川が南北に流れ谷筋を形成している。

周辺には、九景川遺跡、御崎谷遺跡が東西に隣接しており、東には浜井場古墳群や間谷西古墳群が存在している。

調査は、調査対象区域全体にトレンチを入れ、遺構・遺物の出土状況を確認しながら調査区を設定した。調査区は、西側に伸びる尾根に位置するⅠ区と北向きの緩斜面に位置するⅡ区、東側の小さな谷筋の一部となっているⅢ区、北向きの急斜面に位置するⅣ区、Ⅴ区とに分けて行った。Ⅰ区の南西に伸びる丘陵部分が最も高く標高は29mで、谷筋に位置するⅢ区は標高11mほどであった。

調査は、平成17年４月25日から平成18年１月19日にかけて実施した。調査面積は全体で1,825㎡である。調査の結果、弥生時代末から古墳時代にかけての埋葬施設1基と掘立柱建物跡、土坑、溝状遺構を多数確認し、遺物として弥生時代後期から古墳時代後期にかけての遺物が出土した。平成17年11月５日には九景川遺跡と共に現地説明会を実施し、150名を越える多くの見学者に現地を公開した。



第３図　玉泉寺裏遺跡周辺の地形（S＝1：2,500）

（２）調査の結果

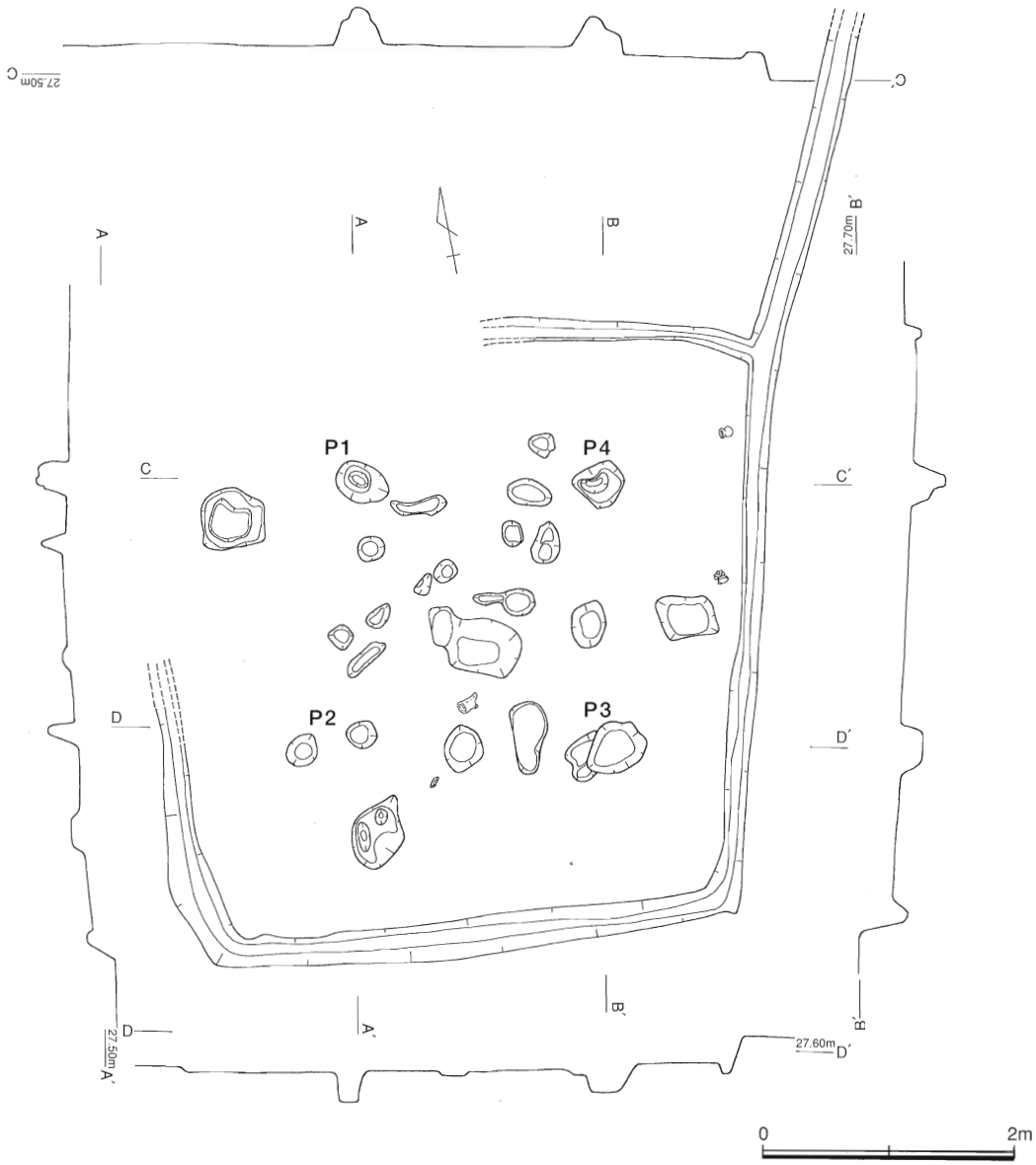
Ⅰ区の調査

１区は遺跡内西側の丘陵部で、調査面積約1,100㎡である。調査区内には標高27.0m～29.0mの地点でマウンド状のものが３箇所確認されたため古墳の存在が予想され、トレンチを入れながら遺構の範囲を確認し、調査を実施した。（第５図）

調査の結果、竪穴住居１（SI－01）、土坑１基（SK－01）、土壙墓１基（SX－01）溝状遺構６（SD－01～06）を検出した。尾根の南側斜面には遺構は確認されず、いずれも尾根上から北側斜面にかけて検出した。北側斜面で検出した溝状遺構（SD－03～SD－06）については、削平の影響を強く受けており残存状況からその性格を窺い知ることは難しい。

第４図　玉泉寺裏遺跡調査前測量図及び調査範囲

第５図　玉泉寺裏遺跡Ⅰ区遺構配置図



第６図　玉泉寺裏遺跡Ⅰ区　SI－01 実測図

遺構について

ＳＩ－０１（第６図）

調査区のほぼ中央、標高約27.5mの緩斜面で検出した竪穴住居で、上面がかなり削平されているため壁面の遺存状況が悪い。一辺が4.6mを測る隅丸方形で、平坦に掘り込んだ床面には径25cm～50cmの柱穴を多数確認したが、このうち主柱穴と考えられるのはP１～P４の４穴である。周溝は深さ５cm～10cmと浅く、床面からは小型丸底壺や土製支脚が出土した。

竪穴住居の時期については、出土遺物から推測すると、古墳時代前期末～中期頃と考えられる。

ＳＩ－０１出土遺物（第７図）

１～３は小型丸底壷である。いずれも遺構内の東側床面から出土した。１の口縁はやや厚みをもち頸部から直線的に立ち上がる。外面は肩部に横のハケメが見られる。４～５は土製支脚である。遺構内のほぼ中央の床面から出土している。４は２方向突起で胴部背面に非貫通孔のあるタイプで、底部は上げ底である。岩橋氏による分類ではＩＣ類に該当すると思われる。

ＳＫ０１（第８図）

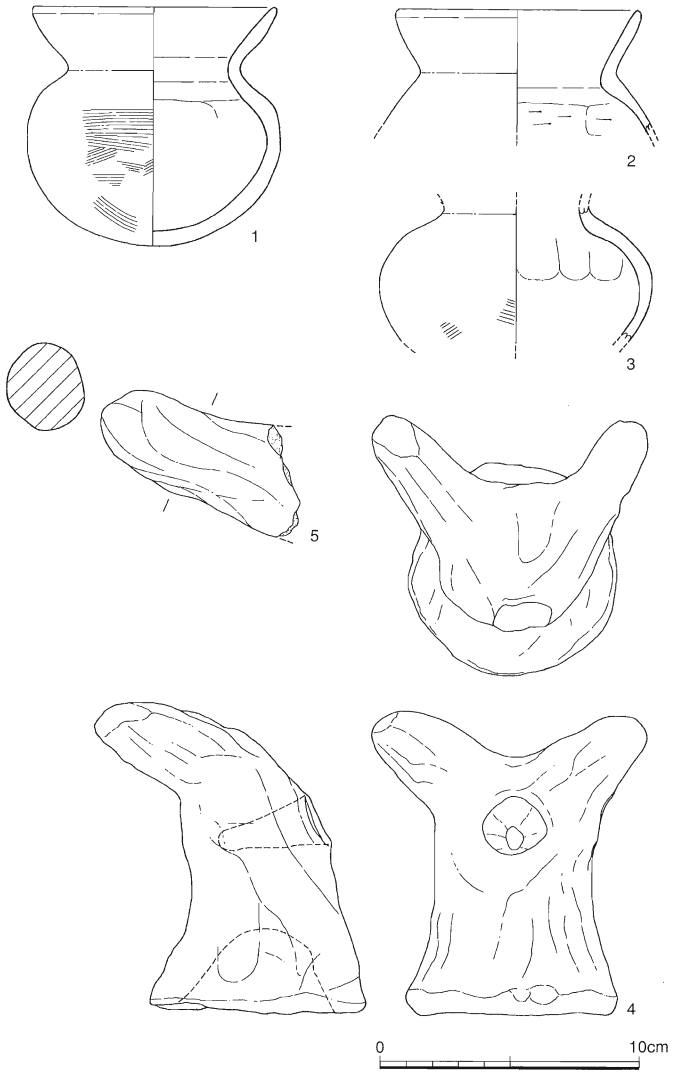
標高27.50mの南西に伸びる尾根上で検出した。尾根に対して長軸は直交し、長さ1.8m、幅1.0m、深さ10cmを測る。

堆積土は暗褐色粘質土で、実測は不可能であったが、弥生時代後期頃と思われる甕片が出土した。

ＳＸ－０１（第９図）

SK－01とSI－01の中間に位置する、標高約27.25mの尾根上で検出した。検出面までの堆積土は薄く、後世に削平されたものと考えられる。墓壙は長さ3.3m、幅1.35m深さ0.5mの楕円形を呈している。墓壙底面には縦70cm×横40cmで地山が一段低く削られている。

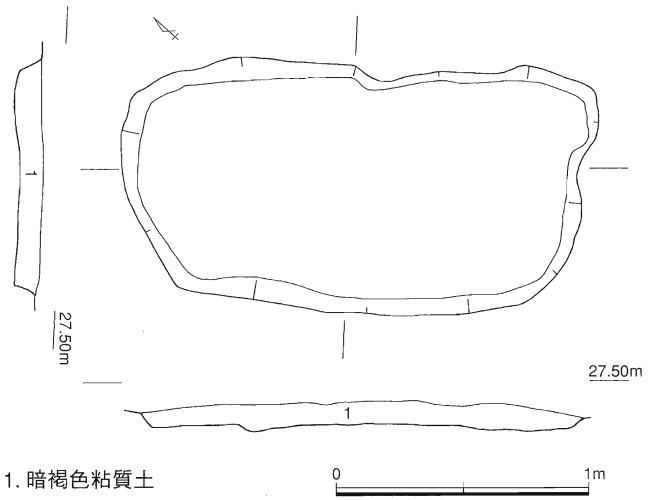
検出面以下、暗茶褐色粘質土、暗褐色粘質土が堆積しており、暗褐色粘質土から弥生時代末から古時代初頭頃の土師器が出土した。土器は重なり合うように密集して出土しており、埋葬施設に伴う供献土器である可能性が高い。また、標石と思われる石も出土しており、古墳時代初頭頃の埋葬施設と考えられる。



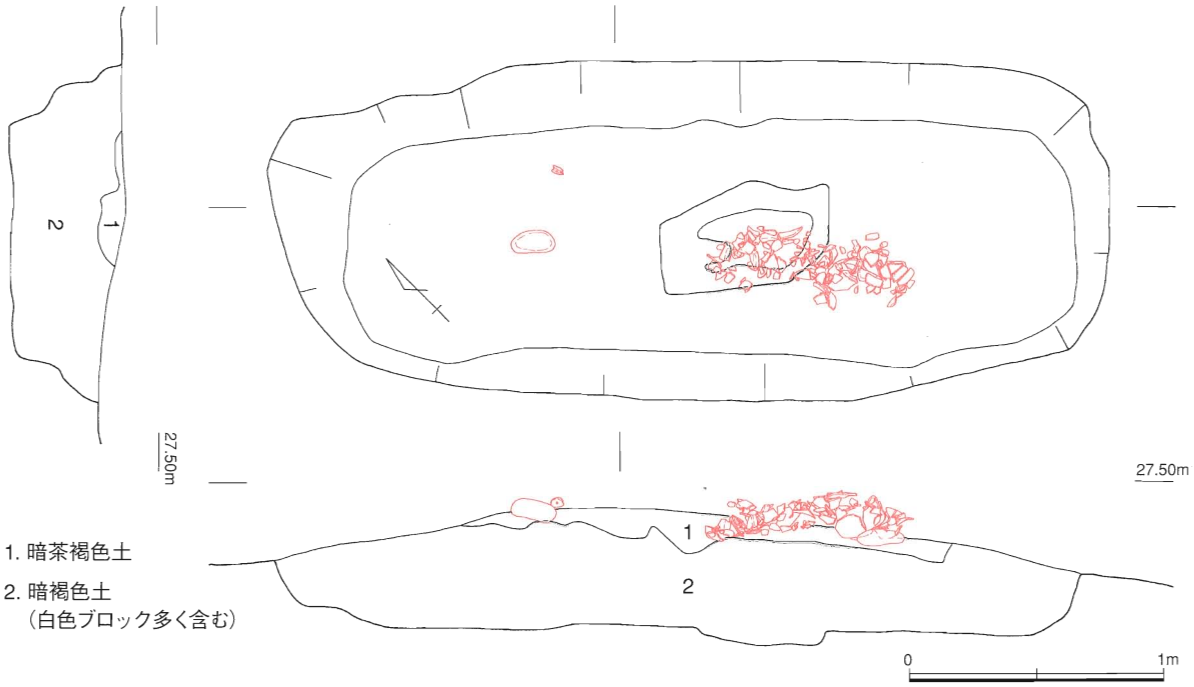
第７図　玉泉寺裏遺跡Ⅰ区　SI－01 出土遺物実測図

ＳＸ－０１出土遺物（第10図）

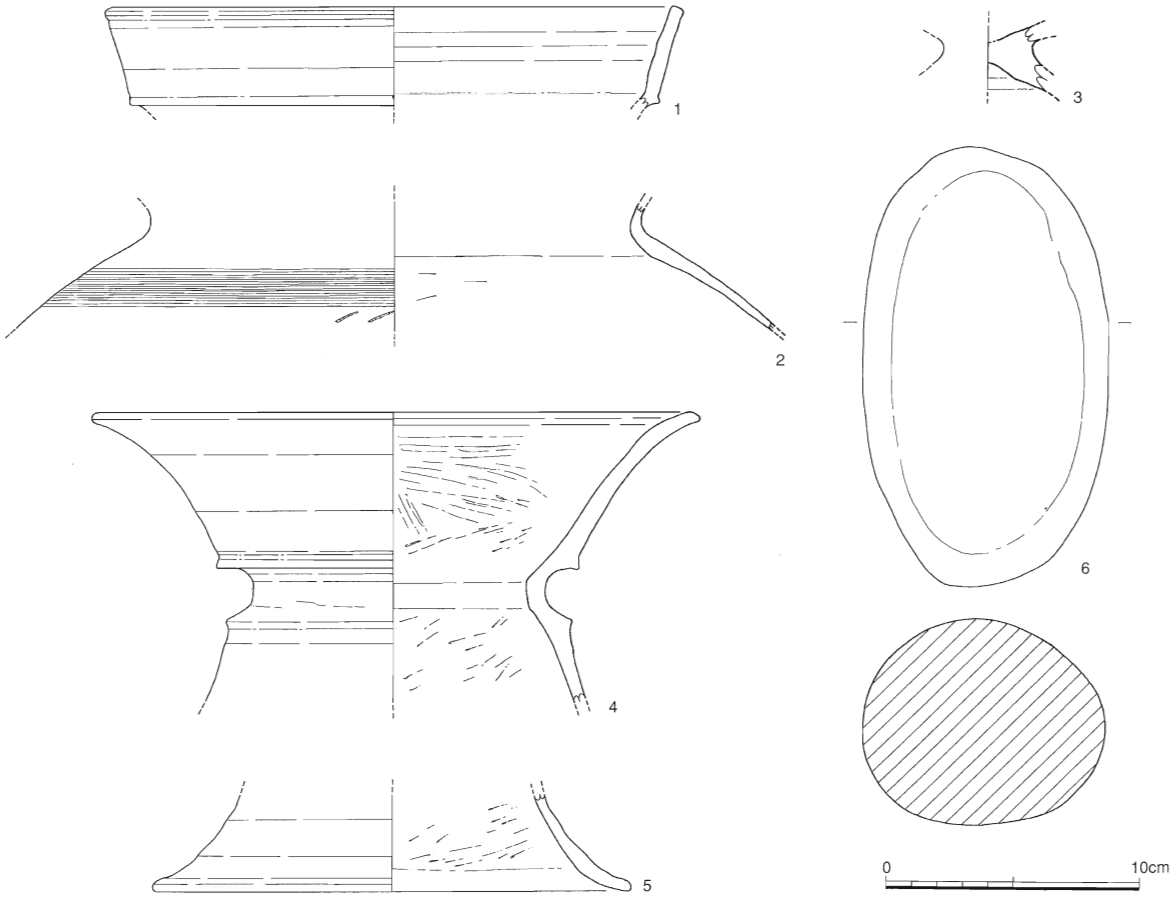
１は複合口縁の甕の口縁部である。磨滅が著しく調整が不明であるが、端部は平坦面を呈している。草田編年６期頃のものと考えられる。２は甕の肩部である。沈線と刺突文が施されている。３は低脚坏である。４～５は鼓形器台で、１の甕口縁部と同様、草田編年６期頃のものと考えられる。６は暗茶褐色粘質土で出土した石である。標石と考えられる。



第８図　玉泉寺裏遺跡Ⅰ区　SK－01 実測図



第 9 図　玉泉寺裏遺跡Ⅰ区　SX－01 実測図



第 10 図　玉泉寺裏遺跡Ⅰ区　SX－01 出土遺物実測図

Ⅱ区の調査

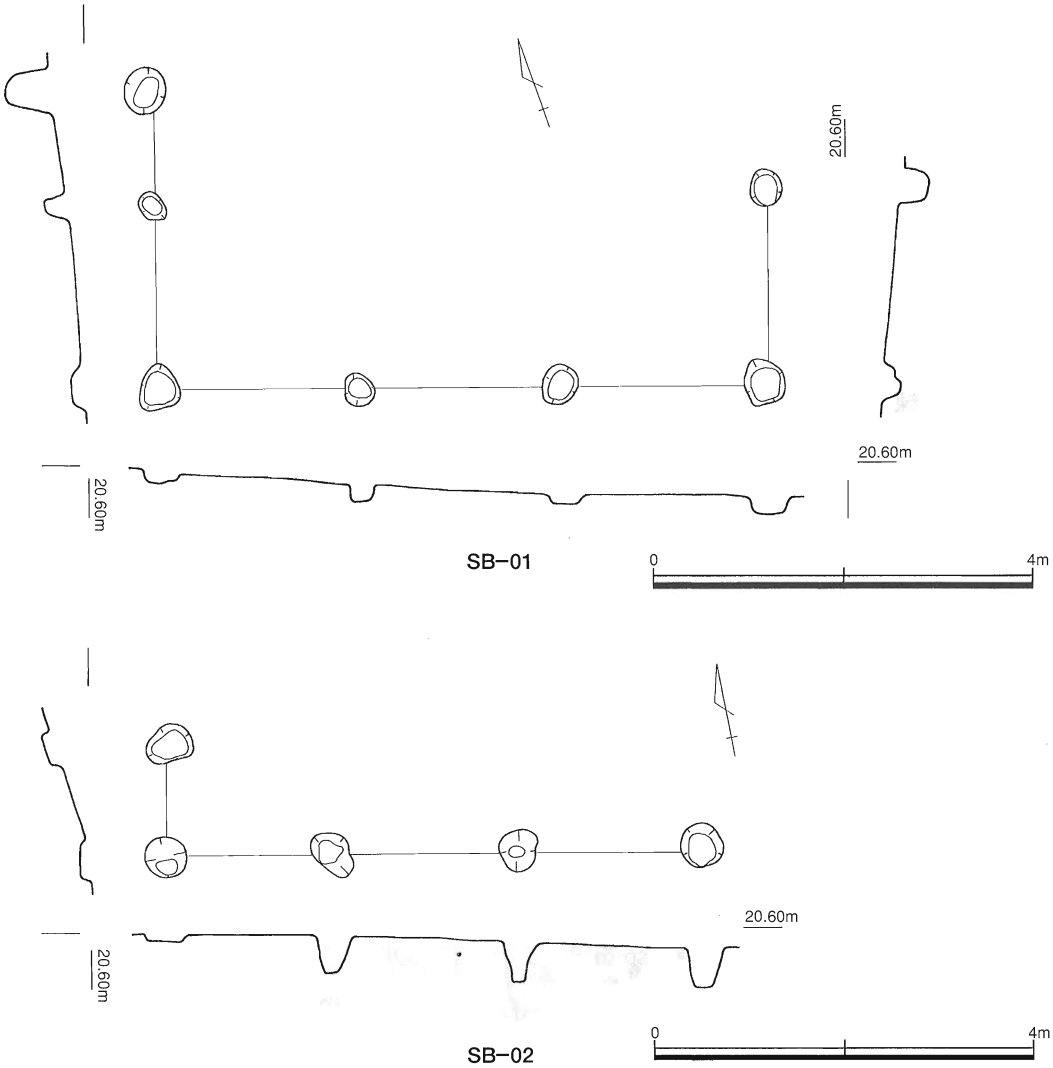
Ⅱ区はⅠ区の東側、本遺跡のほぼ中央に位置し、標高20.0mから23.0mで遺構・遺物を検出した。調査面積は約435㎡である。

遺構面まで、表土以下の堆積土は薄く、その大部分は流出したものと考えられる。特に北側斜面は畑となっていたため後世に削平が進んでおり、検出した掘立柱建物も北側半分は既に存在していなかった。また、多数のピット群を検出したが、今回検出した遺構以外の小規模建物が存在していたことを窺わせるものである。

遺構について

掘立柱建物２棟（SB－01．02)、土坑14基（SK－01～14)、溝状遺構10本（SD－01～10）及びピット群を検出した。

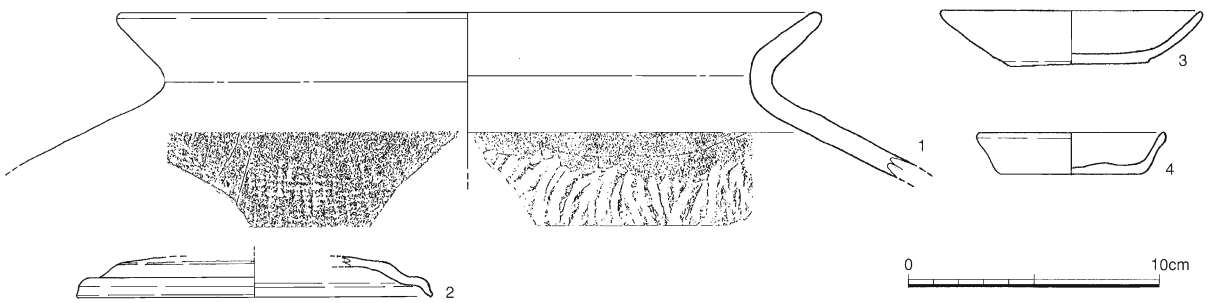
第11図　玉泉寺裏遺跡Ⅱ区　遺構配置図



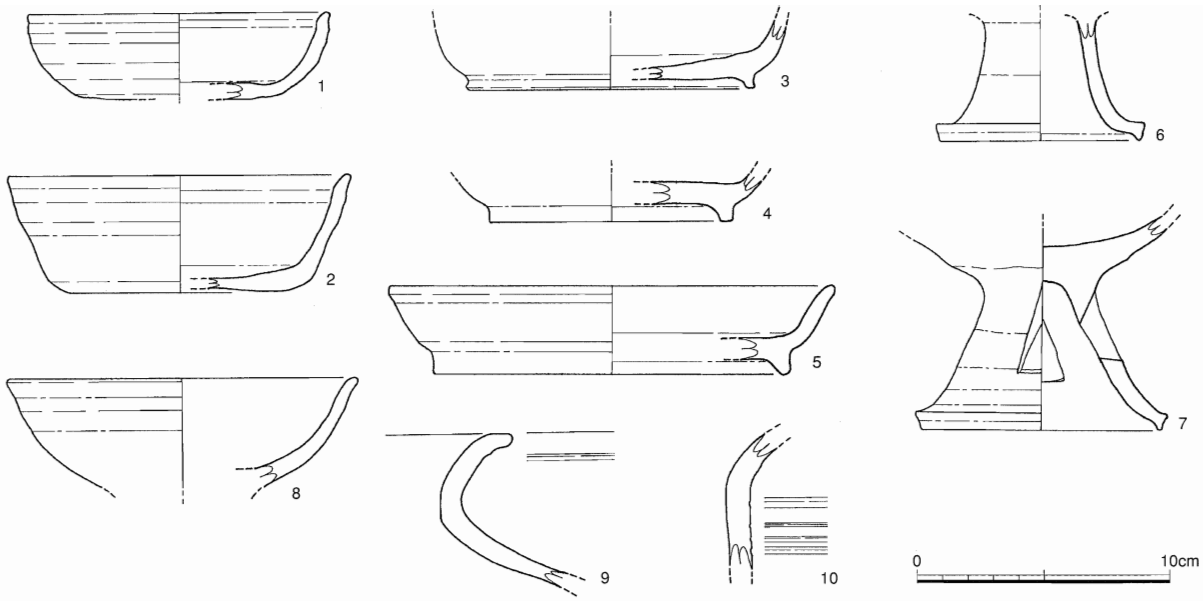
第12図　玉泉寺裏遺跡Ⅱ区　SB−01.02 実測図

ＳＢ−０１（第12図）

標高20.60mの地山で検出された掘立柱建物跡である。残存しているものは6.3m×3.2mを測る２間×３間の規模であるが、北側は後世の削平のために遺構面が消失しており、正確な規模は不明である。柱穴の深さは深いもので50cmを測る。



第13図　玉泉寺裏遺跡Ⅱ区　SK−01 及び 02 出土遺物実測図



第14図　玉泉寺裏遺跡Ⅱ区出土遺物実測図

ＳＢ－０２（第12図）

調査区の北側標高17.00mで検出された掘立柱建物跡である。5.7m×1.3mを測る２間×３間の規模と考えられる。柱穴の深さは15cm～40cmで、SB－01同様、北側の遺構面は削平されており正確な規模は不明である。

土坑（第11図）

土坑は14基検出したが、平面形は円形、楕円形、不整形のものがある。このうち遺物を伴う土坑は２基であった。

ＳＫ－０１

SK－01は直径約1.1m、深さ35cmを測り、暗褐色粘質土が堆積していた。内部からは第13図１、２の須恵器片が出土している。

１は口径約27.6cmを測る甕口縁部である。２は口径14cmを測る坏蓋で、口縁部が下方に屈曲するタイプである。

ＳＫ－０２

SK－02は直径約1.2m、深さ20cmを測り、堆積土は暗褐色粘質土である。内部からは第13図３、４の土師質土器が出土している。

３は口径10.3cmを測る坏で、口縁部は緩やかに内湾しながら外傾して立ち上がる。４は口径7.4cm、底径5.4cmを測るやや小型の坏である。

土坑の性格については不明であるが、時期については12世紀頃と考えられる。

その他の土坑（ＳＫ－０３～１４）第11図

SK－03は最大径68cmを測り、最深部で深さ15cmを測る。SK－04は最大径80cmを測り、最深部で深さ20cmを測る。SK－05は底面の深さが３箇所に分かれ、３基の土坑が切りあっているように

も見えるが、判然としなかった。長さは4.2m、幅は最大で1.3mを測る。

SK－06は最大径約40cm、長さ90cm、深さ15cmである。SK－07は不整形な平面形で長軸1.6m、短軸70cm、深さ12cmを測る。SK－08は楕円形の平面で長軸70cm、短軸40cm、深さは30cmを測る。SK－09は細長い平面形の土坑で、長軸1.1m、短軸34cm、深さ10cmを測る。SK－10は長軸1.3m、短軸60cm、深さ35cmを測る。SK－11は幅1.3m、長さ3.1mの細長い土坑である。SK－12は幅1.2m、長さ3.1m、深さ40cmを測る。

溝状遺構について（ＳＤ－０３～ＳＤ－１０）第11図

SD－01は東西方向に向いて検出された幅25cm、長さ3.2m、深さ14cmの溝状遺構である。

SD－02はSB－02の南側で検出した。長さ2.7m、最大幅26cm、深さ20cmを測る。

SD－03からSD－05は、ほぼ同じ方向を向いて検出された溝状遺構である。SD－03は最大幅45cm、長さ1.6m、深さ16cmを測り、SD－04は最大幅60cm、長さ3.4m、深さ22cmを測る。SD－05は最大幅45cm、長さ2.0m、深さ15cmを測る。SD－06はＬ字型に曲がる溝で長さ3.2m、最大幅25cmを測る。

SD－07は、南北方向に伸びる幅30cm、長さ2.2m、深さ20cmの溝状遺構である。

SD－08～SD－10は調査区東端で検出した。SD－08は長さ1.6m、幅35cm、深さ15cmを測る。SD－09は長さ1.7m、幅50cm、深さ17cmを測る。SD－10は確認できた長さ1.2m、幅70cm、深さ９cmである。

Ⅱ区の出土遺物（第14図）

Ⅱ区からは土師器、須恵器が出土したが、実測可能であった須恵器を掲載した。

１～４は坏である。１，２は底面に回転糸きり痕、３，４は高台付き坏である。５は高台付き皿で、推定口径17.4cmである。６～８は高坏で、７は脚部に透かしを有する。８は高坏坏部で口縁がやや外反する。９は甕の口縁部、10は沈線のある頸部である。

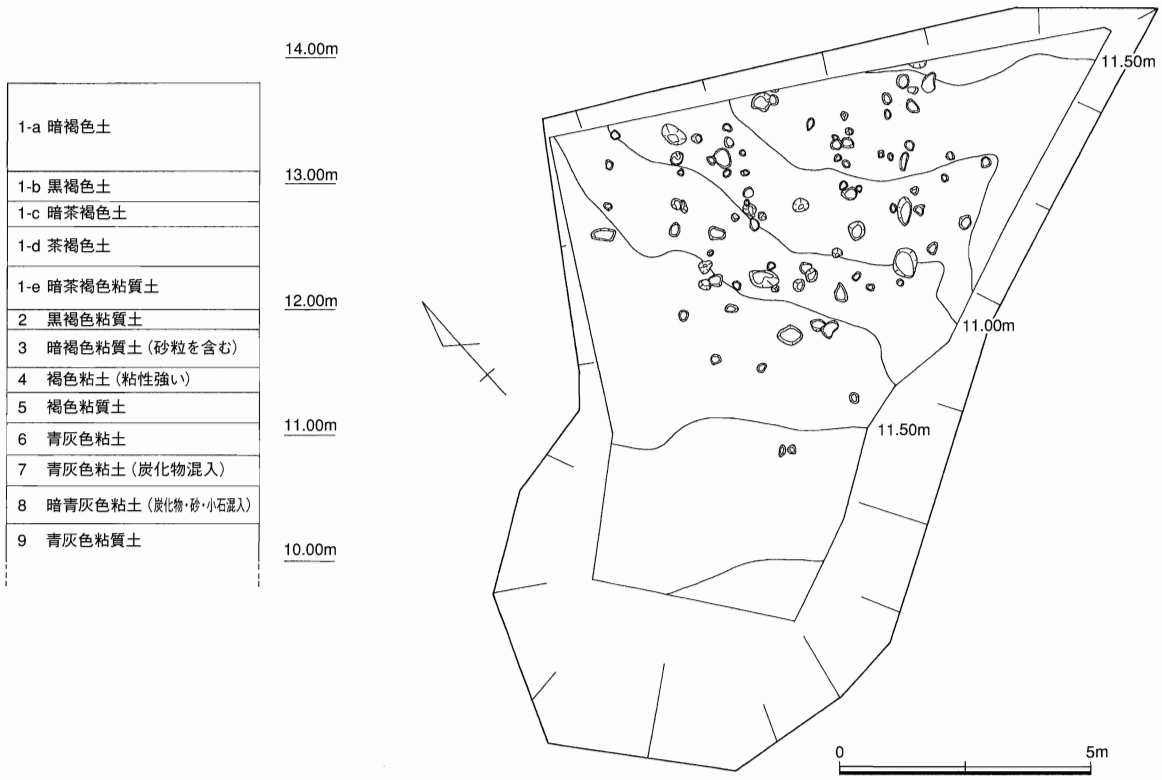
Ⅲ区の調査

Ⅲ区は遺跡の最も東側の調査区で、標高約11.0m～14.0mの南北に伸びる谷筋に調査区を設定した。谷筋は市道を挟んで北側に存在する御崎谷遺跡の一部に流れている。調査面積は約90㎡と狭い範囲であったが、堆積土は厚かった。

調査は、表土以下を掘り下げ、２層からはピット群を検出した。ピットは直径が15cmから50cmのものが多数確認された。配置関係から明確な建物跡としては考えられず、谷筋に位置していることもあり、何らかの簡易的な建物があった可能性が考えられる。土層堆積状況は９層あり、(第15図)、３層から多く遺物が出土した。

また、Ⅲ区の土層体積状況から周辺の古環境の調査を実施するため、㈱文化財調査コンサルタントにより自然化学分析を試みた。詳細は第３章で後述する。

遺物は、弥生時代後期から古墳時代後期にかけての土器で、周辺地形及びこの出土状況から流れ込みによって堆積したものと考えられ、南側の尾根筋や丘陵上方に遺構の存在を窺わせるものである。



第15図　玉泉寺裏遺跡Ⅲ区　ピット群及び土層堆積柱状図

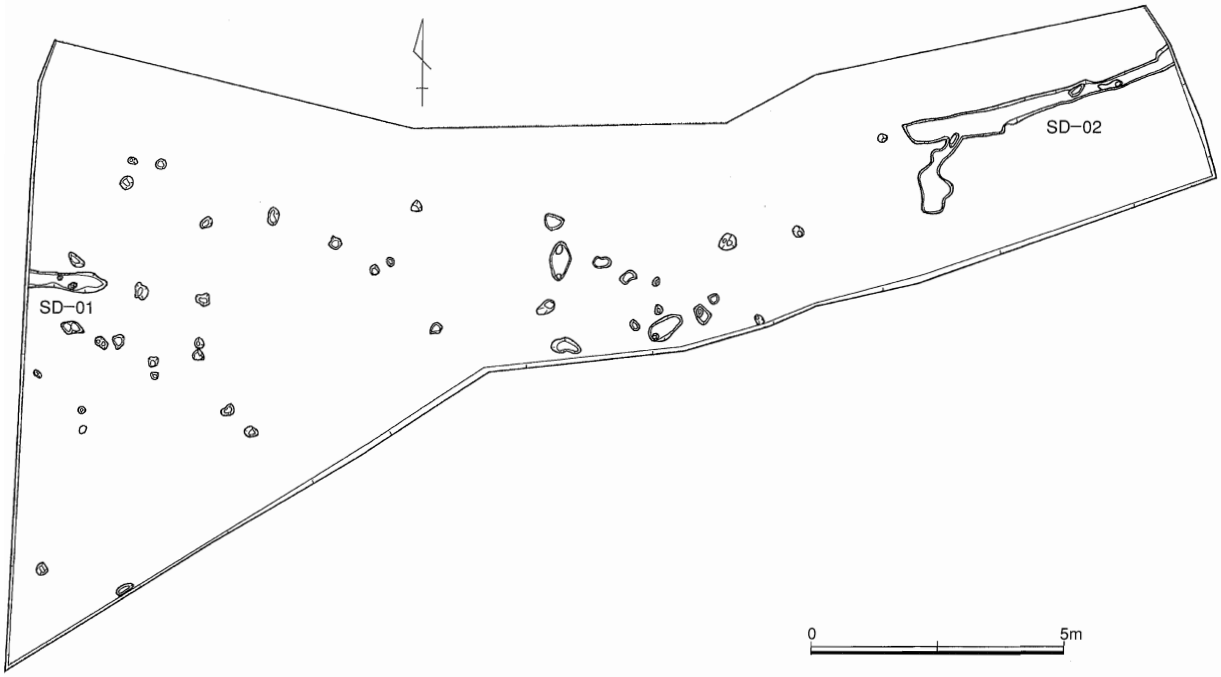
Ⅳ区の調査

遺跡内南側の標高約27m～32mに設定した約140㎡の調査区である。遺構面は地山で検出した溝状遺構（SD－01、02）とピット群で、急斜面に位置している。

SD－01は幅最大40cm、長さ1.5m、深さ最深15cmを測り、暗茶褐色粘質土が堆積していた。遺物は出土しなかった。

SD－02は幅最大55cm、長さ約6.0m、深さ最深20cmを測り、暗茶褐色粘質土が堆積していた。遺物は出土しなかった。

その他ピットを40基以上検出したが、何らかの建物が周辺に存在した可能性がある。



第16図　玉泉寺裏遺跡Ⅳ区遺構配置図

Ⅴ区の調査

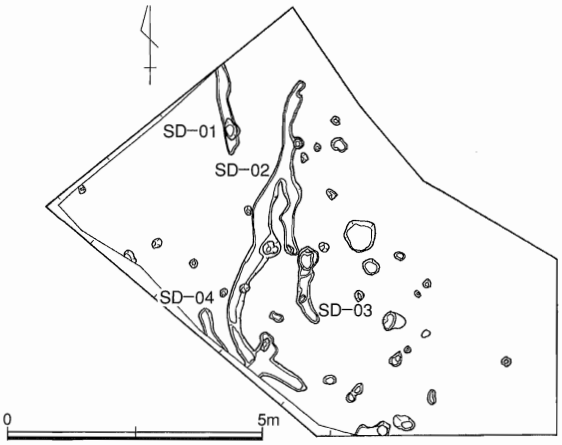
Ⅱ区・Ⅳ区の中間に位置する標高23m～24mに設定した約60㎡の調査区である。遺構は溝状遺構（SD－01～04）を４基検出した。Ⅴ区も遺構面は急斜面に位置しており、遺構は溝状を呈するが不整形で、その性格ははっきりしない。

SD－01は幅最大30cm、長さ1.2m、深さ最深15cmを測り、暗褐色粘質土が堆積していた。

SD－02は幅50cm、長さ約7.0m、深さ27cmを測り、暗褐色粘質土が堆積していた。

SD－03は幅26cm、長さ1.5m、深さ18cmを測り、暗褐色粘質土が堆積していた。

SD－04は幅20cm、長さ70cm、深さ８cmを測り、暗褐色粘質土が堆積していた。



第17図　玉泉寺裏遺跡Ⅴ区遺構配置図

遺物について

玉泉寺裏遺跡の遺構に伴わない遺物については、調査区を分けずに器種別に掲載したがⅢ区の出土遺物が中心である。（第18図～38図）

弥生土器（甕、器台）

口縁部外面に擬凹線を有するもの（第18図～20図）と、有さないもの（第21図～22図）とに大きく分けた。

18図の１～12及び19図の１は口縁外面に擬凹線を施し、口縁部の稜が下方を向くものである。口縁は緩やかに外傾し、端部は丸くおさめている。７～12は肩部に刺突文又は凹線が施されている。

第19図の１～４は口縁外面に擬凹線施すが、稜線がやや水平に近くなるものであり、肩部に文様を施さないものである。口縁端部は丸くおさめている。５～13は口縁の稜の向きが水平に近くなり、肩部に刺突文あるいは波状文を施すものである。

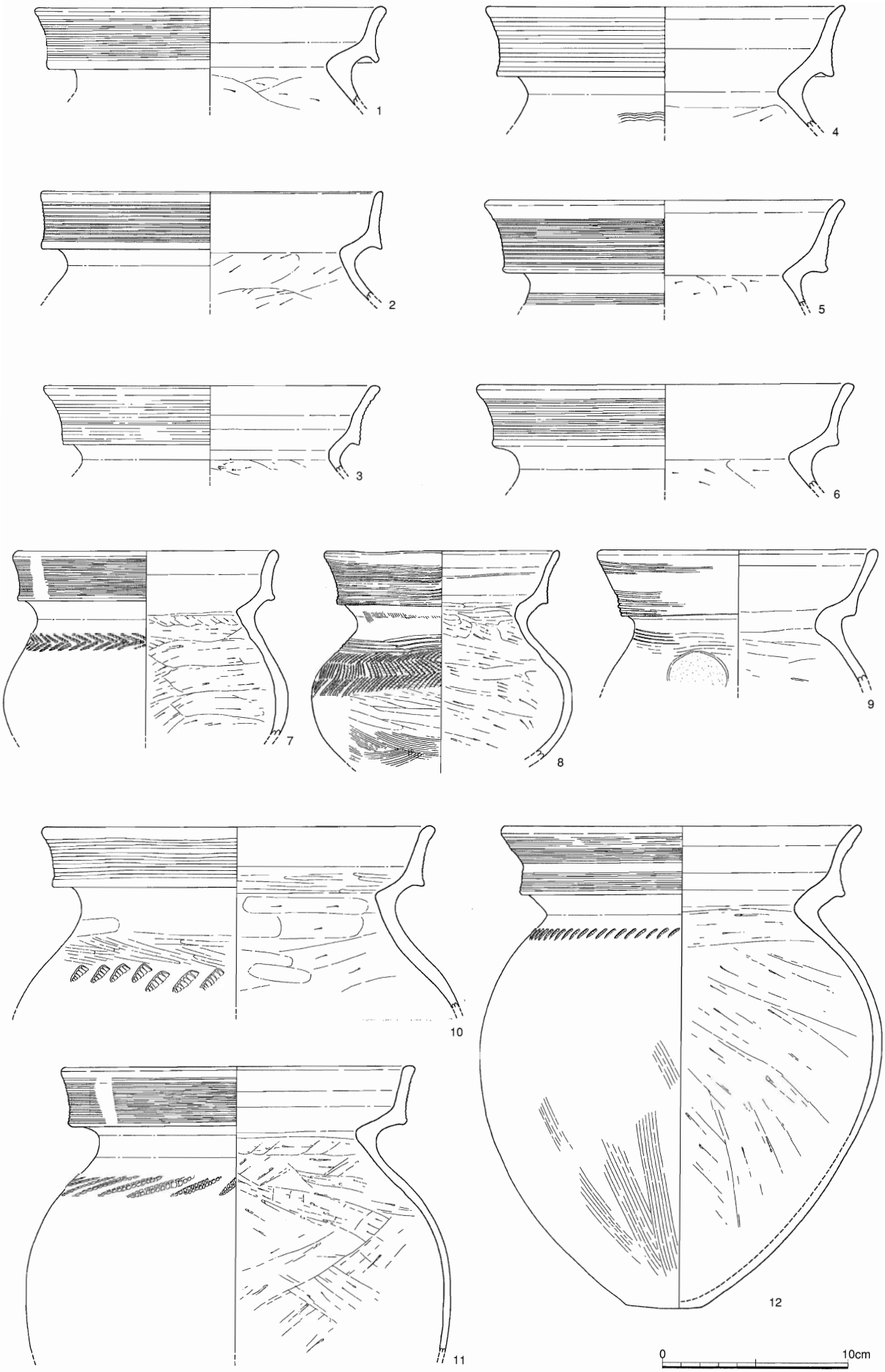
第20図はやや大きめの個体で、１は胴部の最大径24cmを測り、口縁部外面には擬凹線を有す。体部は櫛描き文及びヘラミガキが施されている。２は口径21.8cmを測り口縁外面に擬凹線、肩部外面に刺突文を施している。口縁部の稜は緩やかになり、端部はやや平らに仕上げている。

第21図は口縁部外面の擬凹線がないものである。１は体部外面、口縁内部共にミガキ調整している。口縁部の稜は下方を向いている。２～４、７は口縁部が外反し、肩部に波状文を施している。５～６は肩部に刺突文、８～９は体部外面にハケ目調整を行うものである。10は口径20.8cmの甕で、体部外面にハケ目調整の後、櫛描きによる波状文がある。複合口縁の稜は退化気味で、水平を向く。口縁端部はやや平らに仕上げている。

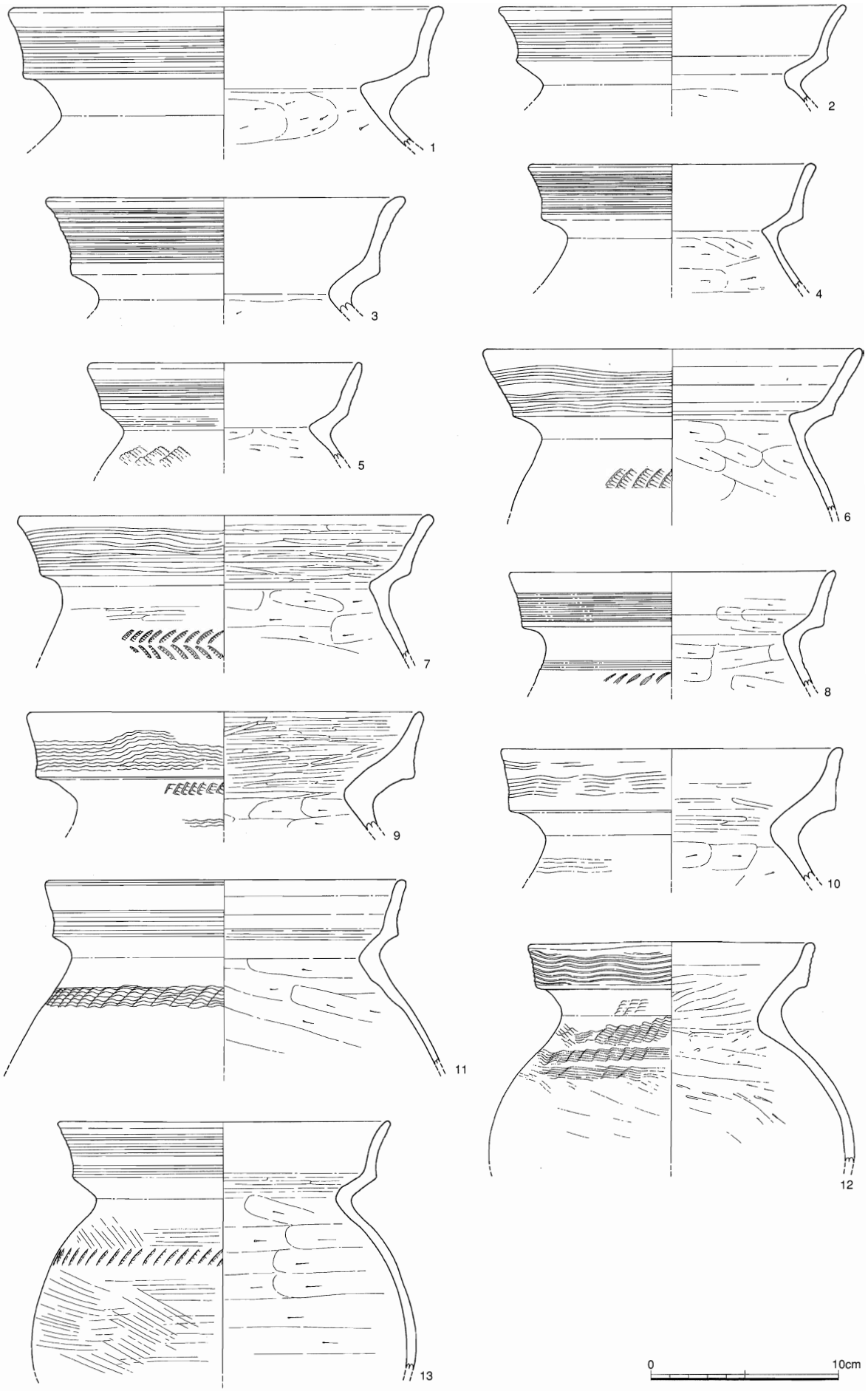
第22図１～３は、複合口縁の甕である。口縁部の稜は水平か、やや上向きに近くなる。端部は丸くおさめている。４～６は甕の底部である。いずれも残存状況は良くないが、４には内面に指頭圧痕がみられる。７～１０は鼓形器台である。７は受け部外面に櫛描文が見られ、７，８は筒部に櫛描文が見られる。９は外面櫛描文、内面ヘラミガキが施され、10は外面全体にヘラミガキ調整されている。

弥生土器・土師器（壷）

第23図１は長頸壷である。体部はそろばんの珠状であるが、最大径は中心より上方にあり、肩部が張る。胴部は最大18cmを測る。頸部はいったん内傾しながら上方に伸び、口縁端部で短く外傾し、開く。口縁端部は丸くおさめている。外面の調整は全体にヘラミガキが施され、頸部内面はヘラミガキ、体部はヘラケズリが施されている。胴部が張り、口縁部にかけて内傾するタイプの長頸壷は瀬戸内海地域に見受けられるが、本遺跡出土のものとは若干様相が異なり関連ははっきりしない。しかし、県内であまり見られないことから他地域との関連の可能性がある。時期は弥生時代後期頃のものと思われる。２は口径16cm、口縁は内傾し、水平に稜を有する。外面は肩部には沈線を施し、内面は体部ヘラケズリ、頸部には指頭圧痕がある。３は口径17.4cmの壷の口縁部である。内外面とも磨滅により調整は不明である。４は口径13.2cmを測る壷で、口縁部と頸部外面に波状文を施す。内面は体部ヘラケズリ、頸部はヘラミガキが施されている。口縁端部は丸くおさめる。５は口径17cm、「く」の字に外傾する壷で、口縁外面に緩やかな稜を持つ。６は頸部から立ち上がり気味に外傾する口縁をもつ壷甕である。口径16.6cm、口縁内面には指頭圧痕がある。口縁端部は丸くおさめている。



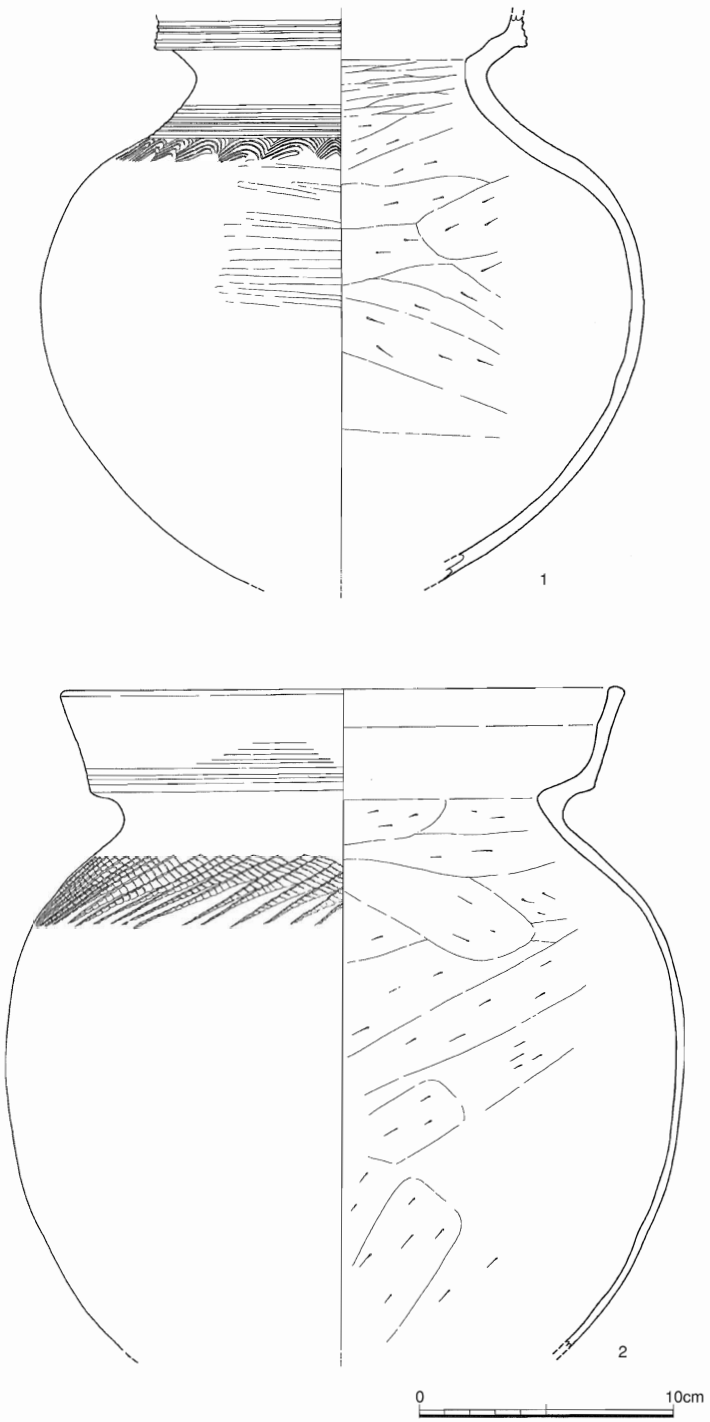
第18図　玉泉寺裏遺跡出土遺物実測図(1)



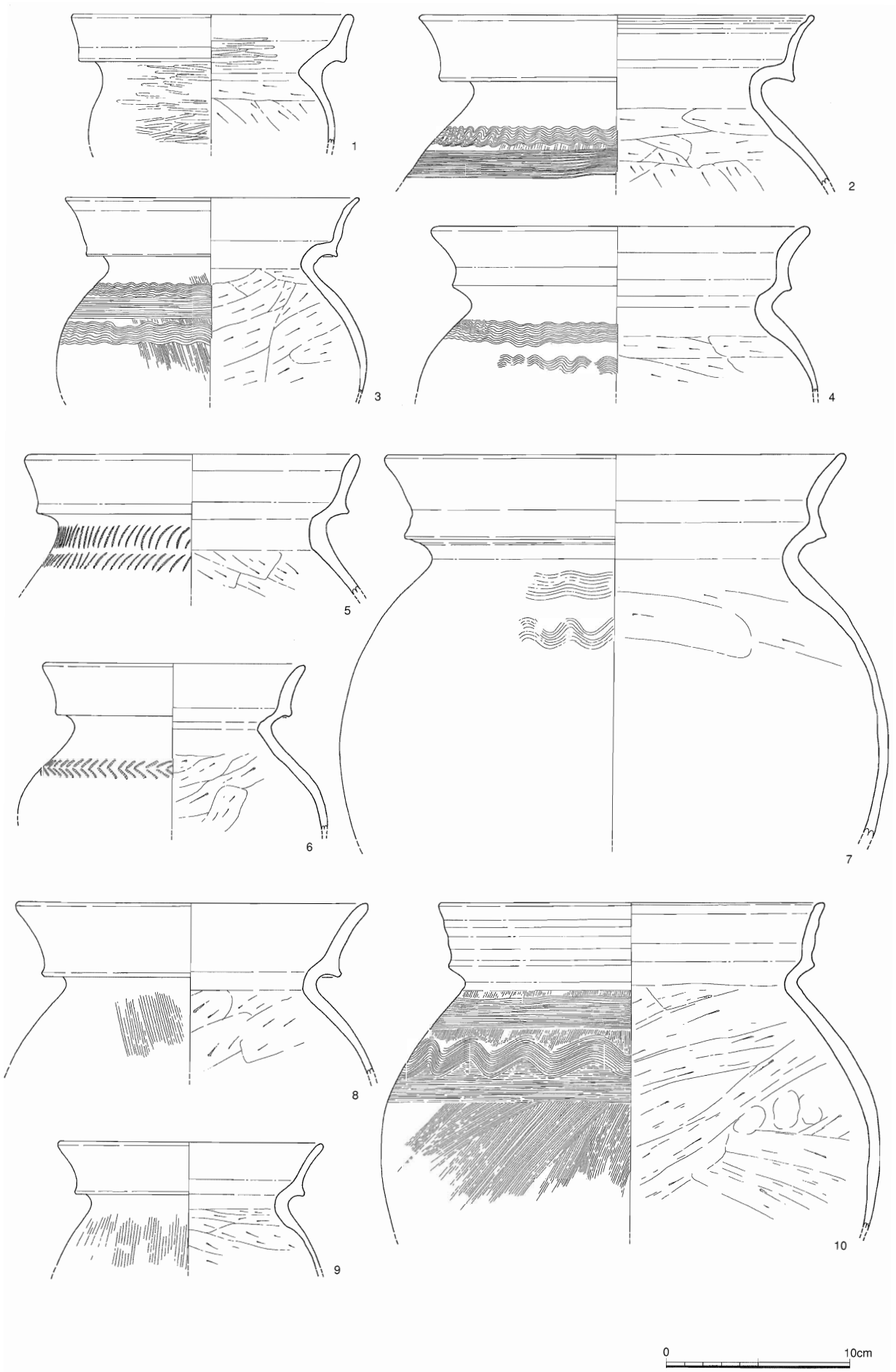
第19図　玉泉寺裏遺跡出土遺物実測図(2)

土師器

第24図はⅢ区で出土した、口径27cm、器高56.6cmを測る大型の甕である。複合口縁であるが、稜は突出せず、口縁部はわずかに外傾しながら長く立ち上がる。口縁端部はやや内湾し丸くおさめる。口縁部外面は縦方向のハケメ、体部外面は頸部付近が３cm～５cmほど横方向のハケメ、全体は縦方向のハケメで調整されている。内面体部はヘラケズリである。器壁は体部で全体に約２cmと厚い。他地域から搬入されたものか在地系のものかははっきりしない。時期は弥生時代から古墳時代前半にかけてのものと思われる。



第 20 図　玉泉寺裏遺跡出土遺物実測図(3)



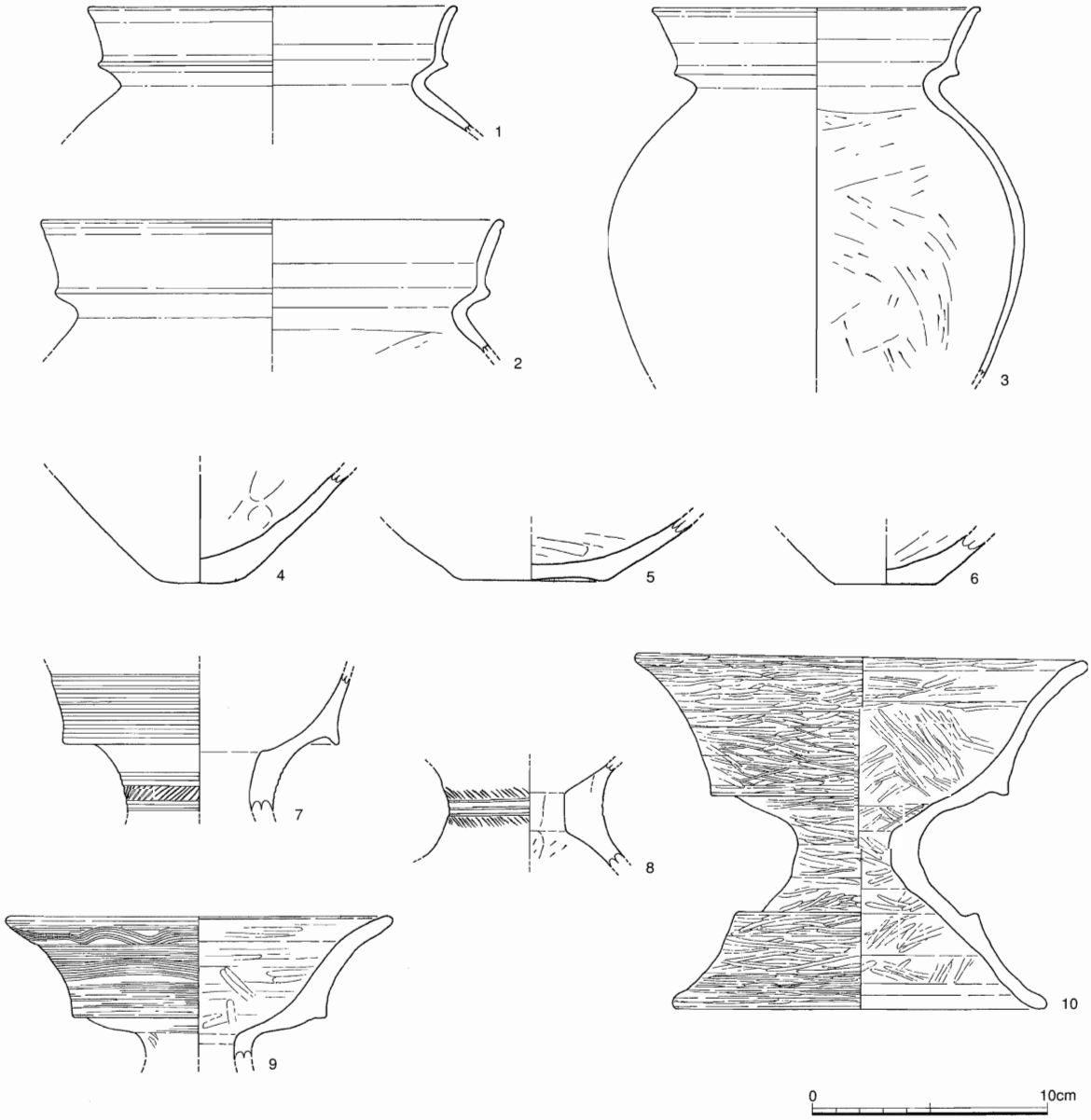
第 21 図　玉泉寺裏遺跡出土遺物実測図(4)

第25図は口縁端部に面を持ち、複合口縁の稜が水平か上向きになるものである。小谷式に該当する土器である。

１は口径37.6cmを測る大型の甕または鉢で、肩部に沈線が施されている。内面ヘラケズリである。２～３は複合口縁の甕の口縁部である。稜線は水平で端部は平坦面を持つ。４～５は稜がやや上方を向き、口縁端部に凹線を有するものである。６は複合口縁の壷である。頸部にはヘラ描きで羽状文を施している。また、肩部には約２cmの孔が穿たれている。底部は丸底である。

第26図及び第27図１～４はいわゆる大東式に該当する甕である。複合口縁の稜が退化し、単純口縁になる直前のものである。１は口縁が内傾するものである。２～４は口縁の中ほどからやや内傾し、端部を丸くおさめている。外面にハケメ、内面ヘラケズリの調整である。５～６は稜を持つものの、頸部から外傾していくもので、７～８は稜が退化している。第26図８及び第27図の１～４は口縁端部がわずかに内湾または外反するものである。

第27図５～８及び第28図は単純口縁の甕である。第27図及び第28図１～５までは体部が大きく張るものである。６～10は肩部が張らないタイプのものである。



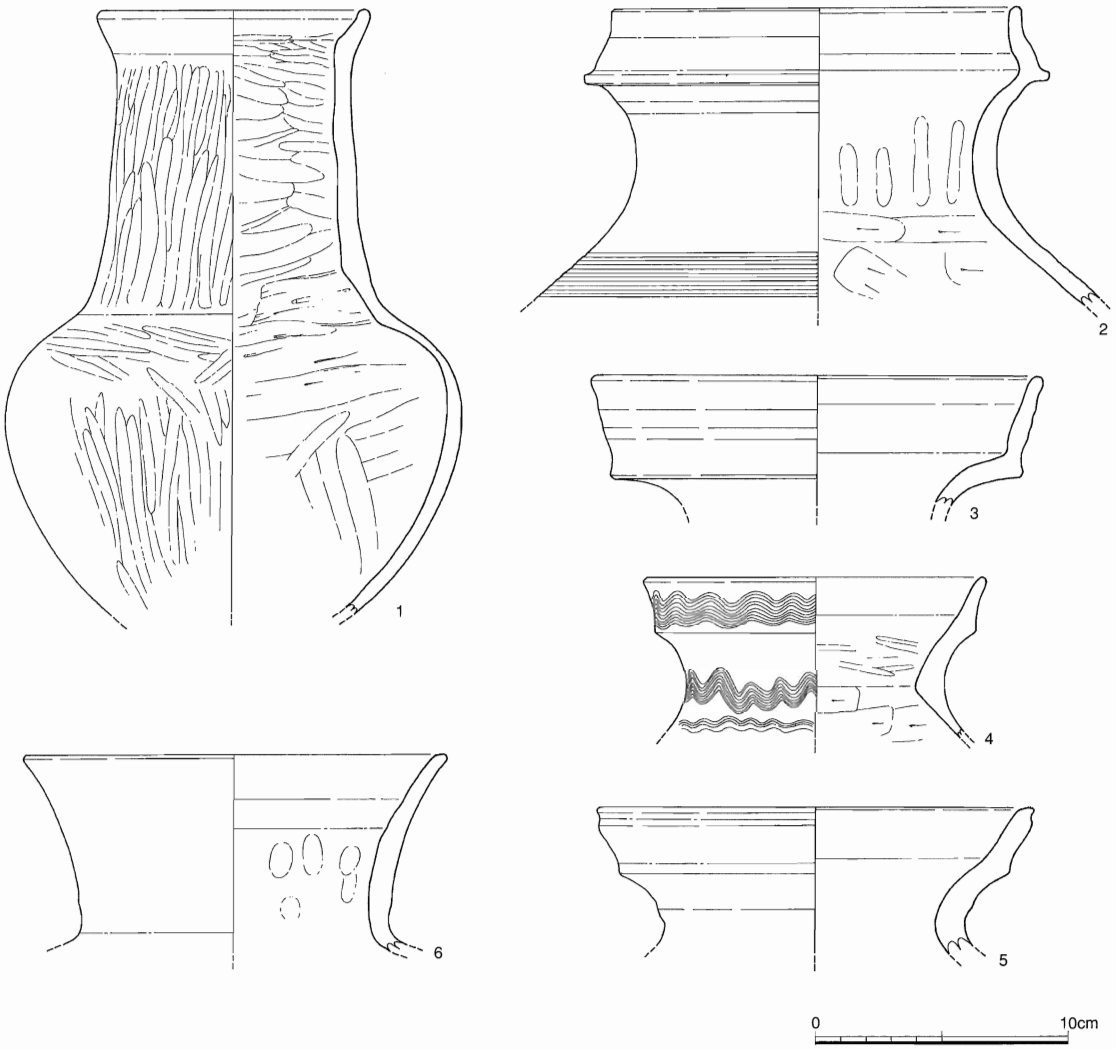
第 22 図　玉泉寺裏遺跡出土遺物実測図(5)

第29図は小型丸底壷である。いずれもⅢ区から出土している。１は口縁部がやや膨らみ厚みをもつ。３は頸部の括れが緩やかで「く」の字にはならない。

第30図は、鼓形器台である。器高は低く筒部も短いものである。３、４、６は脚部内面にヘラケズリがはっきりみえる。

第31図は高坏である。１～３は坏部の口縁部と体部の境に明瞭な段を有するもので、口縁部は外反する。端部は丸く収める。４～７は明瞭な段をもたないが体部との境が湾曲する。５、７は口縁端部がわずかに外反するものである。また、５は内外面、６は外面に赤色顔料を塗布している。８～10は脚部で、８、９は赤色顔料を塗布している。

第32図は低脚坏である。坏部が大きく皿状に開くものと、碗形のものがある。１は坏部が皿状に開き小型で器高は低い。脚部は「ハ」の字状に開く。２は脚部であるが坏部は１と同様なものと思われる。３は坏部が小さく開く。４～13は坏部が碗形になるものであり、脚部は「ハ」の字状に開くものである。４は内面底部に指頭圧痕が認められ、端部は丸く収めている。５は坏の端部にかけて器壁が厚くなる。６、７は「ハ」の字に開く脚部をもち、端部にかけて薄くなる。８～13は坏部と脚部の間が長くなるものである。９、11、12は外面にヘラミガキが施され、８、９、12は赤色顔料を塗布している。10の坏部は碗形で、内湾するが口縁端部は外反する。12、30は坏部が皿状で浅い。

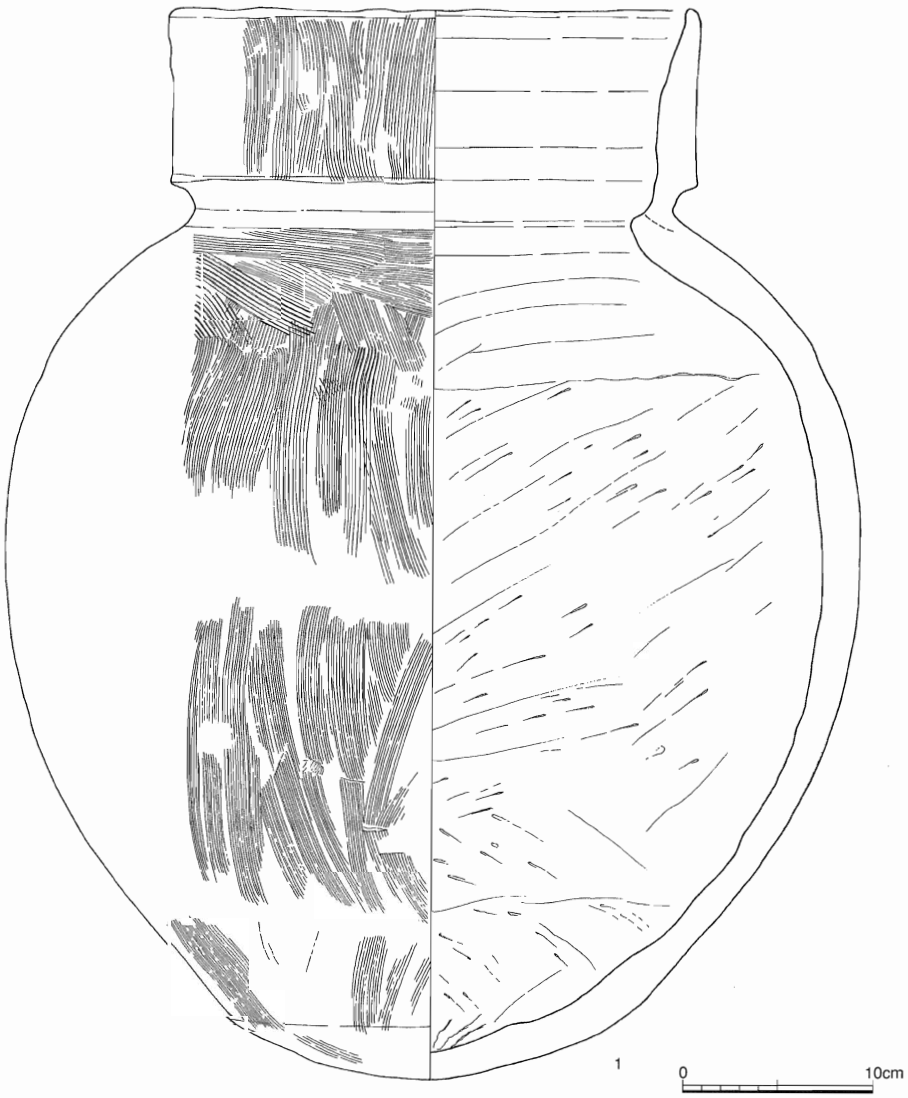


第 23 図　玉泉寺裏遺跡出土遺物実測図(6)

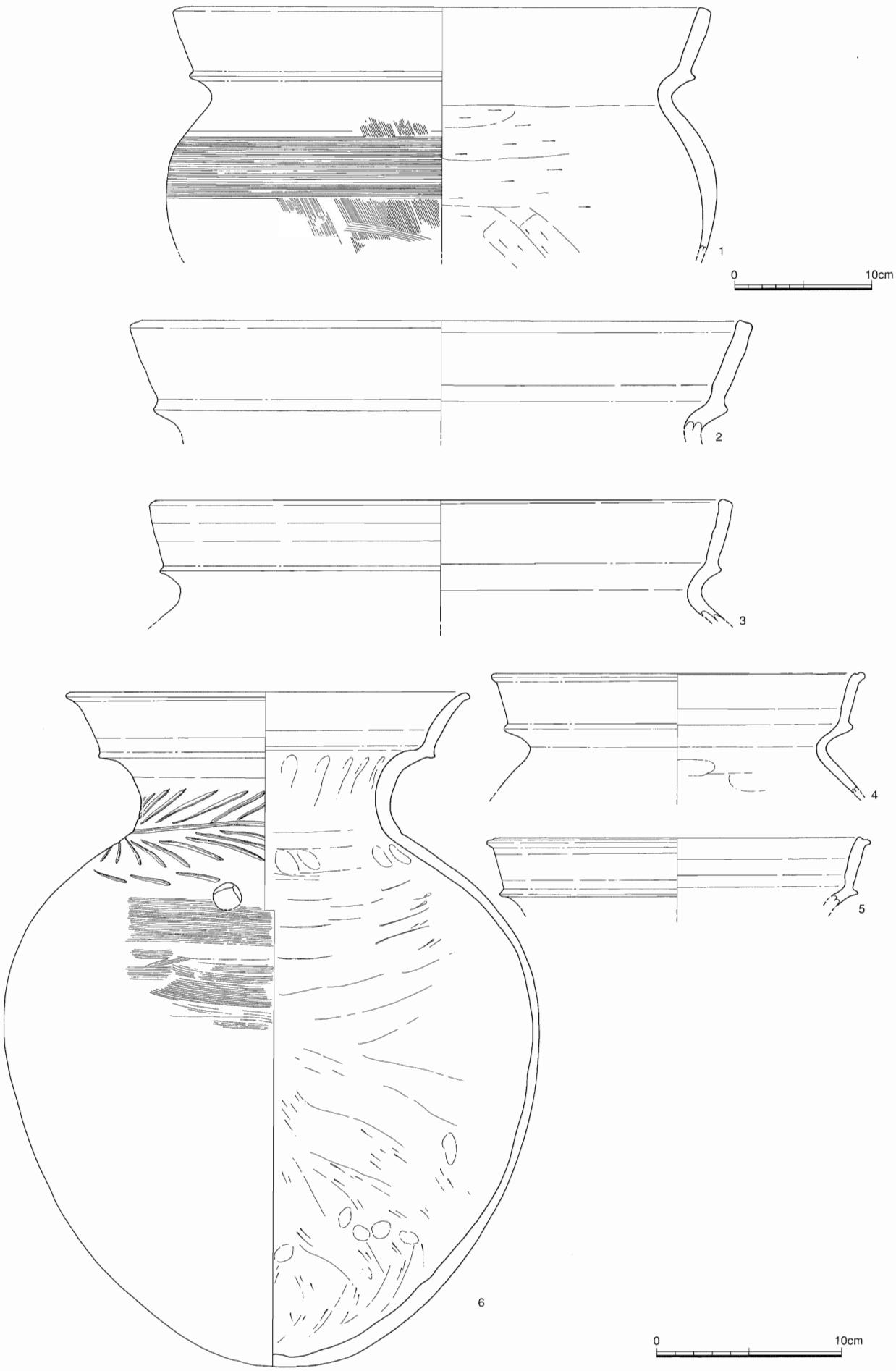
第33図及び第34図－１は甑である。第33図の１～３は把手部分である。３は、口縁部は外反し、把手の位置は真ん中よりやや上気味についているものと思われる。４は破片を反転復元したものであるが、孔が１箇所穿たれている。５～７はいずれも反転復元したものである。５の口縁は端部が外反し、６はやや外傾する。７の口縁端部は平坦になっている。第34図－１は径47.6cmを測る大型の甑である。

第34図の２～３は土製支脚である。受け部の突起が２方向に伸びるものである。２の器高は13.6cm、３の器高は15.5cmである。いずれも胴部背面孔が穿たれている。２は胴部の中空部分まで貫通しているが、３は非貫通である。４は竈である。内外面にナデ調整を施している。５は焙烙である。口径は推定31.6cmを測り、内外面ともナデ調整を施している。

第35図は坏である。１は口径13.4cm、器高4.8cmを測り、内外面ともナデ調整を施す。底部の器壁は厚く1.4cmあり、緩やかに外傾し口縁部は丸くおさめる。２は口径13.4cm、器高6.0cmを測る。外面はハケメ調整、内面はナデである。内外面とも全体に赤色顔料が塗布されている。３は口径11.5cm、器高4.3cmを測る。口縁にかけて強く内湾し、口縁端部は丸く収めている。内外面とも磨滅が著しいが一部に赤色顔料が見られる。４は口径16.0cmを測る。口縁にかけて内湾するが、端部はわずかに外反する。内面に赤色顔料が見られる。

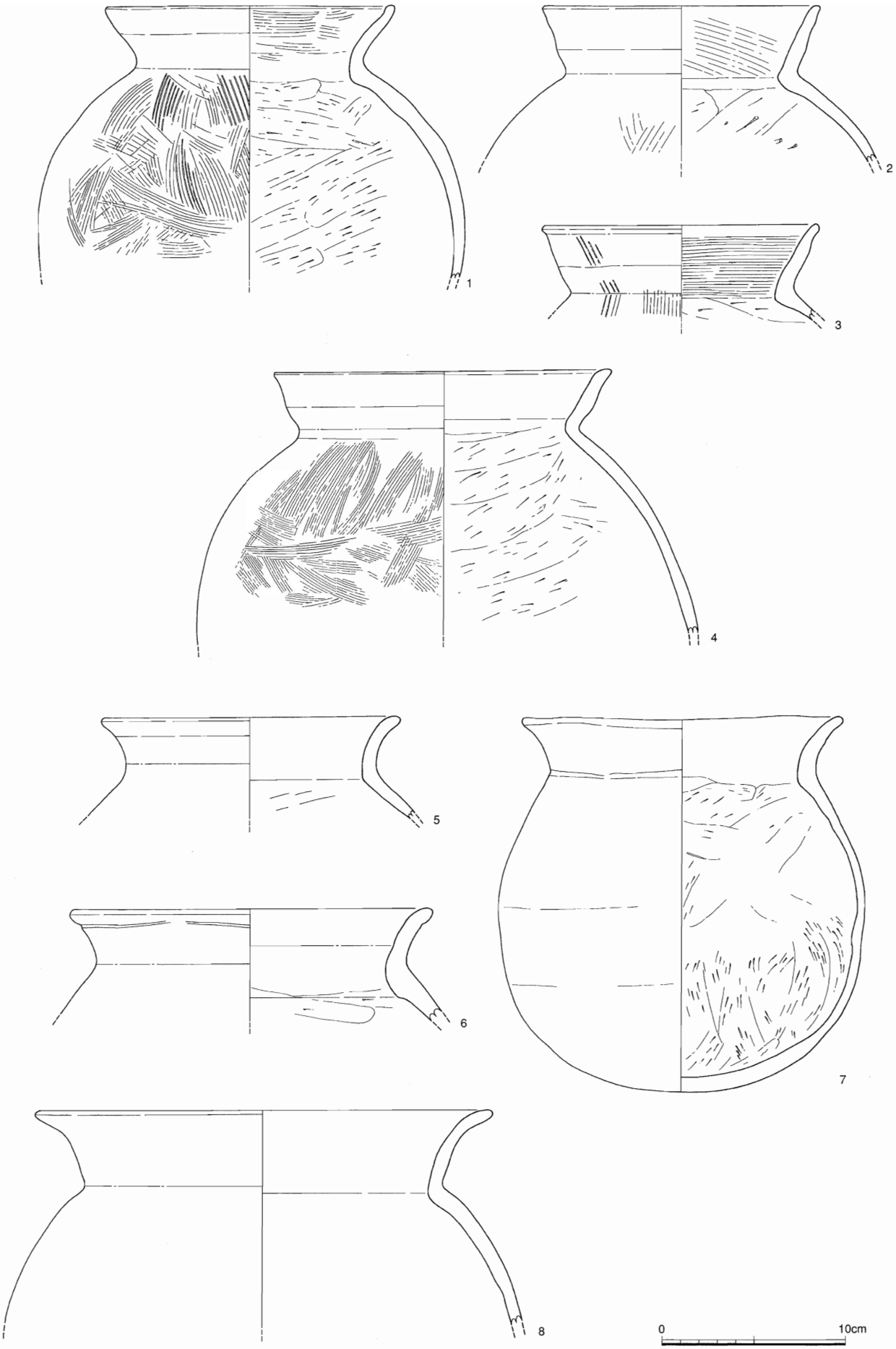


第 24 図　玉泉寺裏遺跡出土遺物実測図(7)

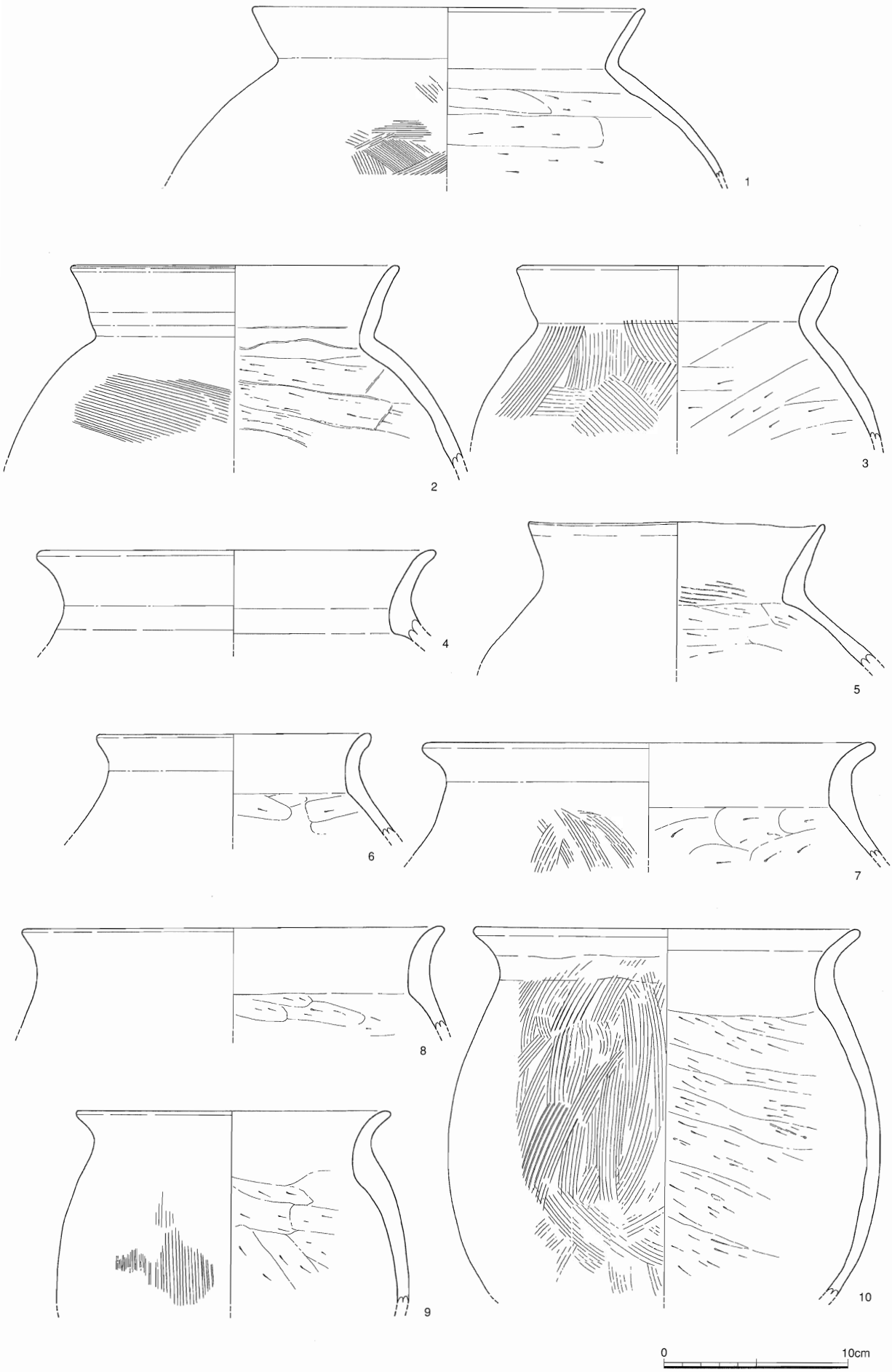


第 25 図　玉泉寺裏遺跡出土遺物実測図(8)

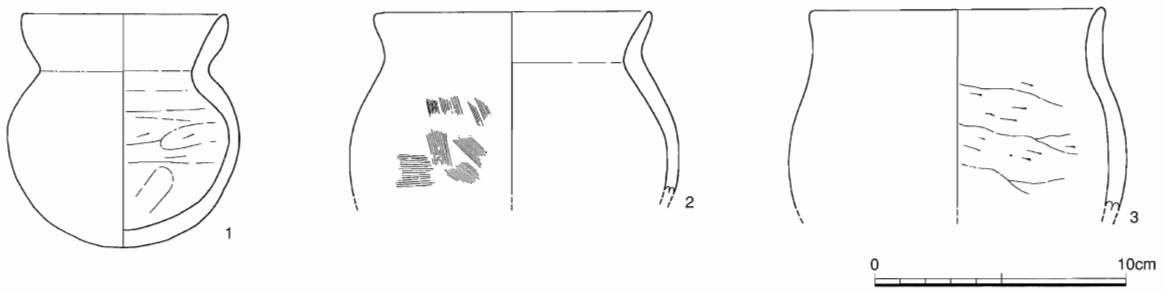
第 26 図　玉泉寺裏遺跡出土遺物実測図(9)



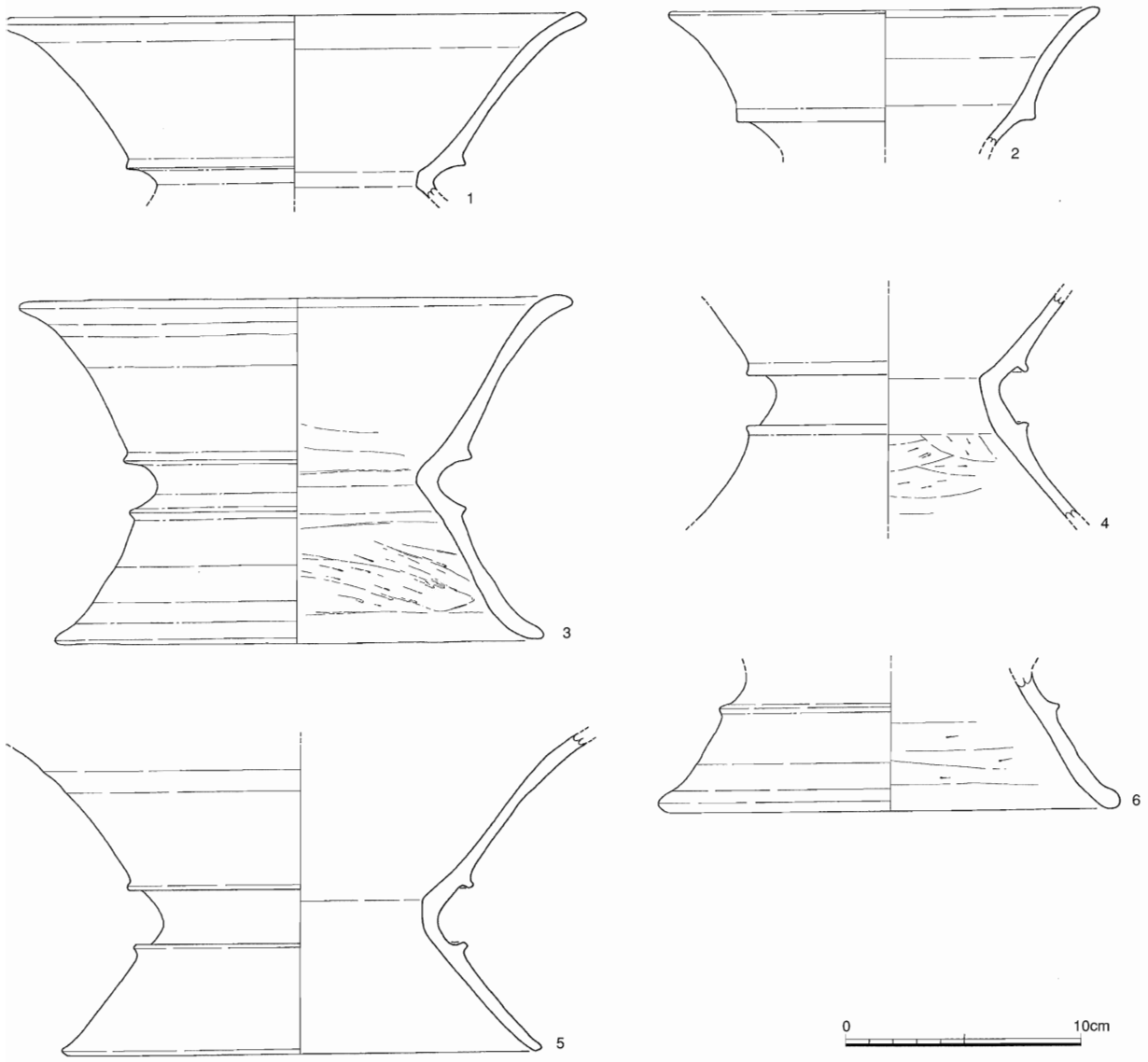
第 27 図　玉泉寺裏遺跡出土遺物実測図(10)



第 28 図　玉泉寺裏遺跡出土遺物実測図(11)



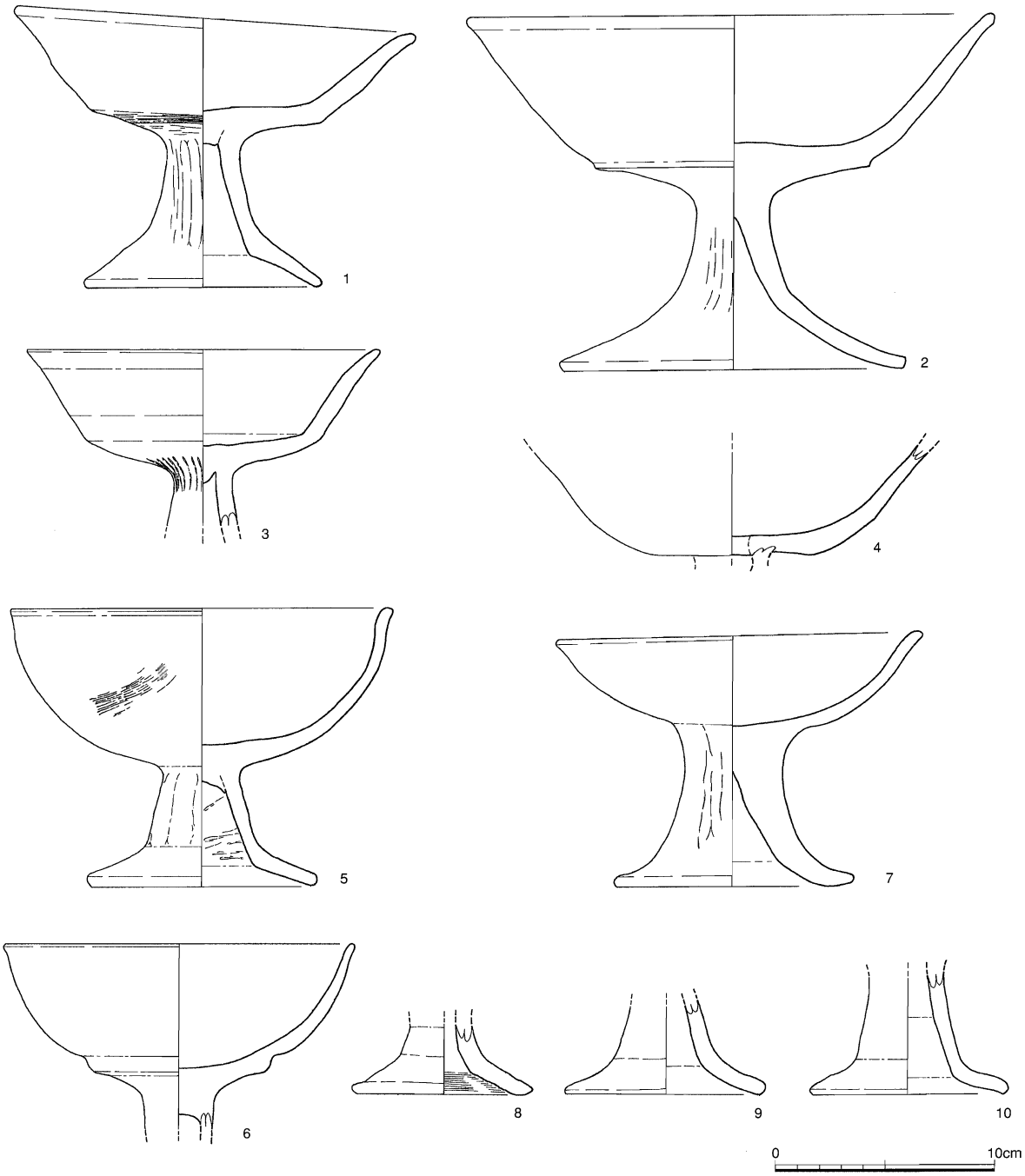
第 29 図　玉泉寺裏遺跡出土遺物実測図(12)



第 30 図　玉泉寺裏遺跡出土遺物実測図(13)

土師質土器

第36図は坏、皿である。１は底径4.2cm、２は底系5.0cmを測る。共に磨滅しているが、２は外面底部に回転糸切り痕がわずかに見られる。３は口径15.0cm、器高4.4cm、底径4.5cmで、外面底部は回転糸切りである。４は小型の皿である。口径7.6cm、器高2.0cm、底径5.9cmを測る。外面底部は静止糸切り痕がわずかに見られる。５は高台付の坏である。内面はナデ調整、外面は磨滅している。



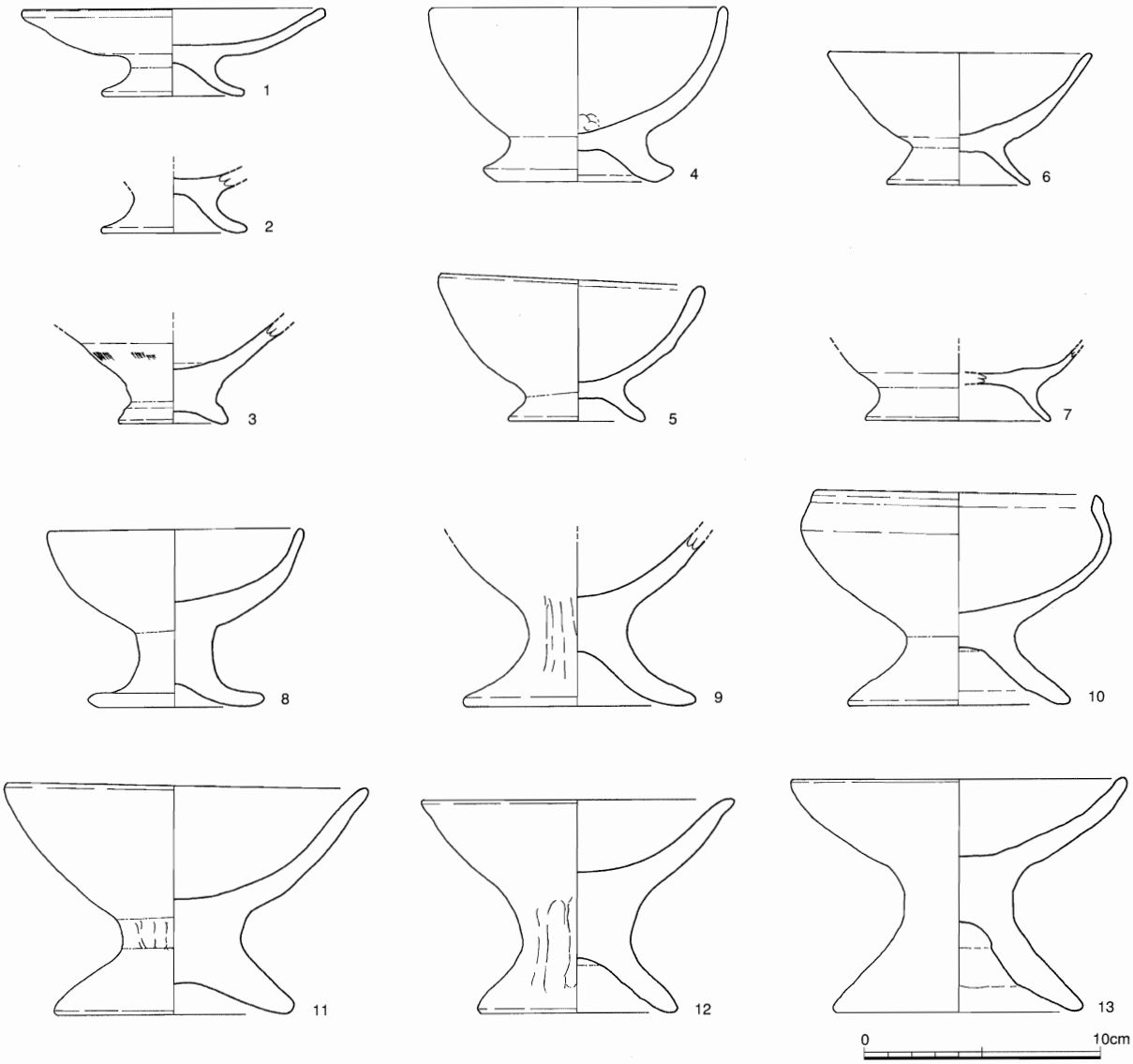
第 31 図　玉泉寺裏遺跡出土遺物実測図(14)

土製品（第37図）

１は手捏ね土器である。口径3.8cm、器高2.5cmを測る。外面はナデ、内面は指頭圧痕が残っている。

土錘は遺跡全体で６点出土した。いずれもⅢ区の出土である。２～４は小型で細い土錘である。法量は、２は長さ2.8cm、最大径1.3cm、４は最大径1.5cmである。孔径はいずれも0.4cm前後である。５～７は丸くやや大きめの土錘である。５は最大径3.5cm、孔径0.9cmを測る。６は最大径2.9cm、孔径0.7cmを測る。７は長さ4.7cm、最大径2.6cm、孔径1.0cmを測る。

８、９は紡錘車である。８は最大径5.2cm、孔径0.9cm、９は最大系５cm、孔径0.8cmを測り、一部に沈線が施されている。



第 32 図　玉泉寺裏遺跡出土遺物実測図(15)

須恵器（第38図）

１～７は坏蓋である。１～４は肩部に稜を有す。１は器高4.5cm、１、２とも口径12cm前後で、口縁端部にわずかに段をもつ。３は口径13.6cm、つまみをもつものである。４は口径13.8cm、５は口径14.4cm、肩部の稜は緩くなり口縁端部は丸く収める。６、７は輪状つまみのある蓋である。

８～16は坏身である。受け部の立ち上がりは低く、出雲５期から６期にかけての坏身である。16は身としたが、蓋である可能性もある。17は平底の坏である。18～21は高坏である。18は坏部口径13.2cm、19は口径13.3cm、21は口径14.6センチ、脚部に２方向に透かしを持つ。20は反転復元したが、脚部に透かしを２方向に持っていたものと思われる。

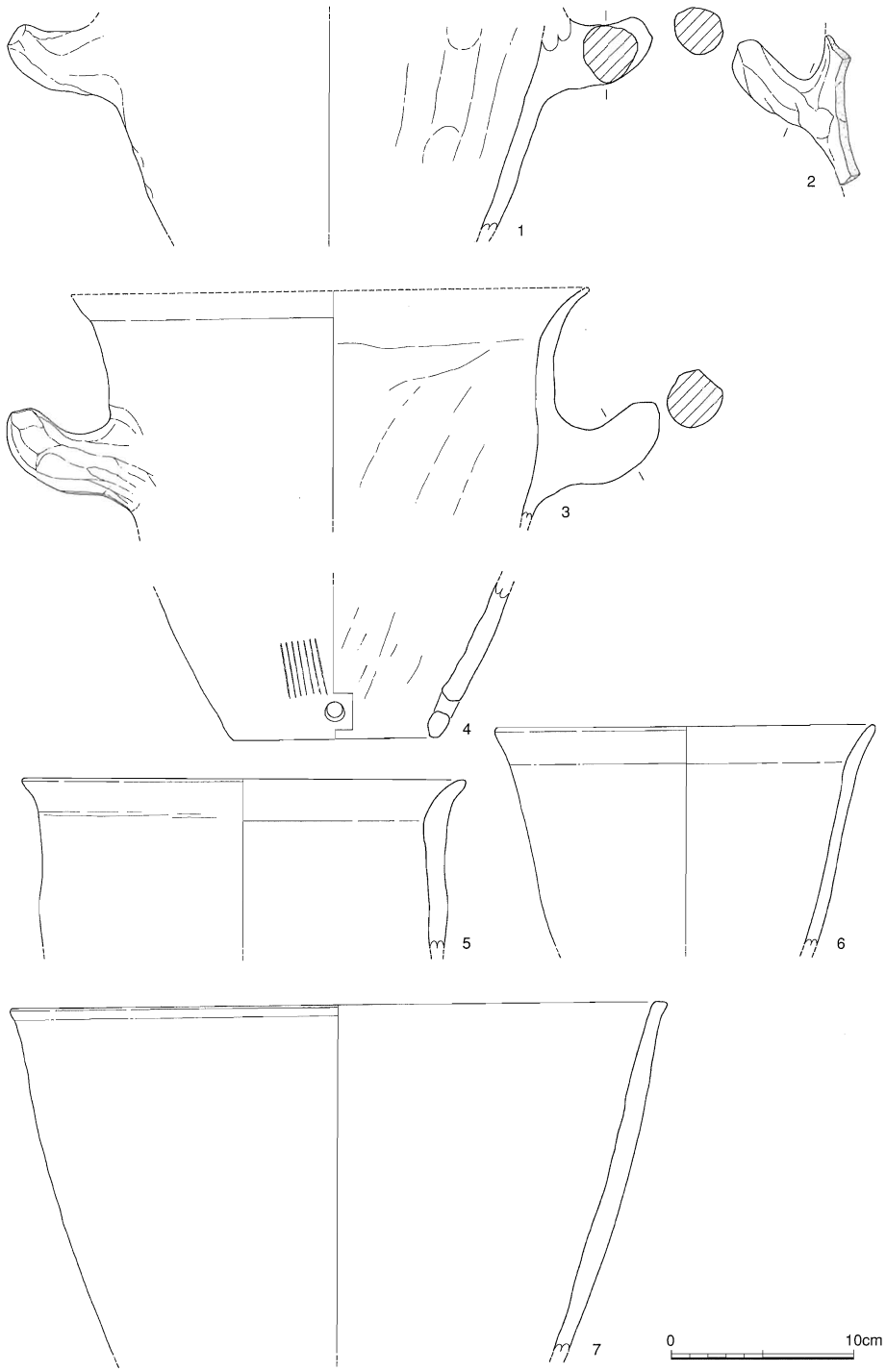
22、23は長頸壷の体部、24は壷の底部である。22は口径9.0cm、外面頸部に波状紋を施す。口縁端部は丸い。24は底径11.2cm、高台付の壷である。

25は口径12.8cmを測る甕である。

まとめ

玉泉寺裏遺跡からは、弥生時代後期から中世にかけての遺物が出土し、古墳時代前期の埋葬施設及び古墳時代後期の住居跡などの遺構が検出された。本遺跡は、断続的であるものの出雲西部の人々の生活の営みを知ることのできる複合遺跡であった。

調査区は主に北向きの丘陵斜面で、後世の削平が進み遺構面がカットされている状況であったため、住居跡や建物跡については規模や配置が明確にできなかったが、古墳時代後期頃にはこの周辺の丘陵部に人々の生活の営みがあったことを窺い知ることができる。また、漁具などの出土遺物からは、海辺が身近であったことも想像される。そして、本遺跡の周りには九景川遺跡や御崎谷遺跡



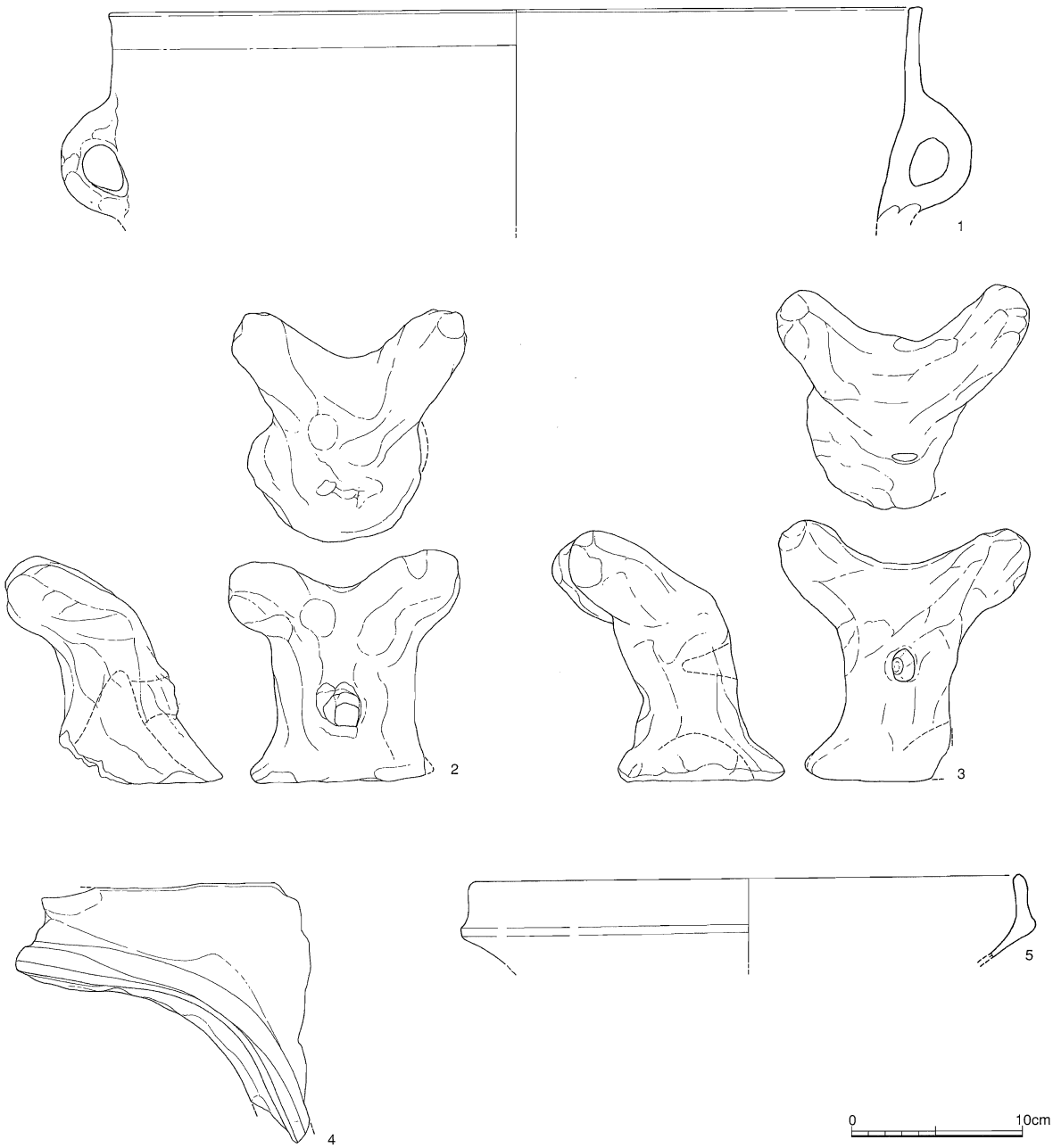
第 33 図　玉泉寺裏遺跡出土遺物実測図(16)

が存在し、遺構や多量の遺物が出土していることから、ある程度の規模の集落がこの周辺に存在していたと思われる。

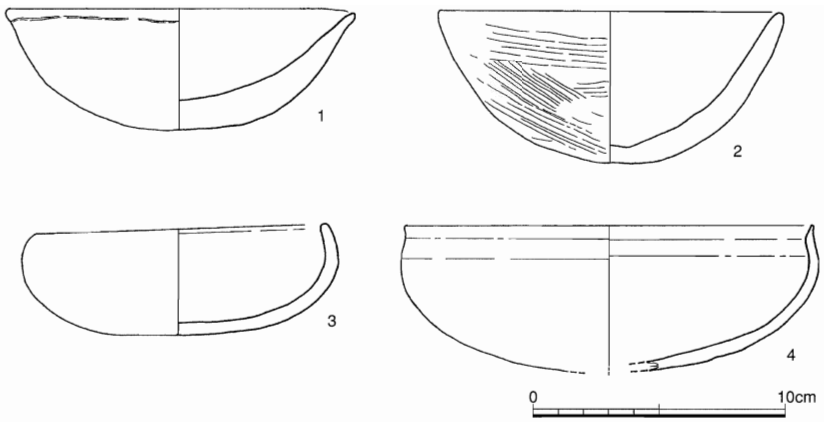
また、今回調査Ⅰ区で確認された弥生時代末から古墳時代初頭頃の土壙墓については、周辺の古墳時代前期から中期にかけての古墳である、浅柄Ⅱ古墳、山地古墳、間谷東古墳、浜井場古墳群、丁之内古墳などに先行するものであり、当地域での埋葬形態を知る上で貴重な資料となった。弥生時代後期から古墳時代前期頃の遺物が多かったことから、今後は、さらに実施される周辺の調査とともに出雲西部地域の時代背景について検討していくことが望まれる。

参考文献

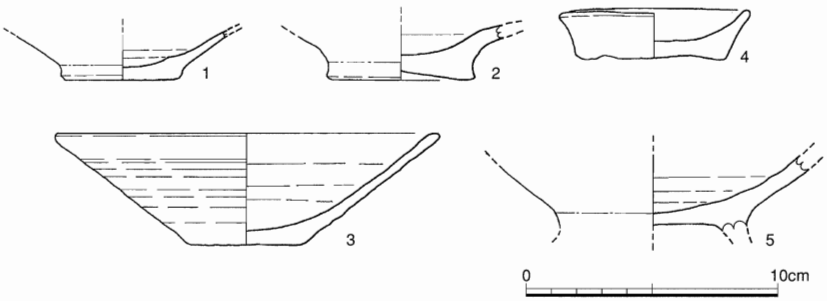
出雲市教育委員会　1986『山地古墳発掘調査報告書』
出雲市教育委員会　2005『浜井場古墳群発掘調査報告書』
出雲市教育委員会　2000『西出雲駅南土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　浅柄遺跡』
岩橋孝典　2003「山陰地域の古墳時代後期～奈良時代の炊飯具について」『古代文化研究』第11号、島根県古代文化センター　55～82頁
大谷晃二　1994「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』第11集　39～82頁



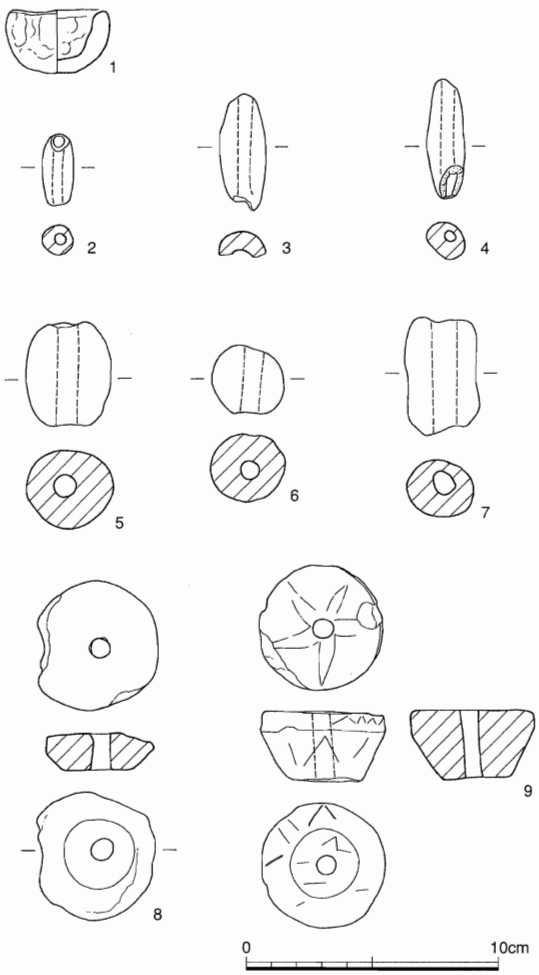
第34図　玉泉寺裏遺跡出土遺物実測図(17)



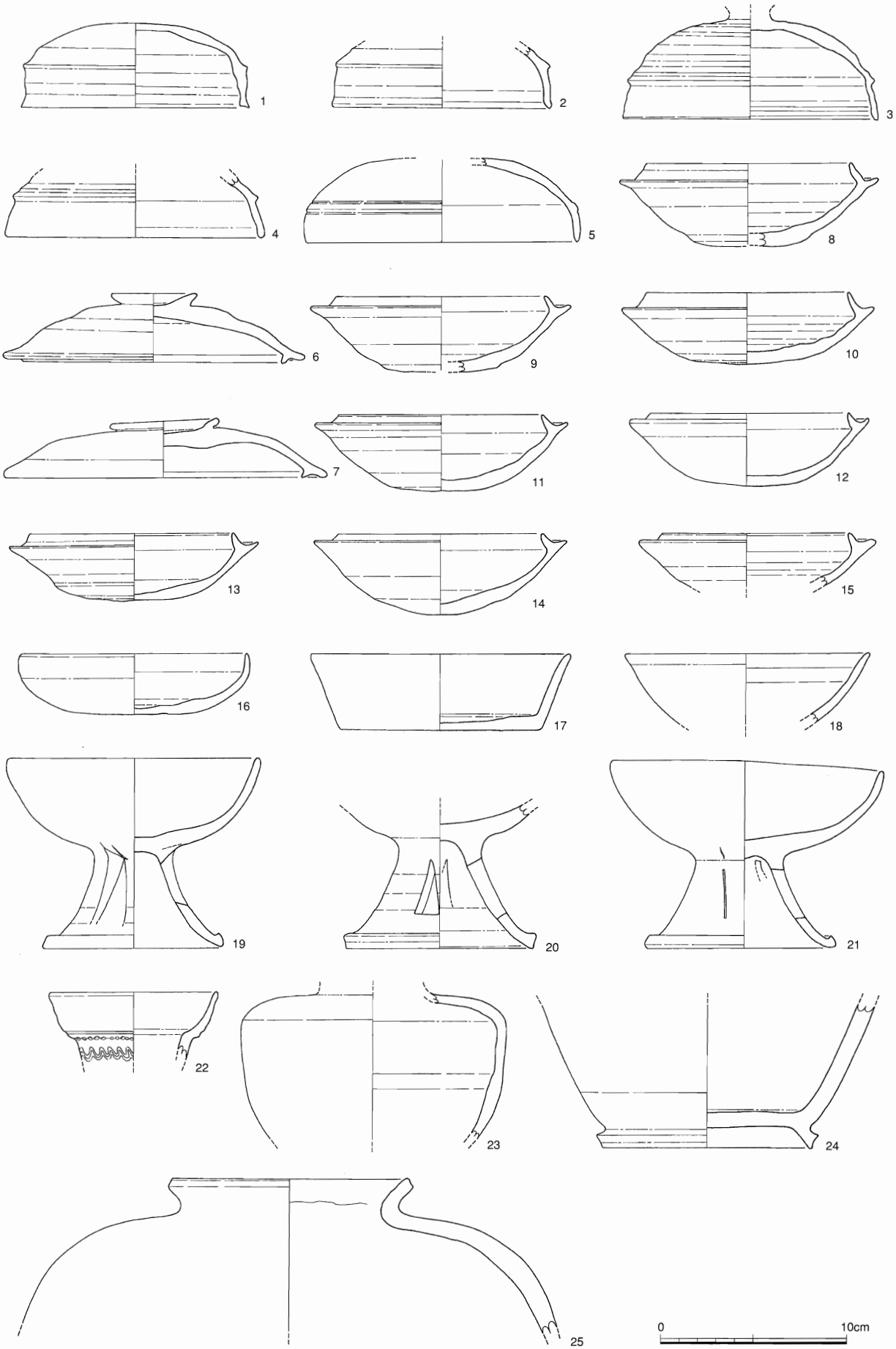
第 35 図　玉泉寺裏遺跡出土遺物実測図(18)



第 36 図　玉泉寺裏遺跡出土遺物実測図(19)



第 37 図　玉泉寺裏遺跡出土遺物実測図(20)



第 38 図　玉泉寺裏遺跡出土遺物実測図(21)

玉泉寺裏遺跡出土遺物観察表

挿図番号	調査区	出土地点	種別	器種	法量（単位：cm）			形態・調整の特徴		文様の特徴	色調	胎土	備考
					口径	底径	器高	外面	内面		色		
7－1	Ⅰ	SI01	土師器	小型丸底壷	9.2		9.2	ナデ、ハケ目	ナデ		明赤褐色	1mm以下の砂粒を微量含む	
7－2	Ⅰ	SI01	土師器	小型丸底壷	9.2			ナデ	ナデ、ヘラケズリ		鈍い黄橙色	1mm以下の砂粒を若干含む	
7－3	Ⅰ	SI01	土師器	小型丸底壷				ナデ、ハケ目	ナデ、指頭圧痕		鈍い黄橙色	1mm以下の砂粒を微量含む	
7－4	Ⅰ	SI01	土製品	支脚		10	15.5	ナデ			橙色	1～2mmの砂粒を多く含む	
7－5	Ⅰ	SI01	土製品	支脚				磨滅			橙色	1～2mmの砂粒を多く含む	
10－1	Ⅰ	SK02	土師器	甕	22			ナデ	ナデ		浅黄色	1mm以下の砂粒を含む	
10－2	Ⅰ	SK02	土師器	甕				ナデ	ナデ、ヘラケズリ	沈線紋、刺突紋	浅黄色	1mm以下の砂粒を多く含む	
10－3	Ⅰ	SK02	土師器	低脚坏				磨滅	磨滅		淡橙色	1mm以下の砂粒を微量含む	
10－4	Ⅰ	SK02	土師器	鼓形器台	23.4			ナデ	ヘラミガキ、ヘラケズリ		鈍い黄橙色	1mm以下の砂粒を多く含む	受部脚部は図面上で合成
10－5	Ⅰ	SK02	土師器	鼓形器台			19	ナデ	ナデ、ヘラケズリ		浅黄色	2mm以下の砂粒を多く含む	
10－6	Ⅰ	SK02	石			径：9.5	長さ：17.5				浅黄色		
13－1	Ⅱ	SK01	須恵器	甕	27.6			回転ナデ、タタキ目	回転ナデ、当て具痕		青灰色	1mm以下の砂粒を微量含む	
13－2	Ⅱ	SK01	須恵器	蓋	14			回転ナデ、ヘラケズリ後ナデ	回転ナデ		灰白色	1mm以下の砂粒を微量含む	
13－3	Ⅱ	SK05	土師質土器	坏	10.3	5.6	2.1	ナデ	ナデ		橙色	1mm以下の砂粒を若干含む	
13－4	Ⅱ	SK05	土師質土器	坏	7.4	5.4	1.65	ナデ、糸切り後ナデ	ナデ		鈍い橙色	1mm以下の砂粒を微量含む	
14－1	Ⅱ	2層	須恵器	坏	12		3.4	回転ナデ、ヘラ切り痕	回転ナデ		緑灰色	1mm以下の砂粒を微量含む	
14－2	Ⅱ	2層	須恵器	坏	15.6	8.4	4.7	回転ナデ、回転糸切り	回転ナデ、ナデ		緑灰色	1mm以下の砂粒を微量含む	
14－3	Ⅱ	2層	須恵器	高台付坏		11.2		回転ナデ、回転糸切り後ナデ	ナデ		オリーブ灰色	1mm以下の砂粒を微量含む	
14－4	Ⅱ	2層	須恵器	高台付坏		9.6		回転ナデ	回転ナデ、ナデ		緑灰色	1mm以下の砂粒を微量含む	
14－5	Ⅱ	2層	須恵器	高台付皿	17.4	14	3.5	回転ナデ	回転ナデ		オリーブ灰色	1mm以下の砂粒を微量含む	
14－6	Ⅱ	2層	須恵器	高坏		9.8		回転ナデ	回転ナデ		外：暗緑灰色 内：灰色	1mm以下の砂粒を微量含む	
14－7	Ⅱ	2層	須恵器	高坏		9.8		回転ナデ	ナデ		灰白色	1mm以下の砂粒を微量含む	2方向に三角形のスカシ有り、坏部内面にヘラ記号×
14－8	Ⅱ	南側トレンチ	須恵器	高坏	13.7			回転ナデ	回転ナデ		青灰色	1mm以下の砂粒を若干含む	
14－9	Ⅱ	2層	須恵器	横瓶				回転ナデ	回転ナデ、タタキ		外：灰オリーブ色 内：青灰色	1mm以下の砂粒を微量含む	外面に釉付着
14－10	Ⅱ	2層	須恵器	甕か				回転ナデ	回転ナデ	沈線紋	外：黒灰色 内：淡灰色	1mm以下の砂粒を微量含む	
18－1	Ⅲ	8層上面	弥生	甕	18.5			ナデ	ナデ、ヘラケズリ	擬凹線（貝）	にぶい黄褐色	1mm以下の砂粒を若干含む	外面に一部煤痕
18－2	Ⅲ	8層上面	弥生	甕	18.4			ナデ	ナデ、ヘラケズリ	擬凹線	浅黄色	1mm以下の砂粒を多く含む	外面に一部煤痕・赤彩付着
18－3	Ⅲ	西側トレンチ	弥生	甕	17.8			ナデ	ナデ、ヘラケズリ	擬凹線（貝）	灰黄色	1mm以下の砂粒を多く含む	外面に一部煤痕
18－4	Ⅲ	3層	弥生	甕	19.1			磨滅	ヘラケズリ	擬凹線、波状紋	灰黄色	1mm以下の砂粒を若干含む	
18－5	Ⅲ	西側トレンチ	弥生	甕	19.1			ナデ	ナデ、ヘラケズリ	擬凹線	黄灰色	2mm以下の砂粒を多く含む	外面に一部煤痕
18－6	Ⅲ	西側トレンチ	弥生	甕	20			ナデ	ナデ、ヘラケズリ	擬凹線	浅黄色	1mm以下の砂粒を多く含む	外面に一部煤痕
18－7	Ⅲ	8層上面	弥生	甕	14			ナデ	ナデ、ヘラケズリ	擬凹線、刺突紋	外：黒褐色 内：灰黄色	1mm以下の砂粒を微量含む	外面に煤痕
18－8	Ⅲ	8層上面	弥生	甕	12.3			ミガキ、ハケ目	ヘラケズリ	擬凹線、刺突紋	にぶい黄橙色	1mm以下の砂粒を多く含む	外面に一部煤痕

挿図番号	調査区	出土地点	種別	器種	法量（単位：cm）			形態・調整の特徴		文様の特徴	色調	胎土	備考
					口径	底径	器高	外面	内面		色		
18－9	Ⅲ	8層上面	弥生	甕	14.7			磨滅	磨滅	擬凹線	浅黄橙色	2mm以下の砂粒を多く含む	把手の跡有りか
18－10	Ⅲ	西側トレンチ	弥生	甕	20.8			ナデ、ヘラミガキ、ヘラケズリ	ヘラミガキ、ヘラケズリ	擬凹線、刺突紋（櫛状工具による）	にぶい黄橙色	1mm以下の砂粒を多く含む	
18－11	Ⅲ	8層上面	弥生	甕	18.8			ナデ	ナデ、ヘラケズリ	擬凹線、刺突紋	にぶい黄色	2mm大の砂粒を多く含む	外面に一部煤痕
18－12	Ⅲ	8層上面	弥生	甕	19.2	4.2	26.2	ナデ、ハケ目	ナデ、ヘラケズリ	擬凹線、刺突紋	灰黄色	1mm大の砂粒を多く含む	両面に煤痕
19－1	Ⅲ	西側トレンチ	弥生	甕	22.8			ナデ	ナデ、ヘラケズリ	擬凹線	浅黄橙色	1mm以下の砂粒を多く含む	
19－2	Ⅲ	8層上面	弥生	甕	18.2			磨滅	ヘラケズリ	擬凹線	外：暗灰黄色 内：灰黄色	1mm以下の砂粒を多く含む	外面に一部煤痕
19－3	Ⅲ	西側トレンチ	弥生	甕	19			ナデ	ナデ、ヘラケズリ	擬凹線	灰黄色	1mm以下の砂粒を多く含む	外面に一部煤痕
19－4	Ⅲ	8層上面	弥生	甕	15			ナデ	ナデ、ヘラケズリ	擬凹線	灰黄色	1mm以下の砂粒を多く含む	
19－5	Ⅲ	西側トレンチ	弥生	甕	14.3			櫛状工具によるナデ	ナデ、ヘラケズリ	擬凹線、刺突紋	にぶい黄橙色	1mm以下の砂粒を多く含む	外面に一部煤痕
19－6	Ⅲ	東西トレンチ	弥生	甕	20			ナデ	ナデ、ヘラケズリ	擬凹線、刺突紋	にぶい黄橙色	1mm以下の砂粒を多く含む	
19－7	Ⅲ	東西トレンチ	弥生	甕	22			ナデ、ヘラミガキ	ヘラミガキ、ヘラケズリ	擬凹線、羽状紋（貝殻状工具による）	にぶい黄橙色	1mm以下の砂粒を多く含む	外面に一部煤痕
19－8	Ⅲ	6層	弥生	甕	17.4			ナデ	ナデ、ヘラケズリ	擬凹線、沈線紋、刺突紋	外：褐灰色 内：褐灰色	1mm以下の砂粒を多く含む	
19－9	Ⅲ	西側トレンチ	弥生	甕	21			ナデ	ヘラミガキ、ヘラケズリ	擬凹線、刺突紋	外：灰黄色 内：黄灰色	2mm以下の砂粒を多く含む	外面に一部煤痕
19－10	Ⅲ	4層上面	弥生	甕	18.2			磨滅	ヘラミガキ、ヘラケズリ	擬凹線	灰黄色	2mm以下の砂粒を多く含む	
19－11	Ⅲ	西側トレンチ	弥生	甕	19			ナデ	ナデ、ヘラケズリ	擬凹線、波状紋（櫛状工具による）	灰黄色	1mm以下の砂粒を多く含む	
19－12	Ⅲ	東西トレンチ	弥生	甕	15			ナデ	ナデ、ミガキ、ヘラケズリ	擬凹線、波状紋	にぶい黄橙色	2mm以下の砂粒を含む	外面口縁端部に一部赤彩
19－13	Ⅲ	8層上面	弥生	甕	17.6			ナデ、ハケ目	ナデ、ヘラミガキ、ヘラケズリ	擬凹線、刺突紋（櫛状工具による）	灰黄色	1mm以下の砂粒を多く含む	外面に一部煤痕
20－1	Ⅲ	西側トレンチ	弥生	甕				ナデ、ミガキ	ナデ、ヘラケズリ、ヘラミガキ	擬凹線（貝）、波状紋、沈線紋	灰白色	1mm以下の砂粒を多く含む	外面に一部煤痕
20－2	Ⅲ	6層	弥生	甕	21.8			ナデ	ナデ、ヘラケズリ	擬凹線、押し引き紋	明黄褐色	1mm以下の砂粒を多く含む	外面口縁端部に一部赤彩
21－1	Ⅲ	西側トレンチ	弥生	甕	15			ナデ、ハケ目	ナデ、ミガキ、ヘラケズリ		明褐灰色	2mm以下の砂粒を多く含む	外面に一部煤痕
21－2	Ⅲ	東西トレンチ	弥生	甕	21.2			ナデ、ハケ目	ナデ、ヘラケズリ	波状紋、櫛描き平行沈線	灰黄色	1mm以下の砂粒を多く含む	
21－3	Ⅲ	5層	弥生	甕	15.6			ナデ、ハケ目	ナデ、ヘラケズリ	波状紋、櫛描き沈線	にぶい橙色	1mm以下の砂粒を多く含む	
21－4	Ⅲ	西側トレンチ	弥生	甕	20.1			ナデ	ナデ、ヘラケズリ	波状紋	浅黄橙色	1mm以下の砂粒を多く含む	
21－5	Ⅲ	西側トレンチ	弥生	甕	17.8			ナデ	ナデ、ヘラケズリ	刺突紋（貝殻による）	にぶい黄橙色	1mm以下の砂粒を若干含む	両面に一部赤彩
21－6	Ⅲ	東西トレンチ	弥生	甕	14			ナデ	ナデ、ヘラケズリ	刺突紋（貝殻による）	浅黄色	1mm以下の砂粒を若干含む	外面に煤痕
21－7	Ⅲ	4層	弥生	甕	24.8			ナデ、ハケ目	ナデ、ヘラケズリ	波状紋	にぶい橙色	1mm以上の砂粒を多く含む	
21－8	Ⅲ	東西トレンチ	弥生	甕	19			ナデ、ハケ目	ナデ、ヘラケズリ		灰黄色	1mm以下の砂粒を微量含む	

挿図番号	調査区	出土地点	種別	器種	法量（単位：cm）			形態・調整の特徴		文様の特徴	色調	胎土	備考
					口径	底径	器高	外面	内面		色		
21－9	Ⅲ	東西トレンチ	弥生	甕	14.2			ナデ、ハケ目	ナデ、ヘラケズリ		灰白色	1mm以下の砂粒を多く含む	外面に一部煤痕
21－10	Ⅲ	8層上面	土師器	甕	20.8			ナデ、ハケ目	ナデ、ヘラケズリ、指頭圧痕	平行沈線、波状紋	浅黄橙色	1mm大の砂粒を多く含む	外面に黒斑有り
22－1	Ⅲ	3層	土師器	甕	15.4			磨滅	磨滅		淡黄色	1mm大の砂粒を若干含む	
22－2	Ⅲ	3層	土師器	甕	19.2			磨滅	磨滅、ヘラケズリ		にぶい黄橙色	1mm大の砂粒を多く含む	内面に一部煤痕
22－3	Ⅲ	3層	土師器	甕	13.7			磨滅	ヘラケズリ		灰白色	1mm以下の砂粒を含む	
22－4	Ⅲ	6層	弥生	甕（底部）		3.4		磨滅	ヘラケズリ		灰黄褐色	1mm以下の砂粒を多く含む	外面に一部煤痕
22－5	Ⅲ	西側トレンチ	弥生	甕（底部）		6		磨滅	ヘラケズリ		褐灰色	1mm以下の砂粒を多く含む	外面に一部煤痕
22－6	Ⅲ	西側トレンチ	弥生	甕（底部）		4.3		磨滅	ヘラケズリ		灰黄褐色	2mm以下の砂粒を多く含む	外面に一部煤痕
22－7	Ⅲ	4層	弥生	器台				ナデ	ナデ	擬凹線、刺突紋、羽状紋	灰白色	1mm以下の砂粒を微量含む	
22－8	Ⅲ	4層上面	弥生	器台				ナデ	ナデ、ヘラケズリ	沈線、刺突紋	灰白色	1mm以下の砂粒を多く含む	
22－9	Ⅲ	東西トレンチ	弥生	器台	16			ナデ	ヘラミガキ ナデ	凹線	灰黄色	2mm以下の砂粒を多く含む	両面に微量の赤彩
22－10	Ⅲ	8層上面	弥生	器台	18.8	15.5	15.1	ナデ、ミガキ	ナデ、ミガキ		浅黄橙色	2mm大の砂粒を若干含む	
23－1	Ⅲ	8層上面	弥生？（後期）	長頸壺	10.4			ナデ、ミガキ	ナデ、ヘラケズリ		にぶい黄橙色	1mm以下の砂粒を若干含む	
23－2	Ⅲ	8層上面	弥生	壺	16			磨滅	指頭圧痕、ヘラケズリ	平行沈線	灰白色	1mm以下の砂粒を多く含む	外面に一部煤痕
23－3	Ⅲ	4層上面	弥生	甕	17.4			磨滅	磨滅		灰黄色	1mm以下の砂粒を多く含む	
23－4	Ⅲ	西側トレンチ	弥生	甕	13.2			ナデ	ナデ、ミガキ、ヘラケズリ	波状紋	灰黄色	1mm以下の砂粒を多く含む	
23－5	Ⅲ	3層	土師器	甕	17			磨滅	磨滅		灰白色	1mm以下の砂粒を含む	
23－6	Ⅲ	3層	土師器	甕	16.6			磨滅	ナデ、指頭圧痕		灰黄色	1mm以下の砂粒を多く含む	両面に一部煤痕、外面に一部赤彩
24－1	Ⅲ	3層	土師器	甕	27		56.6	ナデ、ハケ目	ナデ、ヘラケズリ		淡黄色、一部：橙色	2mm前後の砂粒を多く含む	
25－1	Ⅲ	4層	土師器	甕	37.6			ナデ、ハケ目	ナデ、ヘラケズリ		淡黄色	1mm以下の砂粒を多く含む	
25－2	Ⅲ	3層	土師器	甕	32.6			磨滅	磨滅		にぶい黄橙色	1mm以下の砂粒を多く含む	
25－3	Ⅲ	4層	土師器	甕	40.1			ナデ	磨滅		にぶい黄橙色	1mm大の砂粒を含む	
25－4	Ⅲ	3層	土師器	甕	19.3			磨滅	ヘラケズリ		灰白色	1mm以下の砂粒を多く含む	口縁部に凹線
25－5	Ⅲ	西側トレンチ	土師器	甕	19.8			ナデ	ナデ		浅黄色	1mm大の砂粒を多く含む	
25－6	Ⅲ	3層	土師器	壺	21.6		37	ナデ、ハケ目	ナデ、ヘラケズリ、指頭圧痕		淡黄色	2mm以下の砂粒を多く含む	肩部に孔有り
26－1	Ⅲ	西側トレンチ	土師器	甕	13.1			磨滅	ヘラケズリ	擬凹線の痕跡有り	灰白色	2mm以下の砂粒を多く含む	
26－2	Ⅲ	3層	土師器	甕	17			ナデ、ハケ目	ナデ、ヘラケズリ		浅黄橙色	1mm以下の砂粒を多く含む	
26－3	Ⅲ	3層	土師器	甕	19			ナデ、ハケ目	ナデ、ヘラケズリ、指頭圧痕		にぶい黄橙色	1mm大の砂粒を若干含む	
26－4	Ⅲ	3層	土師器	甕	18.8			磨滅、ハケ目	ヘラケズリ		にぶい黄橙色	1mm以下の砂粒を多く含む	
26－5	Ⅲ	8層上面	土師器	甕	16.2			ナデ、ヘラミガキ?	ナデ、指頭圧痕、ヘラケズリ		灰黄褐色	2mm以下の砂粒を多く含む	外面に一部煤痕
26－6	Ⅴ	2層	土師器	甕	19.9			ナデ	ナデ、ヘラミガキ		にぶい黄橙色	1mm以下の砂粒を若干含む	内面に一部赤彩
26－7	Ⅰ	2層	土師器	甕	16.6			ナデ	ナデ、ヘラケズリ		にぶい黄橙色	1mm以下の砂粒を微量含む	
26－8	Ⅲ	3層	土師器	甕	14.8			ナデ、ハケ目	ナデ、ヘラケズリ		浅黄橙色	1mm以下の砂粒を含む	
26－9	Ⅲ	3層	土師器	甕	13.4		26.7	ナデ、ハケ目	ナデ、ヘラケズリ		灰白色	1mm以下の砂粒を微量含む	

挿図番号	調査区	出土地点	種別	器種	法量（単位：cm）			形態・調整の特徴		文様の特徴	色調	胎土	備考
					口径	底径	器高	外面	内面		色		
27－1	Ⅲ	3層	土師器	甕	15.6			ナデ、ハケ目	ナデ、ハケ目、ヘラケズリ		浅黄色	1mm以下の砂粒を多く含む	外面に黒斑有り
27－2	Ⅲ	3層	土師器	甕	15			ナデ、ハケ目	ハケ目、ヘラケズリ		にぶい黄橙色	3mm以下の砂粒を若干含む	
27－3	Ⅲ	3層	土師器	甕	14.7			ナデ、ハケ目	ナデ、ハケ目、ヘラケズリ		浅黄色	1mm以下の砂粒を若干含む	
27－4	Ⅲ	3層	土師器	甕	18.4			ナデ、ハケ目	ナデ、ヘラケズリ		浅黄橙色	1mm以下の砂粒を多く含む	
27－5	Ⅲ	2層	土師器	甕	16			磨滅	ヘラケズリ		浅黄橙色	1mm以下の砂粒を若干含む	
27－6	Ⅲ	3層	土師器	甕	19.2			磨滅	ヘラケズリ		橙色	1mm以下の砂粒を多く含む	
27－7	Ⅲ	3層	土師器	甕	17.2		20.6	磨滅	ナデ、ヘラケズリ		淡黄橙色	1～2mm大の砂粒を含む	上半と下半を接合して形成
27－8	Ⅲ	3層	土師器	甕	24.6			磨滅	磨滅		淡黄橙色	1mm以下の砂粒を多く含む	
28－1	Ⅲ	3層	土師器	甕	21			ナデ、ハケ目	ナデ、ヘラケズリ		灰白色	1mm以下の砂粒を多く含む	外面に一部煤痕
28－2	Ⅲ	3層	土師器	甕	17.4			ナデ、ハケ目	ナデ、ヘラケズリ		浅黄橙色	1mm大の砂粒を多く含む	
28－3	Ⅲ	3層	土師器	甕	16.7			ナデ、ハケ目	ナデ、ヘラケズリ		にぶい黄橙色	1mm以下の砂粒を多く含む	外面に一部煤痕
28－4	Ⅲ	3層	土師器	甕	21.1			磨滅	磨滅		浅黄橙色	1mm以下の砂粒を多く含む	
28－5	Ⅴ	2層	土師器	甕	16			磨滅	ナデ、ヘラケズリ		明黄褐色	2mm大の砂粒を多く含む	
28－6	Ⅲ	3層	土師器	甕	14.6			磨滅	ヘラケズリ		にぶい黄褐色	1mm大の砂粒を多く含む	
28－7	Ⅲ	3層	土師器	甕	23.8			ナデ、ハケ目	ナデ、ヘラケズリ		にぶい黄橙色	1mm大の砂粒を多く含む	
28－8	Ⅲ	3層	土師器	甕	22.6			磨滅	ヘラケズリ		黄橙色	1mm以下の砂粒を多く含む	
28－9	Ⅲ	3層	土師器	甕	16.6			ナデ、ハケ目	ナデ、ヘラケズリ		にぶい黄橙色	1mm以下の砂粒を多く含む	
28－10	Ⅲ	3層	土師器	甕	20.5			ナデ、ハケ目	ナデ、ヘラケズリ		橙色	1mm以下の砂粒を若干含む	
29－1	Ⅲ	3層	土師器	小型丸底壷	8		9.3	ナデ	ナデ、ヘラケズリ		灰白色	1mm以下の砂粒を多く含む	外面胴部中央に煤痕
29－2	Ⅲ	3層	土師器	小型丸底壷	11			ナデ、ハケ目	ナデ		外：黄褐色 内：灰黄色	1mm以下の砂粒を微量含む	
29－3	Ⅲ	3層	土師器	小型丸底壷	11.5			ナデ	ナデ、ヘラケズリ		灰黄色	1mm以下の砂粒を微量含む	
30－1	Ⅲ	4層	土師器	器台	24			磨滅	磨滅		浅黄橙色	2mm以下の砂粒を多く含む	外面に一部煤痕
30－2	Ⅲ	3層	土師器	器台	18			磨滅	磨滅		灰白色	2mm以下の砂粒を多く含む	外面に一部煤痕
30－3	Ⅲ	4層上面	土師器	器台	23.4	20.6	14.6	磨滅	ナデ、ヘラケズリ		浅黄橙色	1～2mm以下の砂粒を多く含む	
30－4	Ⅲ	4層上面	土師器	器台				ナデ	ナデ、ヘラケズリ		灰白色	1mm以上の砂粒を若干含む	
30－5	Ⅲ	4層上面	土師器	器台		19.8		ナデ	ナデ、ヘラケズリ		灰白色	1mm以下の砂粒を多く含む	
30－6	Ⅲ	3層	土師器	器台		18.6		磨滅	ヘラケズリ		灰白色	1mm以下の砂粒を多く含む	
31－1	Ⅲ	3層	土師器	高坏	17.7	10.4	12.2	ナデ、ハケ目 ミガキ後ナデ	ナデ		灰黄褐色	1mm以下の砂粒を微量含む	
31－2	Ⅲ	3層	土師器	高坏	23.6	15.3	16.1	ナデ、ヘラミガキ	ナデ		黄橙色	1mm以下の砂粒を微量含む	
31－3	Ⅲ	3層	土師器	高坏	15.8			ナデ、ヘラミガキ	ナデ		橙色	1mm以下の砂粒を微量含む	
31－4	Ⅰ	2層上面	土師器	高坏				ナデ	ナデ		橙色	1mm以下の砂粒を微量含む	
31－5	Ⅲ	3層	土師器	高坏	17.2	10	12.7	ナデ	ナデ ヘラケズリ		浅黄橙色	1mm以下の砂粒を多く含む	外面全体と内面一部に赤彩
31－6	Ⅲ	2層	土師器	高坏	15.8			磨滅	磨滅		にぶい橙色	1～1mm大の砂粒を若干含む	外面全体に赤彩
31－7	Ⅲ	2層	土師器	高坏	16.4	10.6	11.4	ナデ、ヘラミガキ	ナデ、ヘラケズリ後ナデ		橙色	2mm以下の砂粒を若干含む	
31－8	Ⅲ	3層	土師器	高坏		7.7		ナデ	ナデ、ハケ目		にぶい黄橙色	1mm大の雲母・石英を多く含む	外面全体に赤彩
31－9	Ⅲ	3層	土師器	高坏		8.6		磨滅	磨滅		にぶい橙色	1mm大の砂粒を微量含む	外面全体に赤彩
31－10	Ⅲ	3層	土師器	高坏		8.5		ナデ	ナデ		橙色	1mm以下の砂粒を若干含む	

挿図番号	調査区	出土地点	種別	器種	法量（単位：cm）			形態・調整の特徴		文様の特徴	色調	胎土	備考
					口径	底径	器高	外面	内面		色		
32－1	Ⅲ	4層上面	土師器	低脚坏	12.4	6	3.7	磨滅	磨滅		橙色	1mm以下の砂粒を若干含む	
32－2	Ⅲ	4層上面	土師器	低脚坏		6		ナデ	ナデ		淡黄褐色	1mm以下の砂粒を微量含む	
32－3	Ⅲ	5層	土師器	低脚坏		4.4		磨滅	ナデ		灰白色	1mm以下の砂粒を若干含む	
32－4	Ⅲ	4層上面	土師器	低脚坏	12	6.6	7.3	ナデ	ナデ、指頭圧痕		灰白色	1mm以下の砂粒を微量含む	
32－5	Ⅲ	西側トレンチ	土師器	低脚坏	10.8	5.6	6	ナデ	ナデ		にぶい黄橙色	2mm以下の砂粒を若干含む	
32－6	Ⅲ	3層	土師器	低脚坏	11	6	5.6	ナデ	ナデ、指頭圧痕		灰白色	1mm以下の砂粒を若干含む	
32－7	Ⅰ	2層	土師器	低脚坏		7.8		ナデ	ナデ		橙色	1mm以下の砂粒を微量含む	
32－8	Ⅲ	3層	土師器	低脚坏	10.5	7	7.5	磨滅	磨滅		灰白色	1mm以下の砂粒を微量含む	両面に一部赤彩
32－9	Ⅲ	5層	土師器	低脚坏		9.8		ナデ、ヘラミガキ	ナデ		灰黄褐色	1mm以下の砂粒を微量含む	外面全体と内面坏部全体に赤彩
32－10	Ⅲ	3層	土師器	低脚坏	11.8	9	9	ナデ、ヘラミガキ	ナデ		にぶい橙色	2mm以下の砂粒を多く含む	
32－11	Ⅲ	2層	土師器	低脚坏	15	9.8	9.7	ナデ、指頭圧痕	ナデ		橙色	2mm以下の砂粒を多く含む	
32－12	Ⅲ	3層	土師器	低脚坏	12.8	8.2	9	ナデ、ヘラミガキ	ナデ		橙色	2mm以下の砂粒を若干含む	両面に一部赤彩
32－13	Ⅲ	3層	土師器	低脚坏	14	10	9.85	磨滅	磨滅		橙色	1mm以上の砂粒を微量含む	
33－1	Ⅲ	3層	土師器	甑				磨滅	磨滅		にぶい橙色	2mm以下の砂粒を多く含む	
33－2	Ⅲ	3層	土師器	甑				ナデ	ヘラケズリ		浅黄橙色	2mm以下の砂粒を多く含む	
33－3	Ⅲ	3層	土師器	甑				磨滅	磨滅		にぶい橙色	2mm以下の砂粒を含む	
33－4	Ⅲ	3層上層	土師器	甑		11		磨滅	ヘラケズリ		浅黄橙色	2mm大の砂粒を微量含む	外面に黒斑
33－5	Ⅲ	3層	土師器	甑	24.2			磨滅	磨滅		浅黄橙色	1mm以下の砂粒を多く含む	
33－6	Ⅲ	3層	土師器	甑	20.8			磨滅	磨滅		にぶい橙色	1mm以下の砂粒を多く含む	
33－7	Ⅲ	3層	土師器	甑	35.6			磨滅	磨滅		淡黄色	1～2mm大の砂粒を若干含む	
34－1	Ⅲ	3層	土師器	甑	47.6			磨滅	磨滅		浅黄橙色	2mm以下の砂粒を多く含む	
34－2	Ⅲ	2層	土製品	支脚			13.6	ナデ			にぶい橙色	2mm以下の砂粒を多く含む	
34－3	Ⅲ	3層	土製品	支脚			15.5	ナデ			にぶい赤褐色	2mm以下の砂粒を多く含む	
34－4	Ⅲ	3層	土製品	カマド				ナデ	ナデ		浅黄色	2mm以下の砂粒を多く含む	
34－5	Ⅱ	2層	土製品	焙烙	31.6			ナデ	ナデ		明黄褐色	1mm以下の砂粒を微量含む	
35－1	Ⅲ	3層	土師器	坏	13.4		4.8	ナデ	ナデ		外：オリーブ黒色 内：褐灰色	1mm以下の砂粒を多く含む	
35－2	Ⅲ	3層	土師器	坏	13.4		6	ハケ目	磨滅		にぶい黄橙色	1mm以下の砂粒を多く含む	両面に赤彩
35－3	Ⅲ	3層	土師器	坏	11.5		4.3	磨滅	磨滅		にぶい橙色	2mm以下の砂粒を若干含む	両面に一部赤彩
35－4	Ⅲ	3層	土師器	坏	16			磨滅	磨滅		にぶい黄橙色	1mm以下の砂粒を若干含む	内面に赤彩
36－1	Ⅲ	2層	土師質土器	坏		4.2		磨滅	磨滅		橙色	1mm以下の砂粒を多く含む	
36－2	Ⅲ	2層	土師質土器	坏		5		磨滅、回転糸切り	磨滅		灰黄色	1mm以下の砂粒を多く含む	
36－3	Ⅲ	3層	土師質土器	坏	15	4.5	4.4	回転ナデ、回転糸切り	回転ナデ		にぶい褐色	1mm以下の砂粒を微量含む	
36－4	Ⅲ	排土中	土師質土器	皿	7.6	5.9	2	ナデ、静止糸切り	ナデ		黒褐色	1mm以下の砂粒を微量含む	
36－5	Ⅲ	2層	土師質土器	高台付坏				磨滅	ナデ		にぶい黄橙色	1mm以下の砂粒を微量含む	
37－1	Ⅲ	南側トレンチ	土製品	手捏ね土器	3.8		2.5	指頭圧痕	指頭圧痕		にぶい黄橙色	1mm以下の砂粒を微量含む	
37－2	Ⅲ	2層	土製品	土錘	径：1.3		長さ：2.8				橙色	1mm以下の砂粒を微量含む	
37－3	Ⅲ	2層	土製品	土錘			長さ：4.6				にぶい黄橙色	2mm以下の砂粒を微量含む	長さは残存長
37－4	Ⅲ	2層	土製品	土錘	径：1.5		長さ：4.8				にぶい黄橙色	1mm以下の砂粒を若干含む	
37－5	Ⅲ	3層	土製品	土錘	径：3.5		長さ：4.0				明褐色	1mm以下の砂粒を多く含む	
37－6	Ⅲ	3層	土製品	土錘	径：2.9		長さ：2.8				灰白色	1mm以下の砂粒を微量含む	
37－7	Ⅲ	3層	土製品	土錘	径：2.6		長さ：4.7				橙色	1mm以下の砂粒を多く含む	

挿図番号	調査区	出土地点	種別	器種	法量（単位：cm）			形態・調整の特徴		文様の特徴	色調	胎土	備考
					口径	底径	器高	外面	内面		色		
37－8	Ⅲ	3層	石製品	紡錘車	最大径：5.2		厚さ：1.5				灰白色		
37－9	Ⅲ	3層	石製品	紡錘車	最大径：5.0		厚さ2.8				灰白色		
38－1	Ⅲ	3層	須恵器	蓋	12		4.5	回転ナデ、回転ヘラケズリ	回転ナデ、ナデ		灰白色	1mm以下の砂粒を微量含む	
38－2	Ⅲ	3層	須恵器	蓋	11.6			回転ナデ、回転ヘラケズリ	回転ナデ		灰色	1mm以下の砂粒を微量含む	
38－3	Ⅲ	3層	須恵器	蓋	13.6			回転ナデ、回転ヘラケズリ	回転ナデ		灰白色	2mm以下の砂粒を多く含む	
38－4	Ⅲ	3層	須恵器	蓋	13.8			回転ナデ	回転ナデ		灰白色	1mm以下の砂粒を微量含む	
38－5	Ⅲ	3層	須恵器	蓋	14.4			回転ナデ	回転ナデ		灰色	1mm以下の砂粒を若干含む	
38－6	Ⅲ	3層	須恵器	蓋	14.0 受部：16.0	ツマミ径：4.5	3.7	回転ナデ、ヘラケズリ後回転ナデ、ナデ	回転ナデ、ナデ		灰色	2mm大の砂粒を微量に含む	
38－7	Ⅲ	3層	須恵器	蓋	14.8 受部：17.2	ツマミ径：5.8	3.1	回転ナデ	回転ナデ、ナデ		灰色	2mm以上の砂粒を微量含む	外面に釉付着
38－8	Ⅲ	3層	須恵器	坏	11.0 受部：14.0		4.5	回転ナデ、ヘラ切り後ナデ	回転ナデ、ナデ		灰白色	1mm以下の砂粒を微量含む	
38－9	Ⅲ	3層	須恵器	坏	11.2 受部：14.0		4.1	回転ナデ、ヘラ切り後ナデ	回転ナデ		オリーブ灰色	1mm以下の砂粒を微量含む	
38－10	Ⅲ	3層	須恵器	坏	10.8 受部：13.6		3.9	回転ナデ、回転ヘラケズリ、ヘラ切り後ナデ	回転ナデ、ナデ		オリーブ灰色	1mm以下の砂粒を微量含む	
38－11	Ⅲ	南側トレンチ	須恵器	坏	10.9 受部：13.6		4.2	回転ナデ、ハケ目	回転ナデ		灰白色	1mm以下の砂粒を微量含む	
38－12	Ⅲ	南側トレンチ	須恵器	坏	11.0 受部：13.0		4	回転ナデ、ヘラ切り後ナデ	回転ナデ		灰白色	1mm以下の砂粒を微量含む	
38－13	Ⅲ	2層	須恵器	坏	10.9 受部：13.5		3.7	回転ナデ	回転ナデ、ナデ		灰白色	2mm以下の砂粒を多く含む	
38－14	Ⅲ	3層	須恵器	坏	11.0 受部：13.6		4.4	回転ナデ、ヘラ切り後ナデ	回転ナデ		灰白色	1mm以下の砂粒を微量含む	
38－15	Ⅲ	3層	須恵器	坏	10.0 受部：12.8			回転ナデ、回転ヘラケズリ	回転ナデ		オリーブ灰色	1mm以下の砂粒を微量含む	
38－16	Ⅲ	3層	須恵器	坏	12.2		3.3	回転ナデ、ヘラ切り後ナデ	回転ナデ、ナデ		外：灰色 内：灰色	密	
38－17	Ⅲ	2層	須恵器	坏	14	10.6	4.1	回転ナデ、回転糸切り後ナデ	回転ナデ、ナデ		灰白色	1mm以下の砂粒を多く含む	
38－18	Ⅲ	3層	須恵器	高坏	13.2			回転ナデ	回転ナデ		灰色	1mm以下の砂粒を微量含む	
38－19	Ⅲ	3層	須恵器	高坏	13.3	9.5	10.25	回転ナデ	回転ナデ、ナデ		明オリーブ灰色	1mm以下の砂粒を若干含む	2方向にスカシあり
38－20	Ⅲ	3層	須恵器	高坏		10		回転ナデ	回転ナデ、ナデ		灰色	1mm以下の砂粒を若干含む	
38－21	Ⅲ	3層	須恵器	高坏	14.6	9.9	10.1	回転ナデ	回転ナデ、ナデ		灰白色	1mm以下の砂粒を若干含む	2方向にスカシあり
38－22	Ⅲ	3層	須恵器		9			回転ナデ	回転ナデ	刺突文、波状文	灰色	密	
38－23	Ⅲ	2層	須恵器	壷				磨滅	磨滅		灰白色	1mm以下の砂粒を多く含む	
38－24	Ⅲ	3層	須恵器	壷		11.2		回転ナデ、ナデ、ヘラケズリ	回転ナデ、ナデ		明オリーブ灰色	1mm以下の砂粒を微量含む	外面釉付着
38－25	Ⅲ	3層	須恵器	横瓶	12.8			ナデ、タタキ目	ナデ、当て具痕		灰色	密	

第２節　浜井場４号墳

（１）立地と経過

浜井場古墳群は出雲市知井宮町と東神西町との堺付近に所在しており、ＪＲ西出雲駅の電車基地南東側の低丘陵に４基の古墳としてその存在が指摘されている。平成15年には出雲市教育委員会により、出雲インター線建設工事に伴う発掘調査として浜井場２号墳の調査が実施されている。浜井場２号墳は古墳時代中期頃の古墳であることが確認され、鉄製の刀子などが出土している。
浜井場４号墳は、この浜井場２号墳と同じ丘陵で、南西に派生する標高約23mの尾根に存在する古墳である。

浜井場古墳群の周辺には、平成17年度に調査を実施した玉泉寺裏遺跡、九景川遺跡、平成18年度に調査を実施した御崎谷遺跡が存在するほか、古墳時代前期から中期頃の古墳として丁之内古墳、古垣内遺跡、浅柄Ⅱ遺跡、北光寺遺跡等、神西湖東岸には当該時期の古墳が多く知られている。

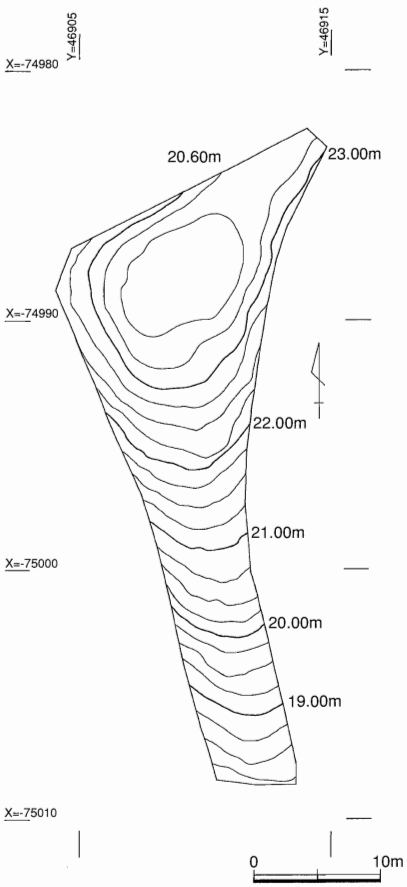
現地調査は、平成18年８月に開始し、同月に終了した。

（２）調査の結果

尾根の頂上部北側までが調査対象区域であり、墳頂部分から南西に伸びる尾根を中心に表土以下掘削・精査した。

調査の結果、埋葬施設等は検出できなかった。このことから古墳である可能性は低いと考えられるが、東側に隣接する浜井場２号墳の存在や、調査区内の地滑りや堆積土の流出が著しかったこと等から埋葬施設が失われていた可能性も否定できない。

第 39 図　浜井場４号墳　周辺地形図（S＝1：2,500）



第 40 図　浜井場４号墳地形測量図

第３節　間谷東古墳

（１）調査の経過と概要

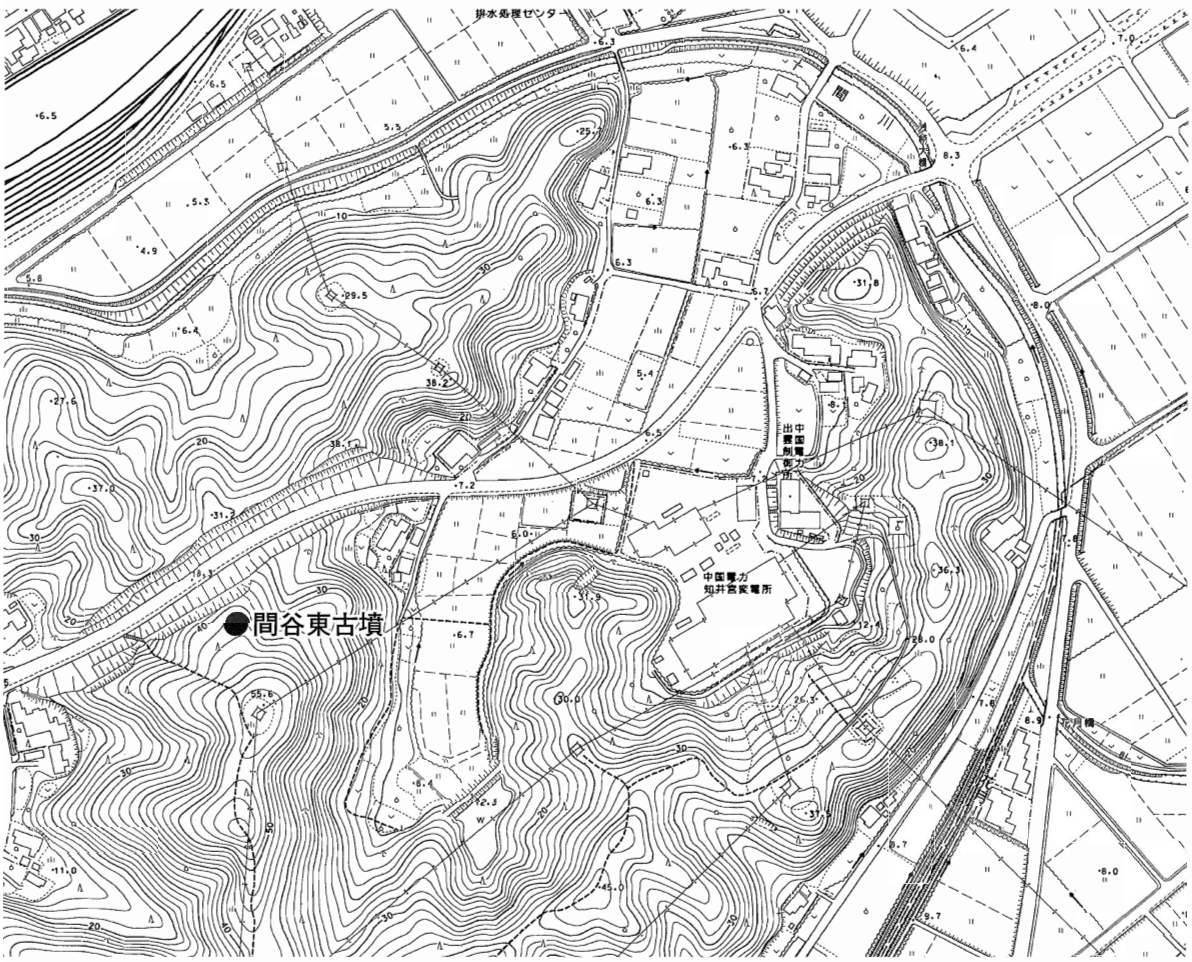
間谷東古墳は出雲市知井宮町2449－1番地に所在する。県道大社立久恵線沿いに出雲市を南北に流れる花月川の西側に位置し、北東へ派生する尾根上、標高約42mに立地している。北には出雲平野が広がり、東方は神戸川から古志地域を広く望める。また、西方は神西湖とその向こうに日本海を眺めることができ、眺望は開けている。（第41図）

周辺の遺跡は、第２章で前述したとおりであるが、インター線事業に伴い調査された、九景川遺跡、玉泉寺裏遺跡のほかに、当古墳に時期が近いと考えられる山地古墳、浜井場２号墳、丁之内古墳、古垣内遺跡、浅柄Ⅱ遺跡、古墳時代中期頃の北光寺古墳などがあり、この地域は神西湖南東における古墳の密集地域である。

当古墳は出雲市教育委員会が昭和63年から平成元年にかけて分布調査を実施した際に確認され、直径約14m、比高１ｍの円墳であると報告されていた。

今回の調査は、平成18年９月13日から平成18年12月20日の間実施した。９月から人力による表土除去を開始し、掘り下げ･精査を行った。調査の結果、礫床を伴う埋葬施設１基を確認し、土師器、鉄製品等が出土した。

調査の途中経過及び成果については、平成18年11月19日に現地説明会を行い、地元をはじめとする約80名の参加者に見学いただくとともに、遺跡の概要をまとめたパンフレットを出雲市内を中心に配布し周知を行った。



第 41 図　間谷東古墳　位置図（S＝1：2,500）

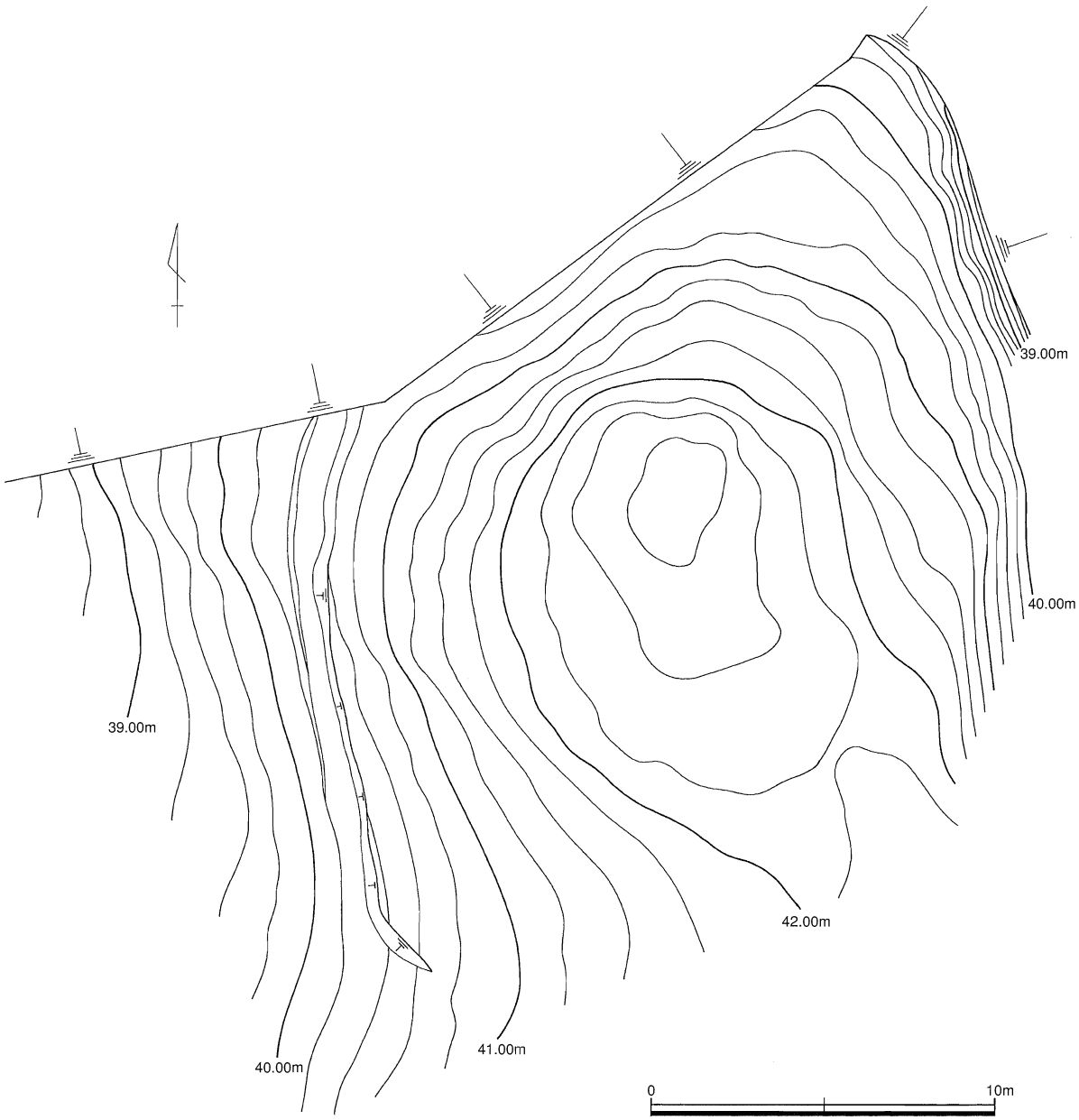
（2）調査の結果

墳丘について（第42図・43図）

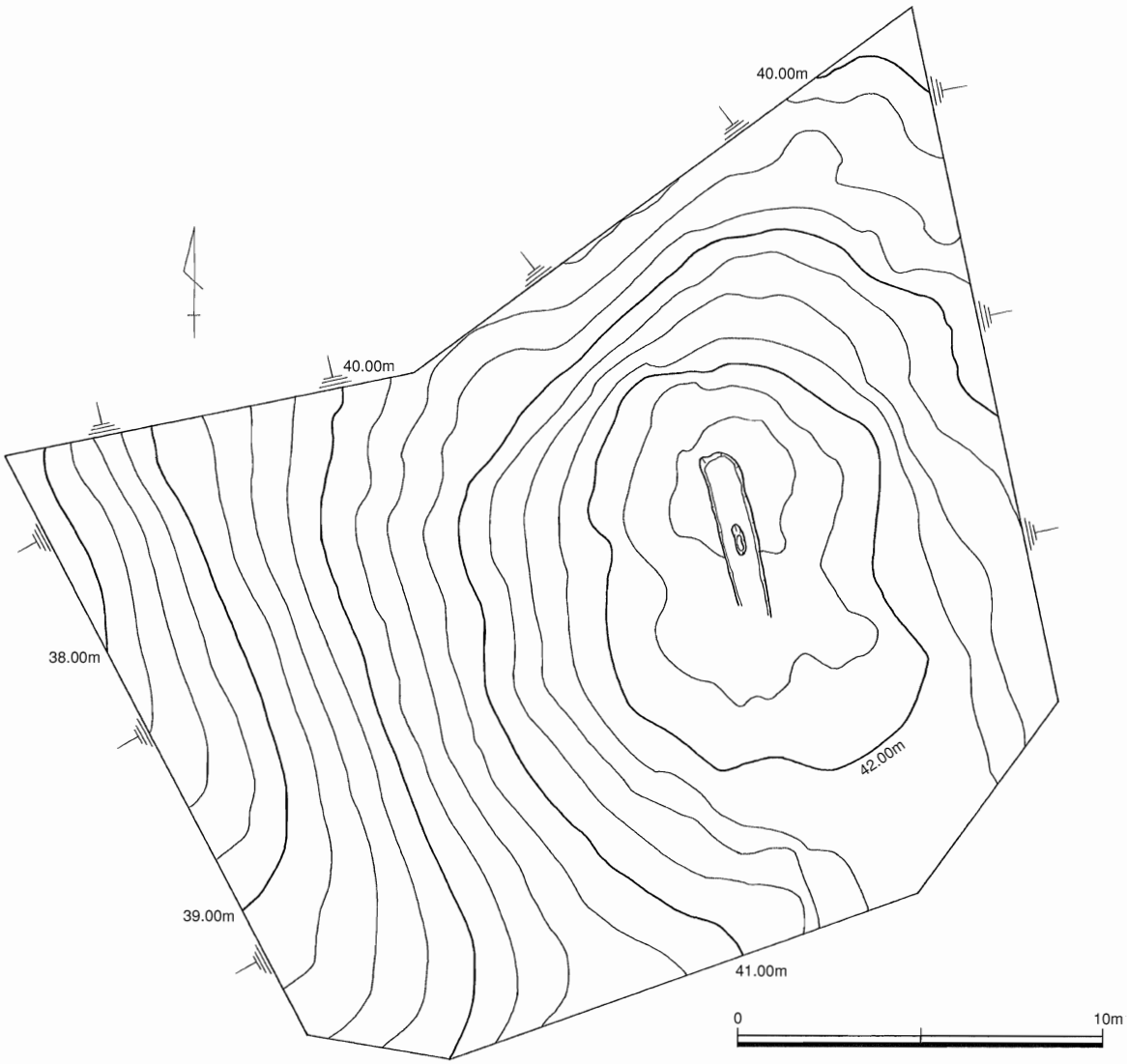
調査前は、直径約14mの円墳であると報告されていたが、尾根の北側と東側は大きく削平され、墳丘の堆積土の多くは流出していた。

南側の地山面は一旦標高が下がるが、墳頂部から南に14～15mほどで尾根に沿って再度標高が上がる。墳丘は自然地形をある程度利用して築造されたものと考えられる。

また、北側斜面は墳頂から約10mで東西に走る県道多岐江南出雲線によって削平されているが、現状では墳頂部から北へ約８ｍで緩斜面への僅かな変換が確認できた。この変換点を西側斜面へ追いかけてみても、明確な変換点のラインはなく、墳形は不明である。墳丘規模は、北側の緩斜面への変換点ラインから考えれば、15m前後だったのではないかと推定される。



第 42 図　間谷東古墳　調査前地形測量図



第43図　間谷東古墳　調査成果図

層　序（第44図）

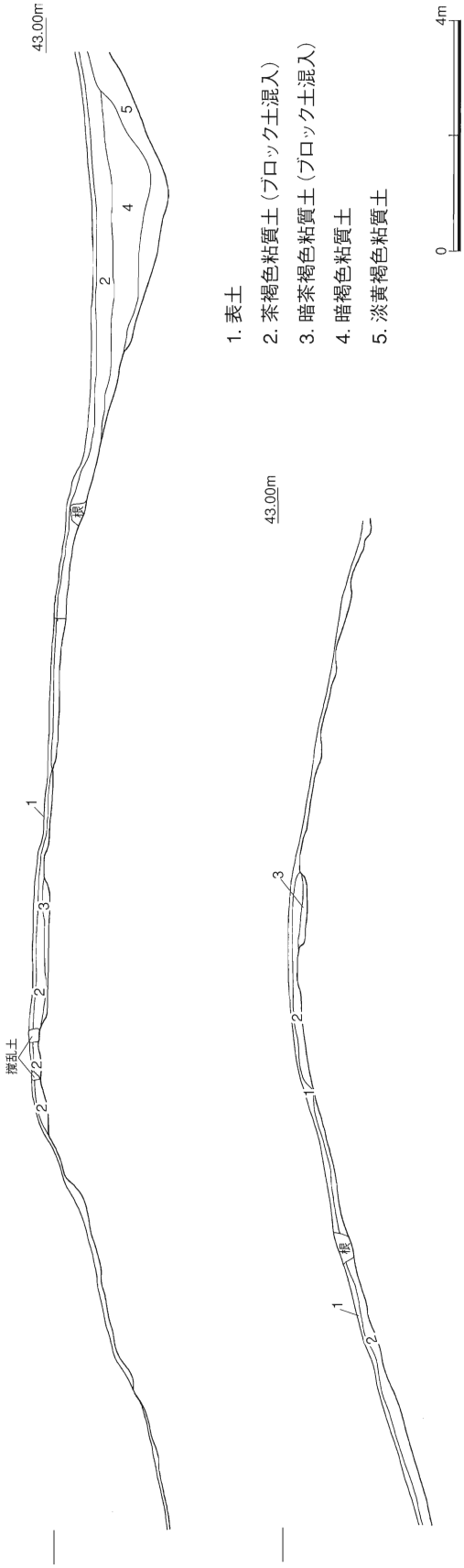
墳頂部は削平され、堆積土の流出が顕著であった。北側部分では表土除去後に地山面に到達した。南側は尾根に直交するように溝状に落ち込むことから北側に比べて堆積土が厚く、表土以下、茶褐色粘質土、暗茶褐色粘質土、暗褐色粘質土、淡黄褐色粘質土が堆積していた。茶褐色粘質土及び暗茶褐色粘質土は共に地山のブロック土が多く混入していた。暗褐色粘質土、淡黄褐色粘質土は尾根の南側に落ち込む部分に堆積していた層である。

埋葬施設について（第45図）

埋葬施設は墳丘の中央部、標高約42mの地山面から墓壙を１基検出した。表土除去後に墳頂部において礫を数点確認し、精査していったところ茶褐色粘質土のプランを検出したものである。プランの南側は堆積土が薄かったことと木の根による攪乱を受けていたことから、表土以下すぐに礫を確認した。

墓壙はN－14°－Wに主軸を測り、地山に直接掘られている。規模は残存長で長辺約4.8m、短辺0.8mで、深さは墳頂部が削平された影響を受け最深部で0.3mと浅い。墓壙の底面は礫床となっており、礫の周辺が直線的になることから墓壙内には木棺を埋置していたと考えられる。

墓壙の中央付近には茶褐色粘質土、暗茶褐色粘質土が堆積しており、礫床の長辺のラインと、地



第44図　間谷東古墳　土層堆積状況

山を掘り込んだ墓壙の長辺ラインとの間15cmには、ブロック土が多量に混入した橙褐色粘質土が堆積していた。この橙茶褐色粘質土は、木棺の側板を立て墓壙との隙間に埋め戻されたものと思われる。また、礫床の下には橙茶褐色粘質土が５～７cm堆積しており、この橙茶褐色粘質土を橙褐色土が一部掘り込んでいることから、墓壙の底面に橙茶褐色粘質土を敷いて整地した後、棺の小口・側板を立て、礫床を整地したものと考えられる。墓壙底面は地山部分が南側より北側が９cm高く、頭位は北を向くと考えられる。

埋葬施設は、後述する墓壙の規模や礫床の状況から、松江市鹿島町の奥才古墳群に見られるいわゆる「奥才型木棺」に属するものと考えられる。[註1)]

礫床について（第45図・47図）

礫床は、地山の上に橙茶褐色粘質土をほぼ水平に敷き、その上に礫を敷き詰めている。長辺4.5m、短辺0.5mで、これが木棺の内法になると考えられるが、長辺については南側部分が若干撹乱を受けている。

礫床には、２箇所の途切れた部分が見られる。北側端部から南へ1.1mの部分と、南へ3.1mの部分である。後者については若干撹乱を受けており礫が移動していることから明確ではないが、その可能性がある。途切れ目の幅は５cm程で、板で室が仕切られていた可能性がある。北側から室の長さは、1.1m、2.0m、1.3mの３区画に分かれていたと考えられる。

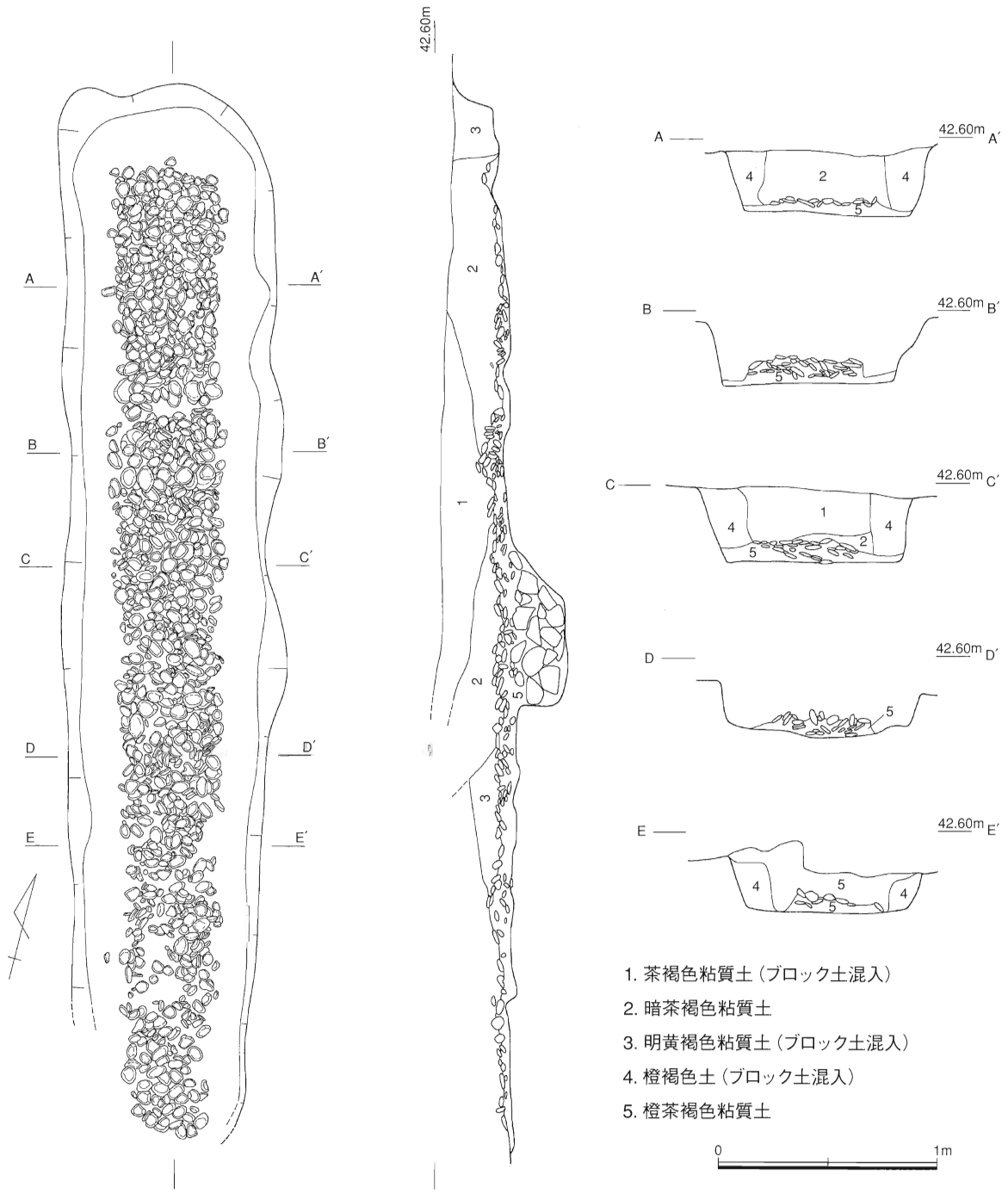
また、礫床には厚さが部分的に厚く堆積している箇所があった。墓壙の北側の掘り方から南に0.5m付近と、1.7m付近である。礫が厚く積み上げられ枕状に盛り上がっており、意図的に造作されていることが伺える。この２箇所の礫の高まりは、３室のうち北側の室と中央の室に位置し、各室の北側に寄っている。

礫は５～10cmの扁平な石で、海辺に見られる石ではなく河川で見られる石であった。凝灰岩、流紋岩、安山岩が多く、花崗岩や方解石も一部に見られた。神戸川下流域で見られる石であり、古墳の立地から現在の神戸川あるいはその支流の石を利用したものと考えられる。[註2)]

墓壙内小土坑について（第46図）

礫及びその下に堆積していた橙茶褐色粘質土を除去し床面を精査したところ、墓壙中央部分に土坑を検出した。この土坑は墓壙の一部であり一体的なものと考えるのであれば、土坑というのは適当な呼称ではないかも知れないが、その性格がはっきりしないため、本報告書においては墓壙内の土坑という位置付けで、「墓壙内小土坑」と呼称することとする。

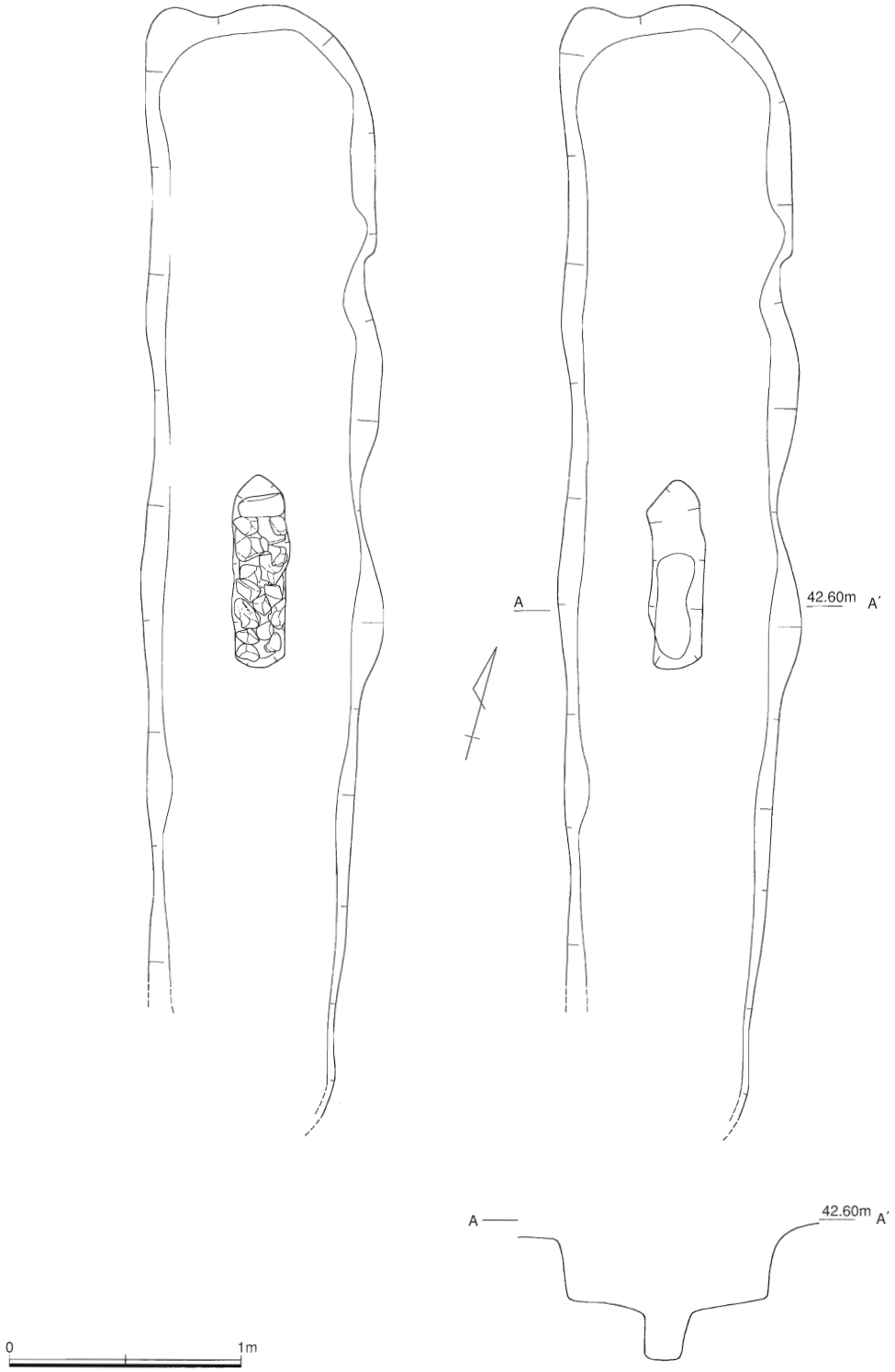
この墓壙内小土坑は、検出面で長辺0.8m、短辺最大0.24m、底面は長辺0.45m、短辺0.15mで深さは最大で0.25mである。長辺は墓壙の主軸方向と同じに向いている。北側の小口部分は傾斜しており、南側小口はほぼ垂直になる。この中には握りこぶし大の石が32個隙間無く詰め込まれていた。石の詰め方に特に規則性は見られなかった。



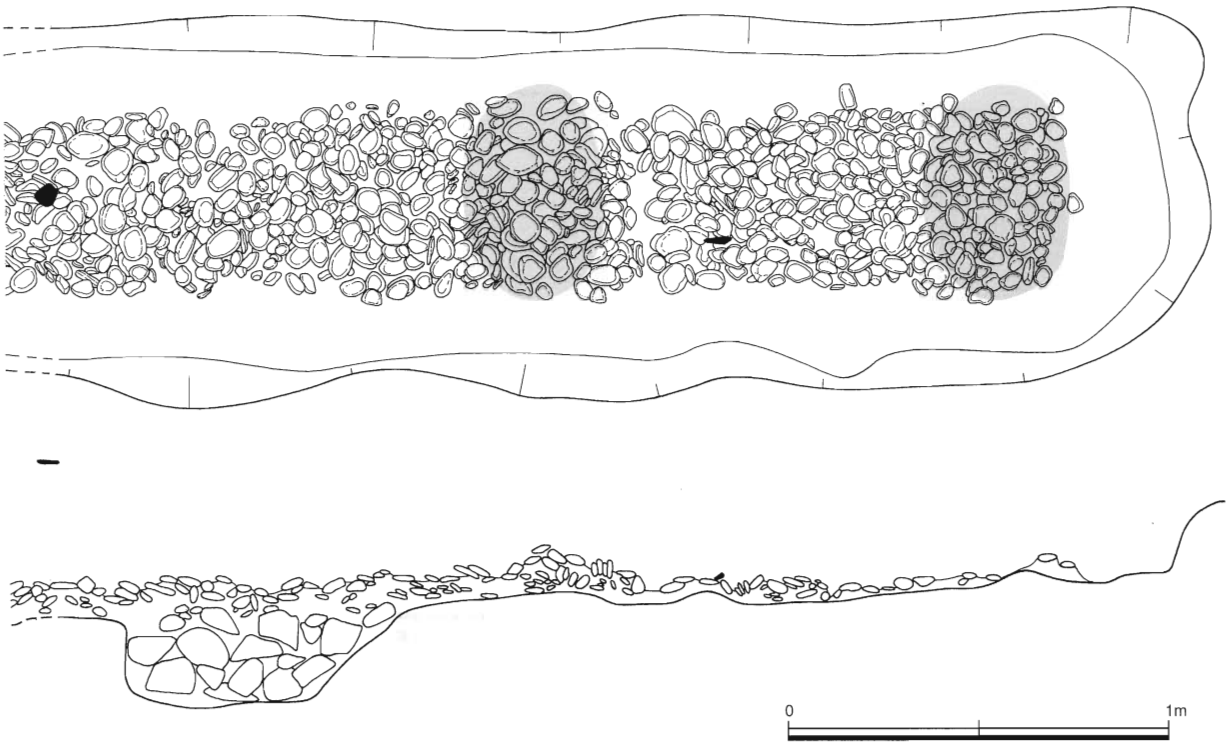
第 45 図　間谷東古墳　主体部実測図(1)

この石は礫床に使用している礫とは大きさ質とも異なり、石の稜は丸くなってはいなかった。意図的に礫床に使用したものと異なる石材を利用していると思われる。石材は角閃石を多く含む安山岩である。

検出状況から排水溝として利用されていた可能性は低く、また、土坑内部に石がぎっしり詰め込まれていたことから何かを埋葬したとも考えにくい。地山加工を行い、墓壙を掘削する際に意図的に掘り込まれ何らかの祭祀を行ったものか、その性格は不明である。



第46図　間谷東古墳　主体部実測図(2)



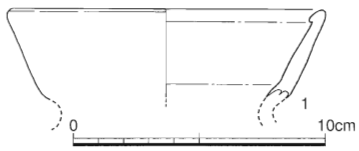
第 47 図　間谷東古墳　主体部実測図(3)

埋葬施設の出土遺物について（第48図・49図）

埋葬施設からは、土師器の甕片と刀子が出土した。

第48図の土師器は口縁端部が平坦で内面に折り返し稜をもつ、いわゆる布留系の甕である。推定口径は12.6cmである。主体部の直上に位置する茶褐色粘質土層から出土した。古墳に伴う供献土器であろう。

第49図の刀子は礫床上面で出土したものである。北側から約90cmの礫床の切れ間付近から出土し、刀子の先端が南に向いた状態で確認された。木棺の区画のうち最も北側の区画であった。残存部分は長さ７cm、最大幅1.3cm 、厚さ最大0.5cmを測る。鉄製で先端にかけてやや反っている。

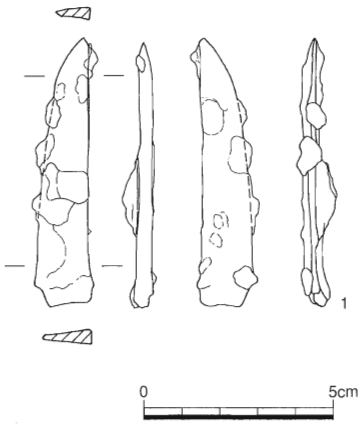


第 48 図　間谷東古墳　主体部
出土遺物実測図(1)

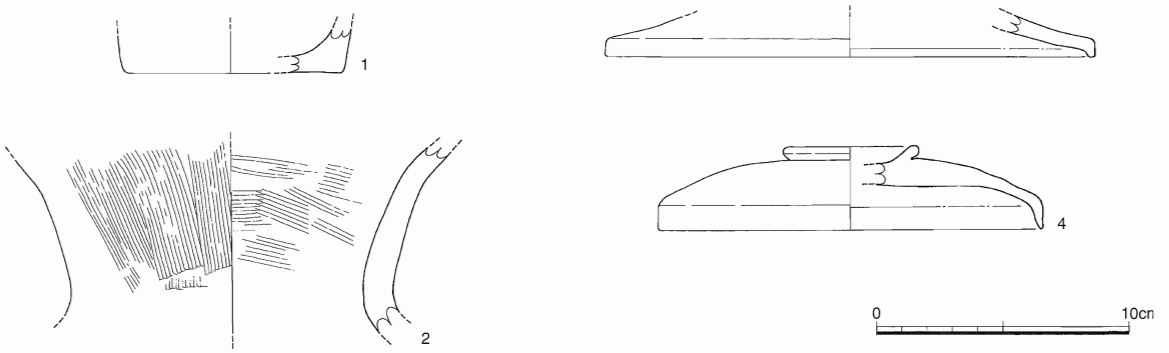
墳丘周辺の出土遺物について（第50図）

墳丘周辺からは土師器、須恵器が出土した。１は表土除去後、茶褐色粘質土層から出土した壷甕の底部である。２は墳丘南側の橙茶色粘質土層から出土した複合口縁の壷の頸部であると考えられる。内外面ともハケ目調整が見られる。

３、４は須恵器の蓋である。輪状つまみをもつもので、墳丘西側斜面から出土した。後世の祭祀に利用されたものと考えられる。



第 49 図　間谷東古墳　主体部
出土遺物実測図(2)



第50図　間谷東古墳　周辺出土遺物実測図

間谷東古墳出土遺物観察表

挿図番号	調査区	出土地点	種別	器種	法量（単位：cm）			形態・調整の特徴		文様の特徴	色調	胎土	備考
					口径	底径	器高	外面	内面		色		
8－1		茶褐色粘質土	土師器	甕	12.6			ナデ	ナデ		明黄褐色	1mm以下の砂粒を微量含む	布留系
9－1		礫上	鉄器	刀子	長さ：7.0	最大幅：1.3							
10－1		2層	土師器	底部				磨滅	磨滅		明褐色	1～5mm大の砂粒を微量含む	
－2		2層	土師器	壺				ハケ目	ハケ目		にぶい黄橙色	1mm以下の砂粒を微量含む	
－3		2層	須恵器	蓋	19			回転ナデ	回転ナデ		灰色	1mm以下の砂粒を微量含む	
－4		2層	須恵器	蓋	15	つまみ径：5.0	3.3	回転ナデ、ナデ	回転ナデ、ナデ		灰白色	1mm以下の砂粒を微量含む	

（3）ま　と　め

出雲平野南西部の神西湖東側において、近年の開発に伴い発掘調査件数は次第に増加してきている。なかでも、古墳時代前期から中期にかけての古墳の発掘調査成果は徐々に増えている。出雲インター線建設に伴う発掘調査においても、本遺跡の他に発掘された浜井場２号墳、山陰自動車道鳥取益田線に伴い調査された浅柄Ⅱ遺跡と、前期から中期にかけての古墳が確認されている。

出雲地方の前期古墳については、松山氏[註3)]によれば副葬品及び埋葬形態、土器の編年等により４段階に分けられる。第１段階は草田６期、布留０式に併行する段階で、割竹型木棺、小規模方墳の出現、副葬品に後漢鏡を破鏡として副葬するという時期である。第２段階は、神原神社古墳など方墳であるが長大な竪穴式石室をもち、舶載三角縁神獣鏡が副葬され、前方後円墳の要素が導入される時期である。第３段階になると前方後方墳や粘土槨、礫槨、礫床等の埋葬施設が出現する。そして、墳丘は円墳で仿製鏡を副葬する第４段階となる。

出雲平野においては大寺古墳、山地古墳、浅柄Ⅱ古墳が前期古墳として知られ、これらは第４段階となって出現する。大寺古墳は出雲地方における最も古い前方後円墳であり、山地古墳は礫床木棺や箱式石棺等の主体部から筒形銅器、神獣鏡、珠文鏡、碧玉製管玉等が出土している。また、浅柄Ⅱ古墳は礫床を伴う粘土槨の主体部を持ち、小型の鉄剣が出土している。

そして、これらの古墳よりやや新しい時代の古墳では、古墳時代中期の古墳として前方後円墳である北光寺古墳が知られている。

今回の調査では、間谷東古墳は埋葬施設に礫床を有する古墳で、出土遺物から考えると古墳時代前期末頃に築造された古墳であることが分かり、これまでの出雲平野の代表的な前期古墳である大

寺古墳・山地古墳・浅柄Ⅱ古墳等と並んで第４段階の時期の古墳であると考えられる。当地域での古墳時代中期の代表的な古墳である北光寺古墳が出現するまでの新たな前期古墳の発見となった。

本古墳の主体部は礫床を有する墓壙で、礫床は３つの区画に分かれていたと考えられ、複数埋葬された可能性もある。木棺の底面に礫床を有す、いわゆる「奥才型木棺」であるが、埋葬施設の３区画全ての底面に礫が敷かれていたとすれば、本古墳以外には県内で奥才11号墳だけである。

埋葬施設の造作時の手順について考えてみると、①地山を整地し、墓壙を穿つ。②その段階で墓壙底面の中心部をさらに掘り込む。③墓壙内小土坑に礫を詰め、いったん土で墓壙床面を整地する。木棺の側板及び小口板を立て、木棺内部の床面は礫を敷き、棺と墓壙壁面との隙間を土で埋める。礫は部分的に枕状に整地する。大きくは以上の工程で主体部を築造していると考えられる。

また、墓壙底面の地山から木棺設置の掘り方は検出できず、土層堆積状況からは小口が側板に挟まれるのか側板を挟むのかは、はっきりしないが、萱葉１号墳のような小口で側板を挟むタイプが北九州にあるほかは、確認されている「奥才型木棺」の多くが小口を側板で挟むタイプであり、本古墳も小口を側板で挟んでいた可能性が高い。

「奥才型木棺」の分布は、島根半島部、丹後地方から畿内、北部九州の３地域に限定されている。丹後地方、島根半島部には特に集中しており、分布する地域との交流が海上交通を中心にあったものと考えられる。神西湖が神門水海の名残りであり、当時は入海になっていたことから、当地域にも海上交通を経て結びつきがあったと推測されるところであり注視すべきである。

また、本遺跡の特筆すべき点として、「墓壙内小土坑」の存在があげられる。墓壙底面の中心に穿たれた小土坑で、握りこぶし大の礫が詰め込まれていたものである。この「墓壙内小土坑」の性格であるが、石が隙間なく詰め込まれていたことから土坑自体が埋葬用に穿たれていたとは考えにくく、排水溝としての機能については、その形状が十分な機能を果たさないと考えられる。墳丘築造に伴う何らかの祭祀に関連するものとしての可能性も考えられるが、何の目的で造られたものかは今後の検討課題である。

間谷東古墳は、礫床を有する前期古墳であったが、本古墳の周辺の出雲平野西部において、古墳時代前期から中期にかけての小規模古墳が多く点在していることは、ひとつの特徴である。今回の調査は、出雲平野で古墳時代中期としては最大規模の前方後円墳である北光寺古墳が出現するまでの時期の貴重な資料となったが、今後はまだ周辺での調査が実施される予定であり、出雲平野の前中期の古墳の出現とその背景が一層明らかになることが望まれる。

註

1）赤澤秀則ほか『奥才古墳群第８支群』2002年において、「奥才型木棺」の定義を 内法長が３ｍを超える箱式木棺であること、棺底面に礫を敷くこと、棺内を２区画以上に区切ることの全てを満たすものとしている。

2）中村唯史氏のご教示による。

3）松山智弘　2002「出雲における墳墓の変遷」『神原神社古墳』加茂町教育委員会

参考文献

島根県教育委員会　2005『畑ノ前遺跡・菅原Ⅰ遺跡・クボ遺跡・菅原Ⅱ遺跡・菅原Ⅲ遺跡・廻田Ⅴ遺跡・保知石遺跡・浅柄Ⅱ遺跡・柳ノ内遺跡』山陰自動車道鳥取益田線（宍道～出雲間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書２

島根県教育庁古代文化センター・埋蔵文化財調査センター　2007『北光寺古墳発掘調査報告書』

島根県教育庁古代文化センター・埋蔵文化財調査センター　2005『大寺１号墳発掘調査報告書』

赤澤秀則ほか　2002『奥才古墳群第８支群』県道御津東生馬線改良工事に伴う調査　鹿島町教育委員会

鹿島町教育委員会　1985『奥才古墳群』

鹿島町立歴史民族資料館　2001『古墳出現』奥才古墳群からみる前期古墳の様相

出雲市教育委員会　1986『山地古墳発掘調査報告書』

出雲市教育委員会　2005『浜井場古墳群発掘調査報告書』

出雲市教育委員会　1989　『神門地区遺跡詳細分布調査報告書』

岩本　崇　2003「棺内礫敷をもつ組合式箱形木棺」『大手前大学史学研究所紀要』大手前大学史学研究所

木次町教育委員会　1993『斐井中山古墳群－西支群』

松山智弘　2002「出雲における墳墓の変遷」『神原神社古墳』加茂町教育委員会

第30回山陰考古学研究集会　2002『第30回山陰考古学研究集会資料集　山陰の前期古墳』

池淵俊一　1993「鉄製武器に関する一考察」『古代文化研究』第１号、島根県古代文化センター　41～104頁

大谷晃二　1994「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』第11集　39～82頁

川原和人　1992「出雲市・神待山２号墳出土の備前壷」『松江考古』第８号　松江考古学談話会

第３章　玉泉寺裏遺跡発掘調査に伴う花粉分析及び植物珪酸体分析

渡辺正巳（文化財調査コンサルタント株式会社）

はじめに

本報は、文化財調査コンサルタント株式会社が、島根県教育庁埋蔵文化財調査センターから遺跡近辺の古植生等古環境推定を目的とした分析・解析業務委託を受け、実施・納品した調査報告を簡略化したものである。

玉泉寺裏遺跡は、島根県東部、出雲平野南部の出雲市東神西町地内に位置し、平野と丘陵の境界部に立地する遺跡である。

分析試料について

図１に試料採取地点（調査区内平面図）を示す。また図２、３の花粉ダイアグラム、植物珪酸体ダイアグラム左側に試料採取地点の模式柱状図を示した。また、図中１～４の層準で分析試料を採取した。

分析方法及び分析結果

（１）微化石概査

花粉分析用プレパラート、及び花粉分析処理残渣を用いて、植物片、微粒炭、珪藻、火山ガラス、植物珪酸体の含有状況を調べた。含有状況は、表1中の凡例に示した５段階にまとめている。

（２）花粉分析

処理は渡辺(1995)に従って行った。プレパラートの観察･同定は､光学顕微鏡により通常400倍で、必要に応じ600倍あるいは1000倍を用いて行った。花粉分析では通常、木本花粉総数が200粒以上になるまで同定を行い、同時に検出される草本・胞子化石の同定も行う。しかし、今回の分析ではすべての試料で花粉化石の含有量が極めて少なかったことから、木本花粉総数が200粒に至らなかった。またイネ科花粉を、中村（1974）に従いイネを含む可能性の高い大型のイネ科（40ミクロン以上）と、イネを含む可能性の低い小型のイネ科（40ミクロン未満)に細分している。

分析結果を図２の花粉ダイアグラムに示す。また今回の分析では木本花粉が200粒に至らなかったことから、検出できた種類を「＊」で示した。さらに右端の花粉総合ダイアグラムでは木本花粉を針葉樹花粉、広葉樹花粉に細分し、これらに草本花粉、胞子の総数を加えたものを基数として、分類群ごとに累積百分率として示した。

（３）植物珪酸体分析

分析処理は藤原（1976）のグラスビーズ法に従い行った。プレパラートの観察・同定は、光学顕微鏡により通常400倍で、必要に応じ600倍あるいは1000倍を用いた。同定・計数は、イネ科の機動細胞由来植物珪酸体のほか、形態分類群、樹木起源など同定可能な分類群について行った。また計数は、同時に計数したグラスビーズの個数が300を超えるまで行った。

分析結果を図3の植物珪酸体ダイアグラムに示す。また植物珪酸体ダイアグラムでは、１gあたりの含有数に換算した数を、検出した分類群ごとにスペクトルで示した。

花粉分帯

花粉化石の検出量が少なく花粉ダイアグラムが作製できなかったことから、花粉分帯を行わなかった。

花粉化石含有量の少なかった原因について

花粉化石の含有量の少ない原因について、通常は以下のような事が考えられている。

1．堆積速度が速いために、堆積物中に花粉化石が含まれない。
2．堆積物の特性（粒度・比重）と花粉化石の平均的な粒径、比重が著しく異なり、堆積物中に花粉化石が含まれない。
3．土壌生成作用に伴う堆積物で、堆積速度が極めて遅く、堆積した花粉化石が紫外線により消滅した。
4．花粉化石が本来含まれていたが、堆積後の化学変化により花粉化石が消滅した。
5．有機物に極めて富む堆積物で花粉以外の有機物も多く、処理の過程で花粉化石が回収できなかった。

試料No.１は暗色礫混粘土で、酸化鉄の染み出しが薄く認められた。試料No.２～４は暗青灰色粘土で、試料No.２と３の間に層厚4cm程度の礫層を狭在した。また、酸化鉄の染み出しがかすかに認められた。

試料No.１は層相から古土壌であることが推定されていた。概査結果では、微粒炭が多く、珪藻化石もほとんど検出できない。また、花粉はほとんど含まれないものの、胞子が多量に検出できた。これらの特徴は「古土壌」に当てはまり、当初の推定が支持された。一方、試料No.１で花粉化石の検出量が少なかった主原因として、上記3が挙げられた。ただし、酸化鉄の染み出しも認められることから、上記４の堆積後の化学変化（酸化）も原因の一つとして考えられる。

試料No.２～４は、粘土層であることから水成堆積物の可能性が指摘されていた。しかし、概査結果や、花粉分析結果からは、水成堆積物を示唆する証拠は得られなかった。花粉化石の検出量が少なかった原因として、上記１、２、４が考えられる。

古植生復元

（１）試料No.4、3（５層）堆積時期

５層下面は不明であるが、上面は明らかに傾斜する。粘土ではあるが、前述のように水成層の可能性は低いと考えられる。ただし、基盤層が谷地形を示していたことから、谷埋め堆積物であることは確かである。

検出されたイネ科植物珪酸体（プラント・オパール）には、ススキ属に湿生植物のオギが含まれるものの、湿地環境を積極的に支持するヨシ属などの分類群は含まれなかった。また、樹木起源の植物珪酸体（プラント・オパール）も検出されるなど、照葉樹林縁辺の草地を連想させる組成であった。また、多量に検出されたミヤコザサ（ミヤコザサ節型）は大平洋側要素であり、積雪量の比較的少ない（最多積雪量50cm未満）地域に特有のものである。

クスノキ類、シイノキ類を要素とする照葉樹林が谷の両側、あるいは上流部に迫っていたと考えられる。また、谷斜面にはササやシダが繁茂していたと考えられる。

（２）試料No.２（４層）堆積時期

下位層との間に薄い礫層を狭在することから、４層堆積直前に軽度の土砂崩れなどが発生した可能性がある。４層も下位層準同様に傾斜して堆積することから､谷埋め堆積物であると考えられる。

植物珪酸体（プラント・オパール）組成は下位層準と大差なく、谷の両側にシイノキ類やクスノキ類を要素とする照葉樹林が迫り、谷斜面にはササやシダが繁茂していたと考えられる。

（３）試料No.１（２層中のピット埋土）堆積時期

f層堆積時期（土壌化を受けた時期）に掘られた、ピット埋土である。２層には、３層上面が土壌化を受けたものである可能性もある。

ピット埋土であるが堆積物は２層に由来すると考えられ、４層堆積時期同様に、谷の両側にシイノキ類やクスノキ類を要素とする照葉樹林が迫り、谷斜面にはササやシダが繁茂していたと考えられる。

まとめ

玉泉寺裏遺跡発掘調査に伴い、花粉分析、植物珪酸体（プラント・オパール）分析、微化石概査を行い、堆積状況、及び古植生について考察した。

（１）２層は３層上部が土壌化、あるいは土壌として堆積したと考えられる。試料No.１層準はｆ層の堆積物で充てんされた２層中から３層に掘られたピット埋土である。

（２）試料No.１から花粉化石がほとんど検出されない原因として、土壌化による花粉粒の劣化・消滅の外、堆積後の化学変化が推定できた。

（３）４、５層（試料No.１～４層準）には水成層の可能性が指摘されていたが、有効な証拠が得られなかった。両層の境界部には礫層が狭在することから、４層堆積直前に軽度の土砂崩れなどが発生した可能性がある。

（４）試料No.２～４から花粉化石がほとんど検出されない原因として、堆積速度や花粉粒の比重など堆積学的な原因や、堆積後の化学変化が推定できた。

（５）５～３層堆積時期の古植生を推定した。
各時期を通じ、谷の両側にシイノキ類やクスノキ類を要素とする照葉樹林が迫り、谷斜面にはササやシダが繁茂していたと考えられる。

（６）微粒炭の濃集が認められることから、５～３層の堆積時期を知るために、ＡＭＳ年代測定が利用可能である。出土遺物より同層準の堆積時期が決められない場合、有効である。

引用文献

中村　純（1974）イネ科花粉について,とくにイネを中心として. 第四紀研究, 13,187－197.

藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究（1）
－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－. 考古学と自然科学, 9, p.15－29.

渡辺正巳（1995）花粉分析法. 考古資料分析法, 84, 85. ニュー・サイエンス社

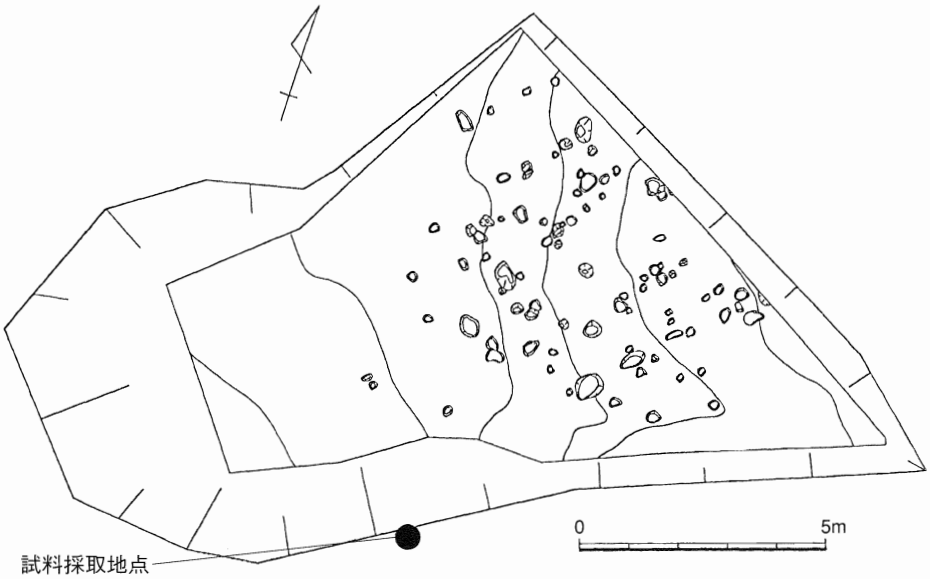


図1 試料採取地点（調査区平面図）

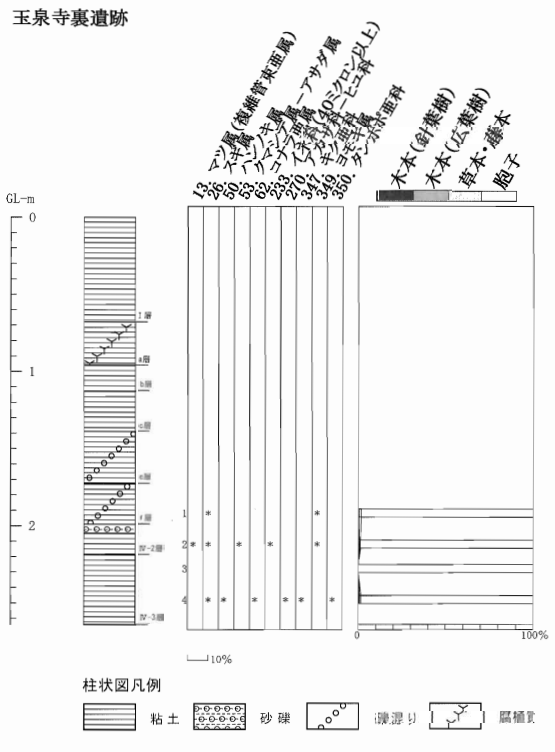


図2 花粉ダイヤグラム

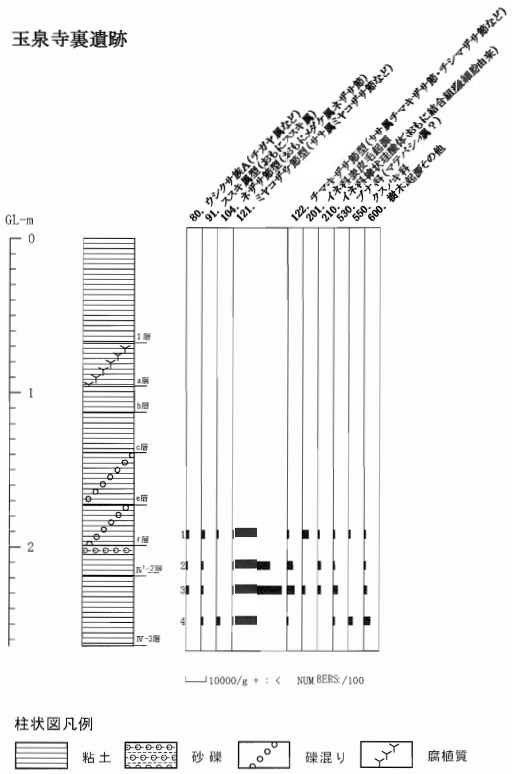


図3 植物珪酸体ダイアグラム

表1 微化石概査結果

試料 No.	花　粉	炭	植物片	珪　藻	火山ガラス	プラントオパール
1	△×	○	△	△×	△×	△
2	△×	◎	△×	△×	△×	○
3	×	◎	△	△×	△	○
4	△×	◎	△	△×	△×	△

凡例　◎：十分な数量が検出できる　○：少ないが検出できる　△：非常に少ない
△×：極めてまれに検出できる　×：検出できない

写 真 図 版

玉泉寺裏遺跡（南から）

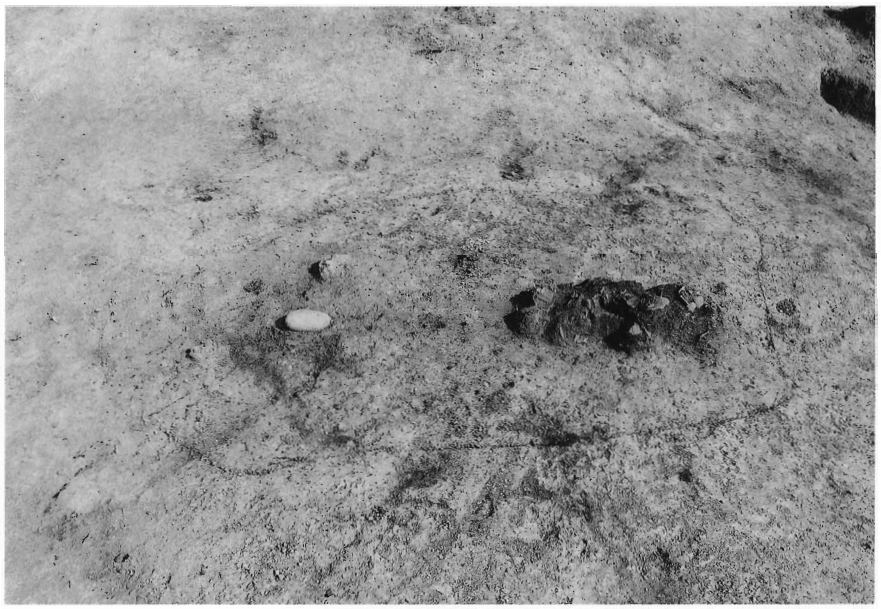
玉泉寺裏遺跡（西から）

図版　2

玉泉寺裏Ⅰ区　調査前全景

玉泉寺裏遺跡Ⅰ区　SI−01

玉泉寺裏Ⅰ区
SK−01

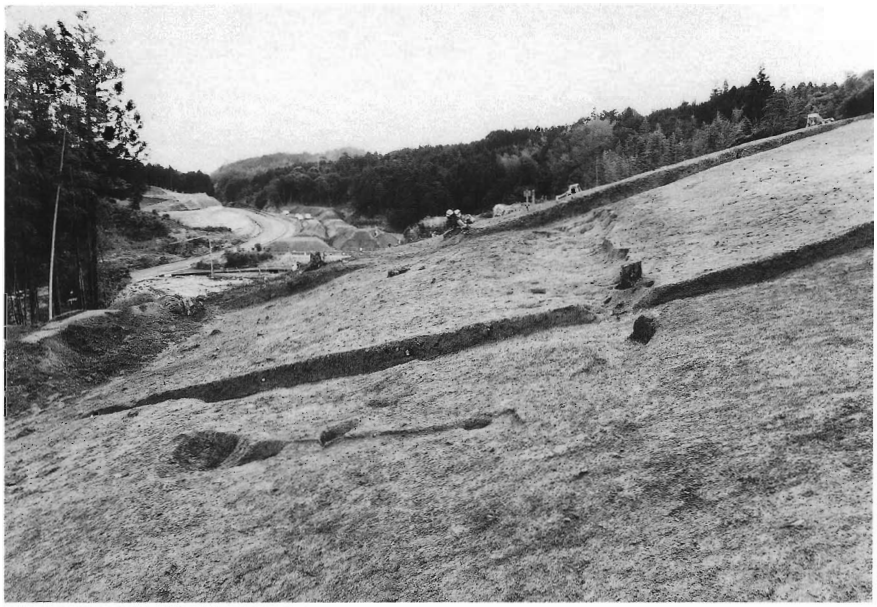


玉泉寺裏Ⅰ区
SX−01 検出状況

玉泉寺裏Ⅰ区
SX−01

図版　4

玉泉寺裏Ⅰ区
SD－01



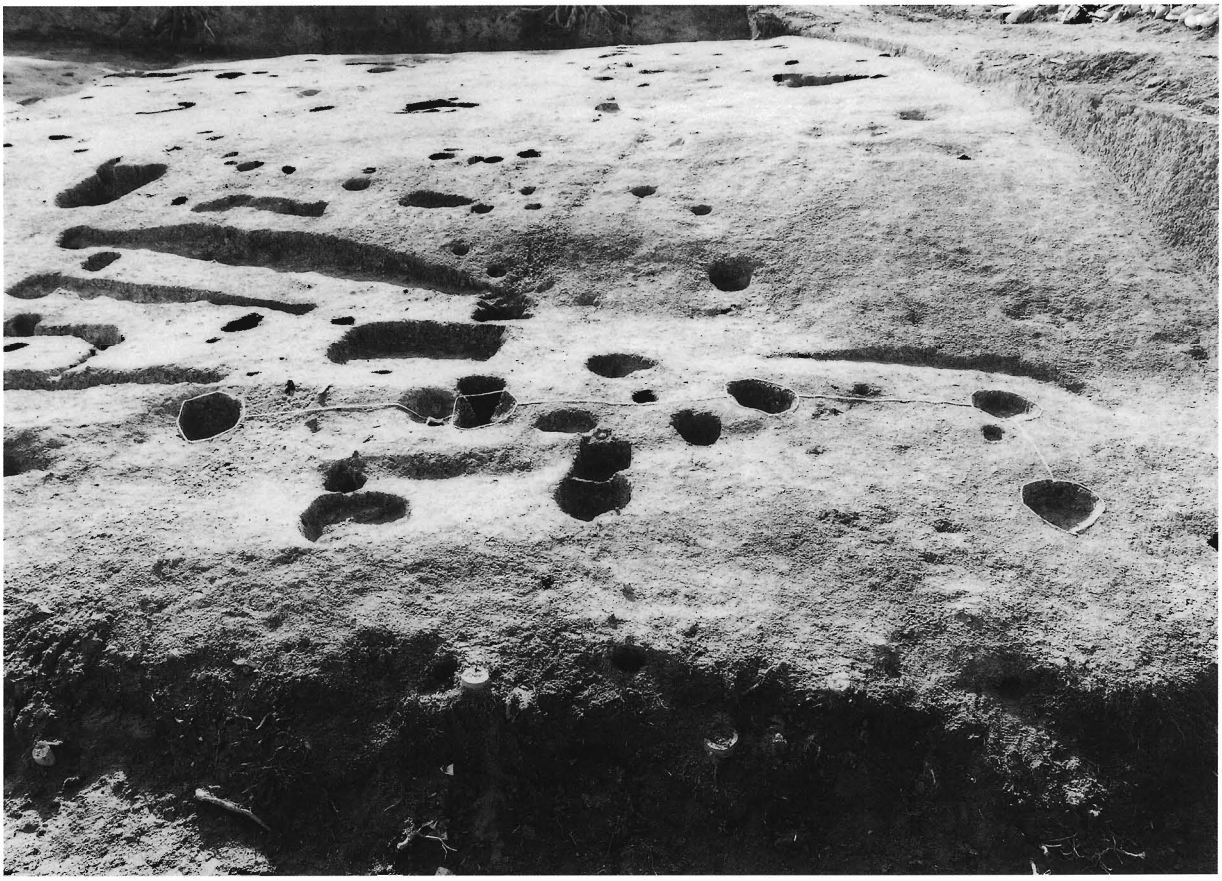
玉泉寺裏Ⅰ区
SD－05・06

玉泉寺裏Ⅰ区
SD－03・04

玉泉寺裏遺跡Ⅱ区（西から）

玉泉寺裏遺跡Ⅱ区　SB－01

図版　6



玉泉寺裏遺跡Ⅱ区　SB－02

玉泉寺裏遺跡Ⅲ区　ピット検出状況

玉泉寺裏遺跡Ⅲ区　遺物出土状況 1

玉泉寺裏遺跡Ⅲ区　遺物出土状況 2

図版　8

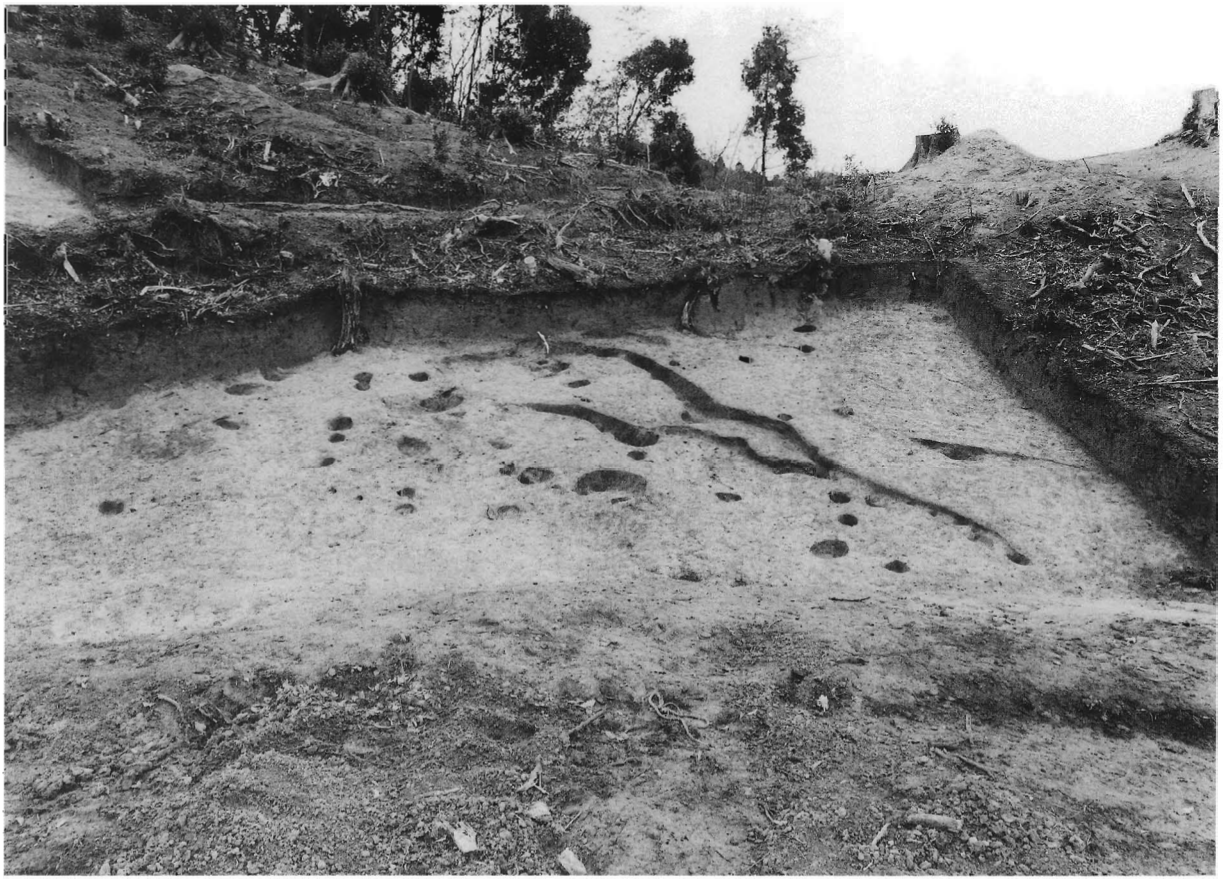
玉泉寺裏遺跡Ⅲ区　遺物出土状況 3

玉泉寺裏遺跡Ⅲ区　遺物出土状況 4

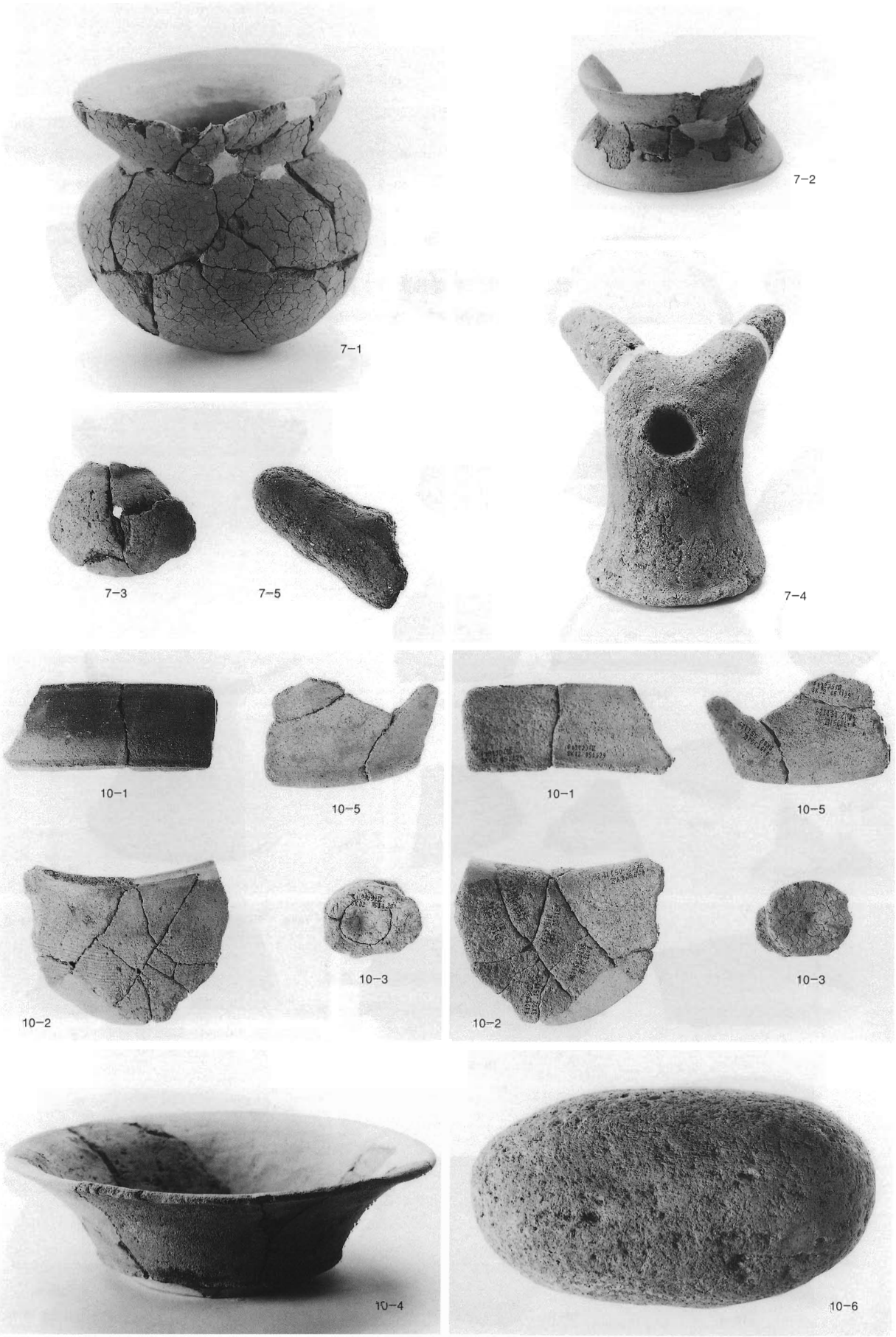
玉泉寺裏遺跡Ⅲ区　調査後全景

玉泉寺裏遺跡Ⅳ・Ⅴ区（北から）

玉泉寺裏遺跡Ⅳ区　SD－02

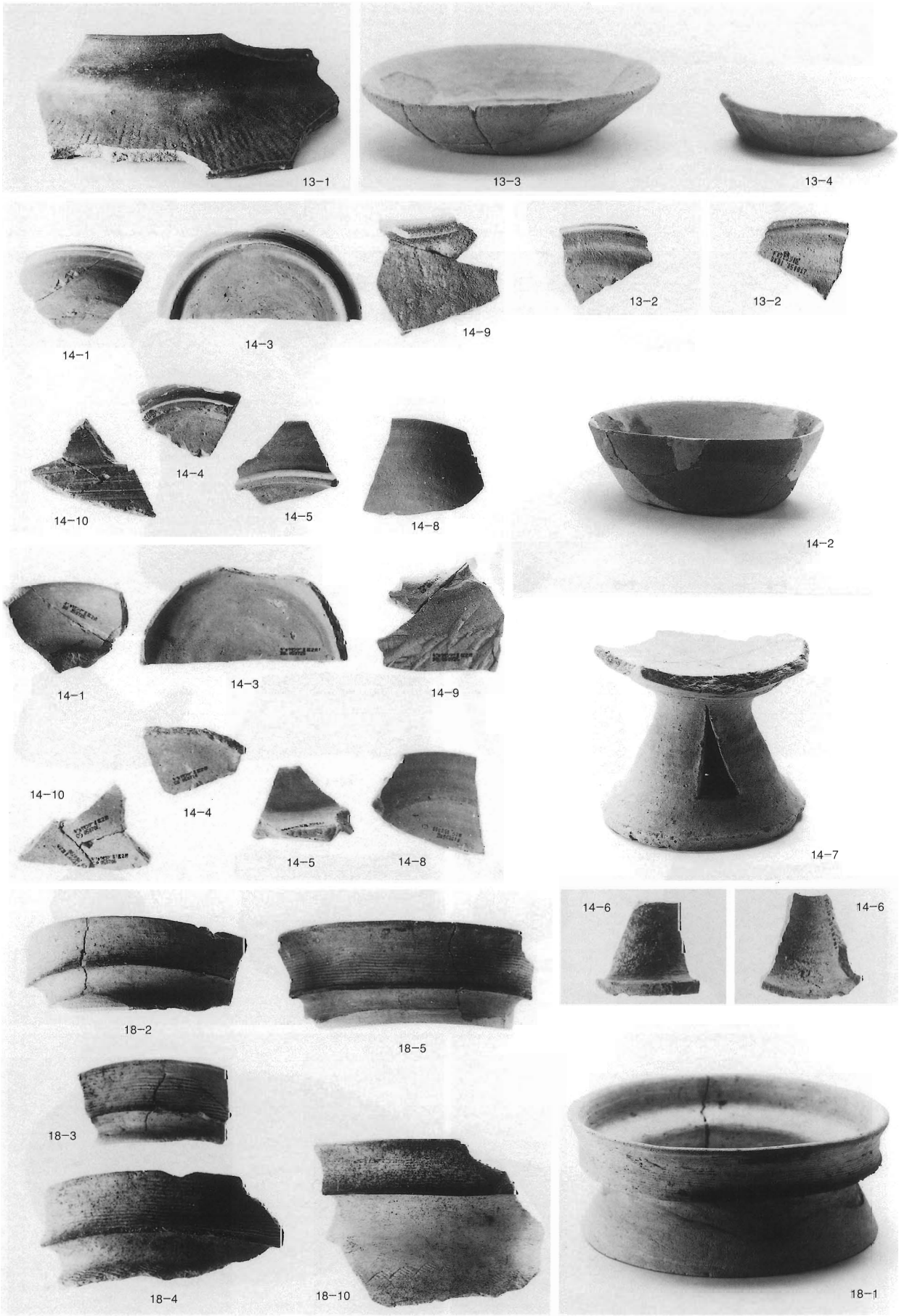


玉泉寺裏遺跡Ⅴ区　溝状遺構検出状況

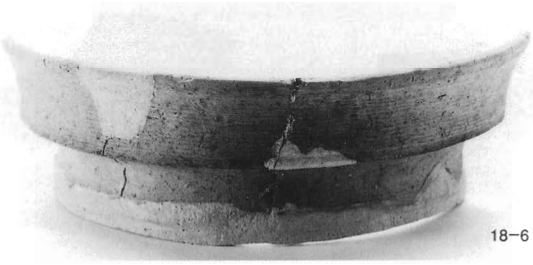


玉泉寺裏遺跡　出土遺物１

図版　12



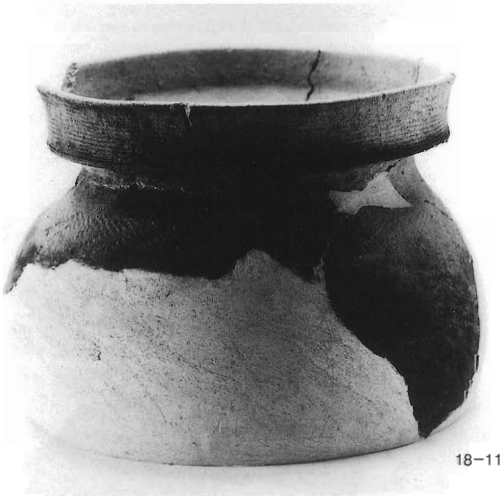
玉泉寺裏遺跡　出土遺物２


18−6

18−8

18−12

18−9

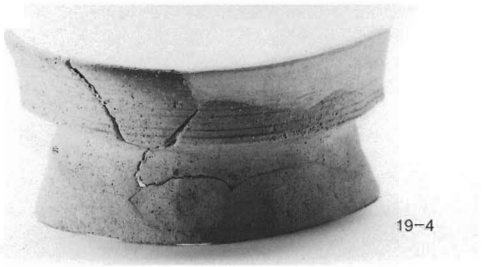

18−11

18−7

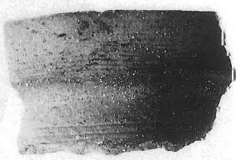
19−1

19−3

19−2


19−4

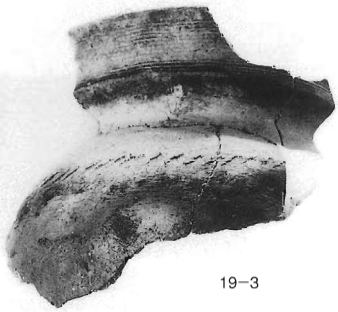
19−7


19−8

玉泉寺裏遺跡　出土遺物３

19−5

19−9


19−3

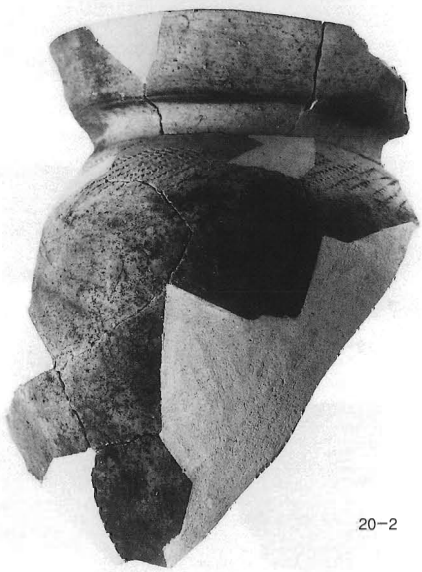
19−6

19−10

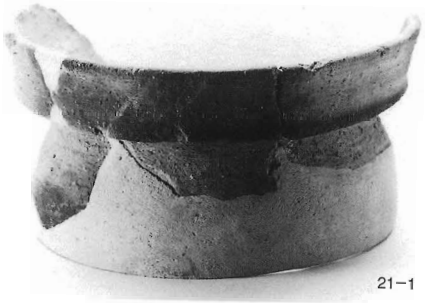
19−11

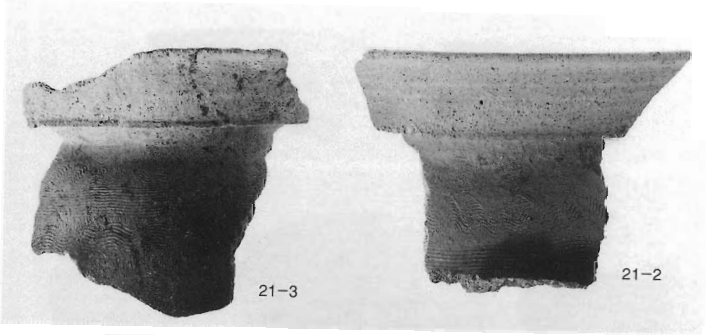
19−12

20−1


20−2

玉泉寺裏遺跡　出土遺物４


21−1


21−3　21−2

21−9

21−4

21−5

21−7

21−6

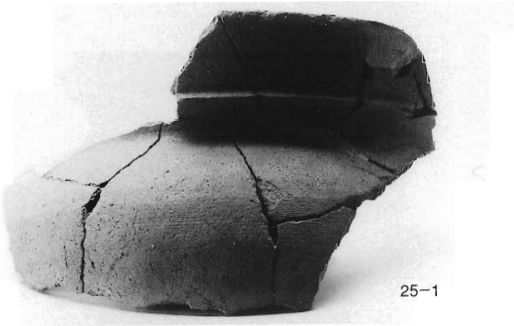
21−8

21−10

玉泉寺裏遺跡　出土遺物５

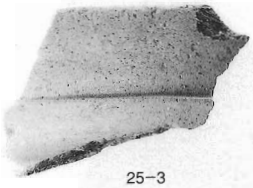
玉泉寺裏遺跡　出土遺物 6

24−1


25−1

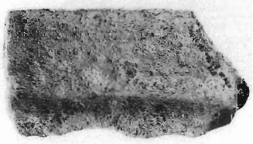
25−2

25−4

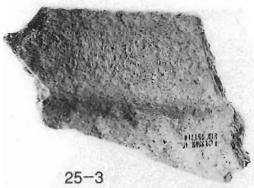

25−3

25−5

25−6


25−2

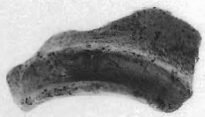
25−4


25−3

25−5

26−2

26−1

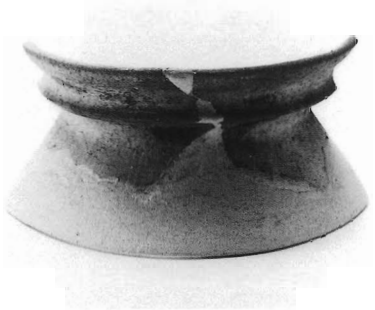

26−6

26−4

26−7

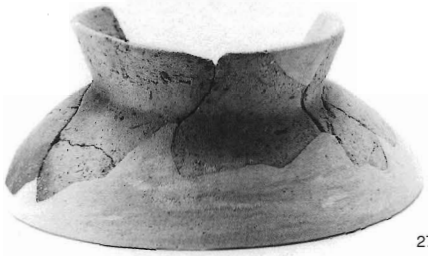
玉泉寺裏遺跡　出土遺物７

26−3


26−5

26−9

26−8

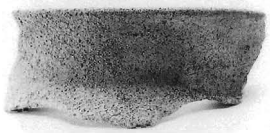

27−2

27−1

27−4

27−3

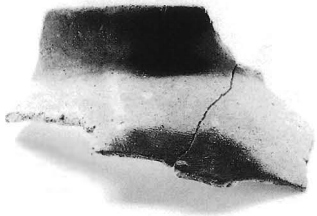
玉泉寺裏遺跡　出土遺物８


27−5

27−6

27−7

27−8

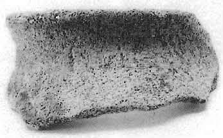

28−1

28−2

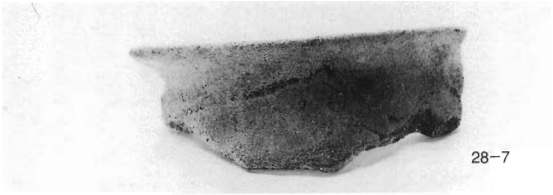
28−3

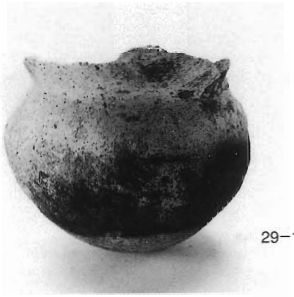
28−4

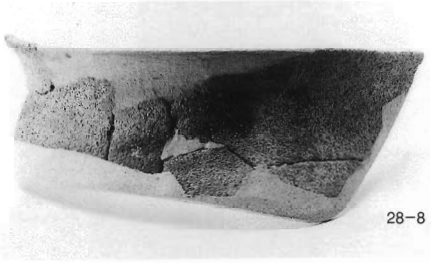
28−5

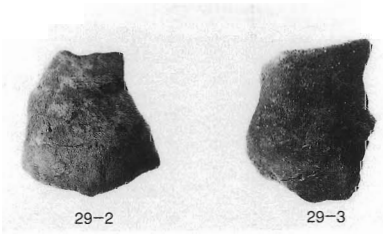

28−6

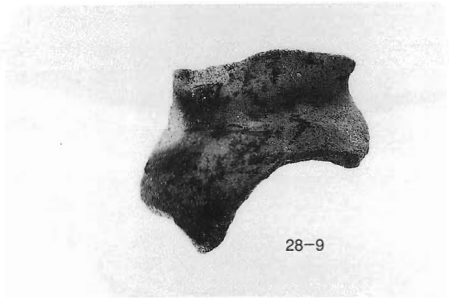
玉泉寺裏遺跡　出土遺物９

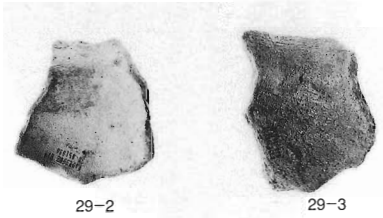

28−7


29−1


28−8

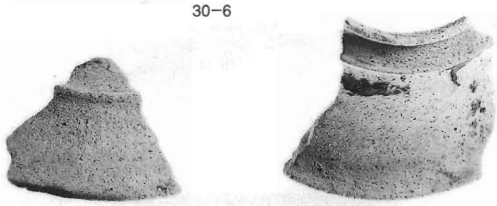

29−2　29−3

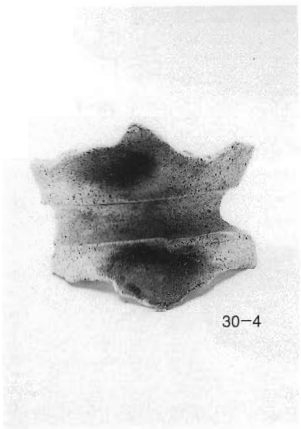

28−9

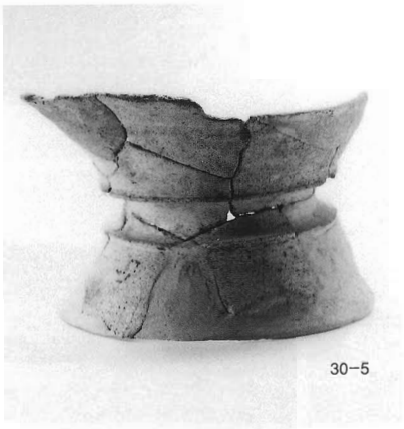

29−2　29−3

28−10

30−6


30−2　30−1


30−4

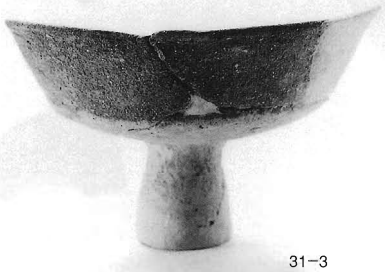

30−5

30−3

玉泉寺裏遺跡　出土遺物 10

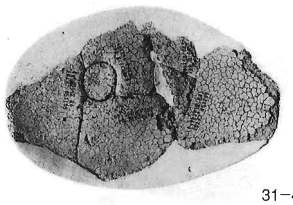
31−1

31−2


31−3

31−4

31−5

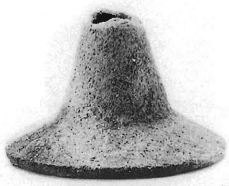

31−4

31−6

31−7

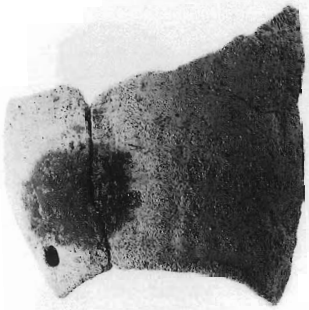
31−8

31−9

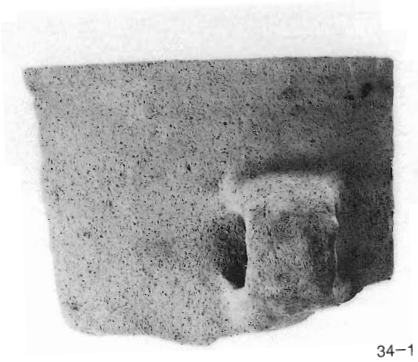

31−10

玉泉寺裏遺跡　出土遺物 11

玉泉寺裏遺跡　出土遺物 12


33−4

33−6


34−1

33−7

33−5

34−2

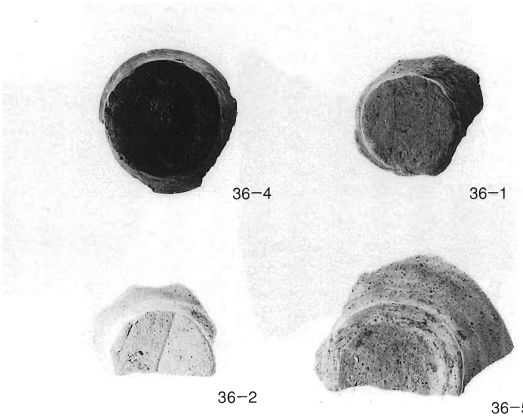
33−4

34−3

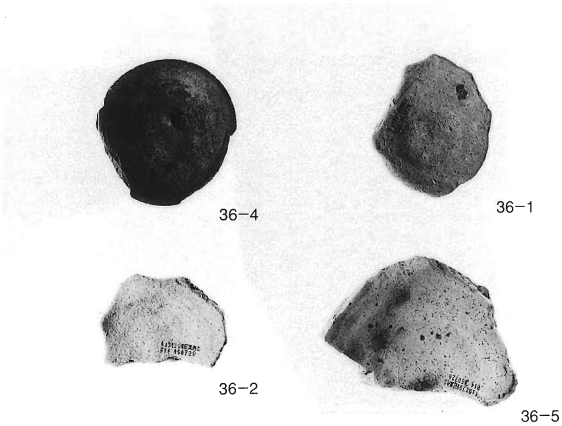
33−5

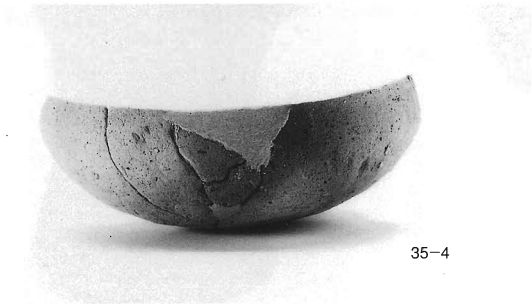
玉泉寺裏遺跡　出土遺物 13

35−1



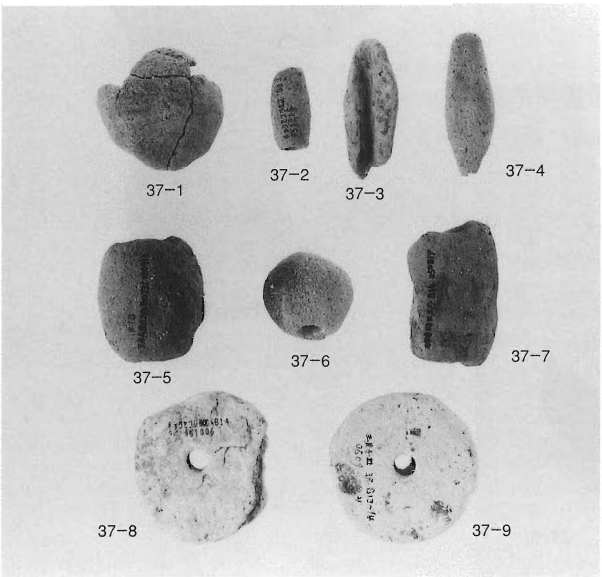
35−2

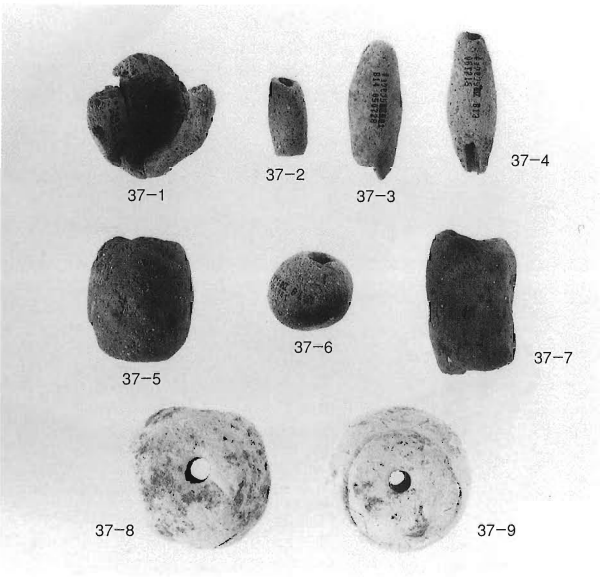



35−4

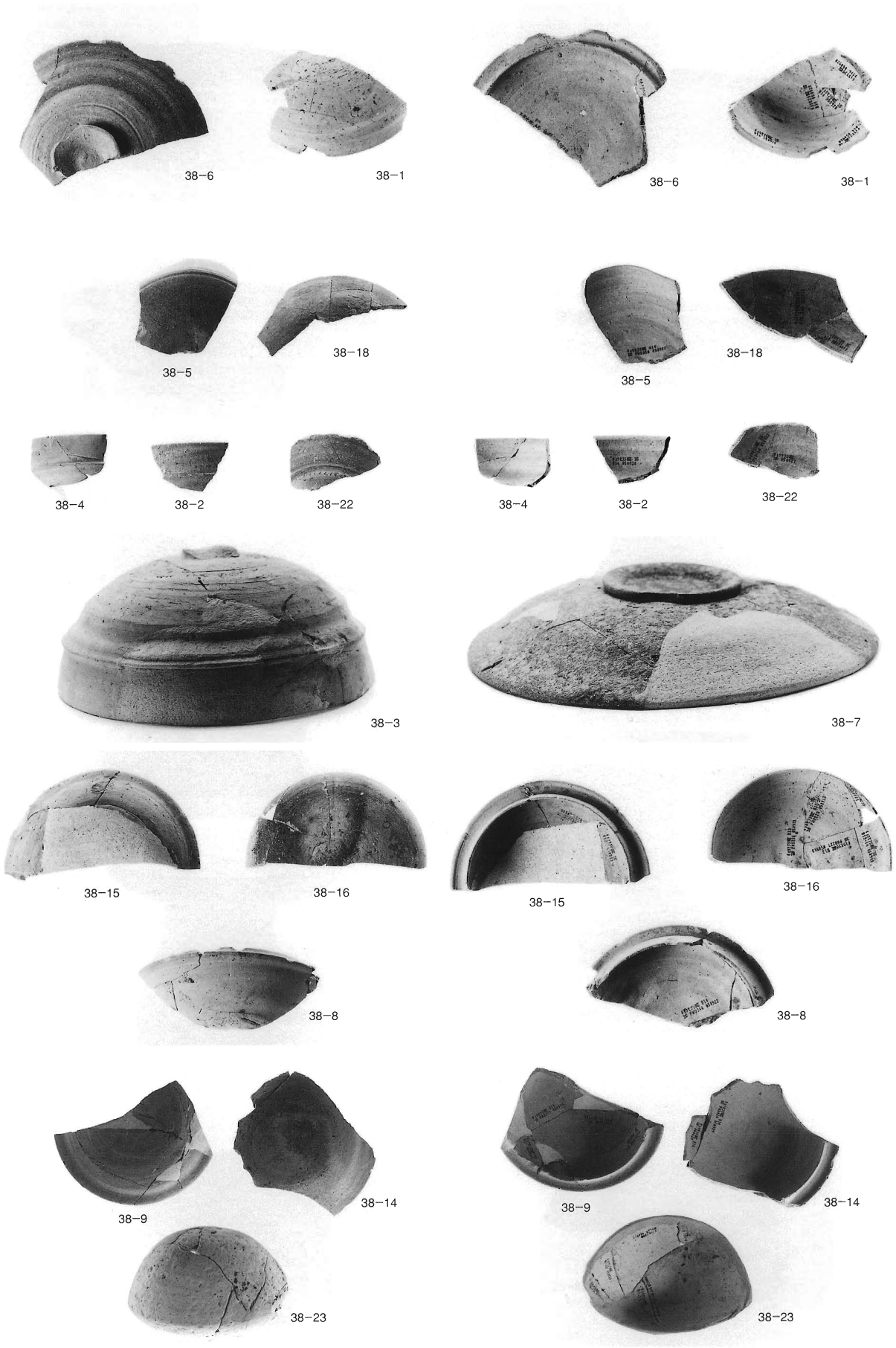
35−3

36−3





玉泉寺裏遺跡　出土遺物 14



玉泉寺裏遺跡　出土遺物 15

38−10

38−11

38−12

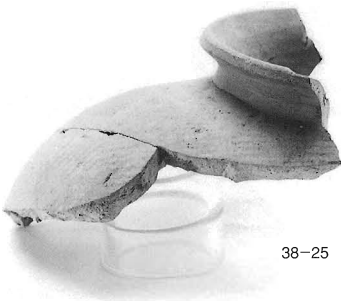
38−13

38−17

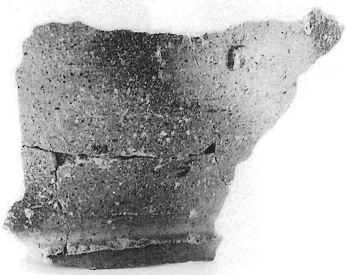
38−19

38−21

38−20



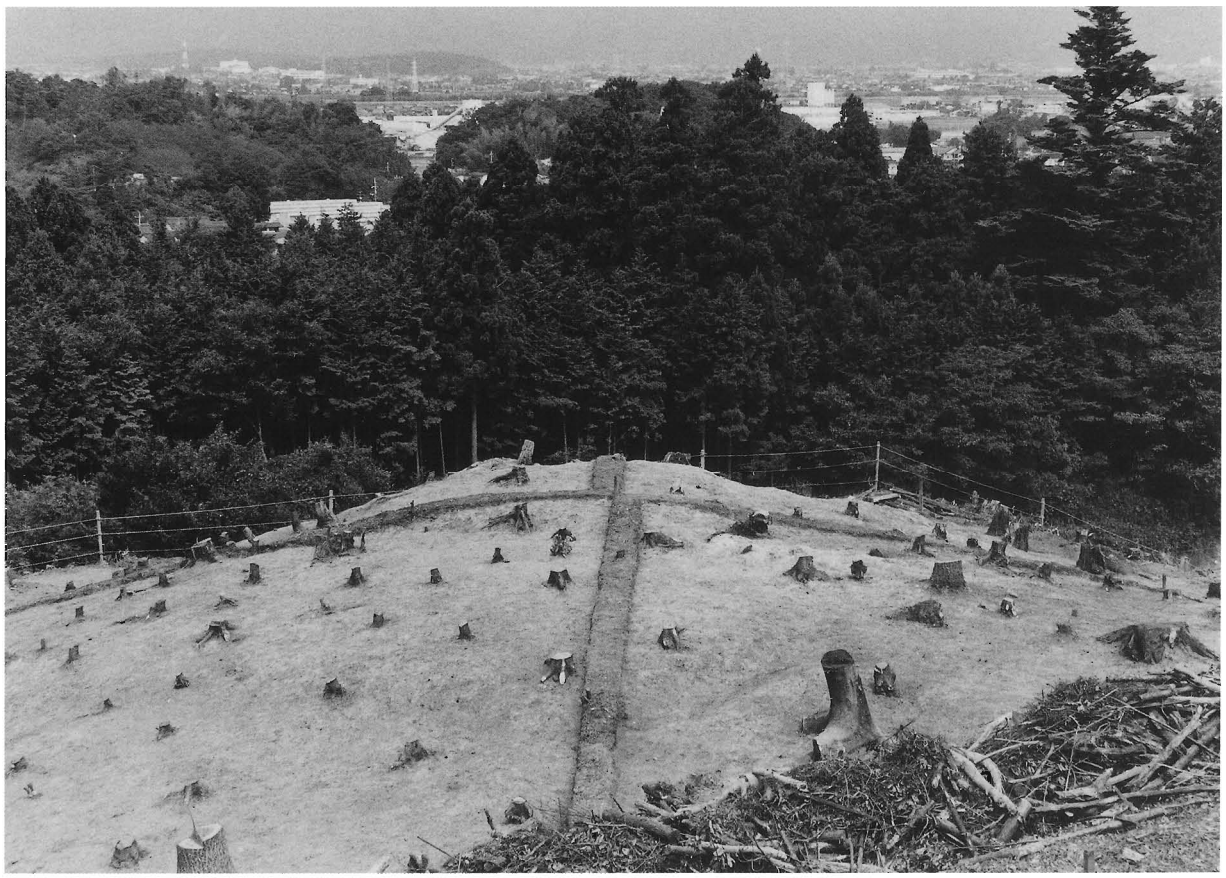
38−25



38−24

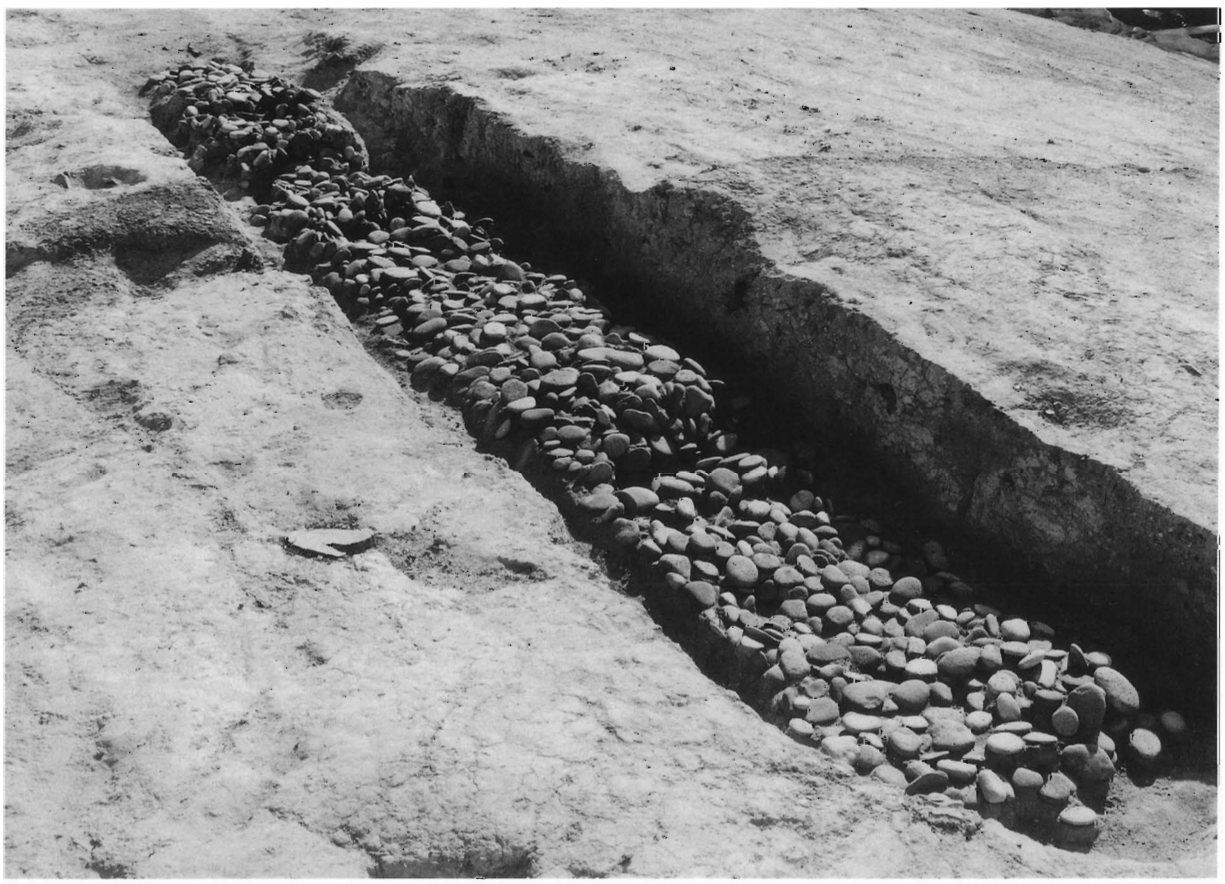
玉泉寺裏遺跡　出土遺物 16

間谷東古墳　調査前（南から）



間谷東古墳　表土除去後（南から）

間谷東古墳　礫床検出状況１（南から）



間谷東古墳　礫床検出状況２（北から）

間谷東古墳　遺物出土状況 1

間谷東古墳　遺物出土状況 2

間谷東古墳　礫床除去後（南から）

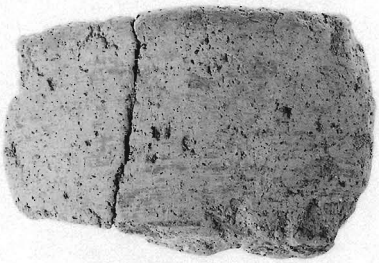
間谷東古墳　墓壙内小土坑

間谷東古墳　主体部完掘状況１

間谷東古墳　主体部完掘状況２

間谷東古墳　調査後１（南から）

間谷東古墳　調査後２（南から）



48−1

49−1

49−1

48−1

50−2

50−1

50−2

50−1

50−3

50−4

50−3

50−4

間谷東古墳　出土遺物

報告書抄録

フリガナ	ギョクセンジウライセキ・ハマイバヨンゴウフン・アンヤヒガシコフン
書名	玉泉寺裏遺跡・浜井場４号墳・間谷東古墳
副書名	一般県道出雲インター線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	Ⅱ
シリーズ名	一般県道出雲インター線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	Ⅱ
編著者名	景山真二　曽田辰雄
編集機関	島根県教育庁埋蔵文化財調査センター
所在地	〒690－0131　島根県松江市打出町33番地　TEL 0852-36-8608㈹ E-mail　maibun@pref.shimane.lg.jp
発行年月日	平成20年（2008年）３月

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
ギョクセンジウライセキ 玉泉寺裏遺跡	シマネケン イズモシ ヒガシジンザイチョウ 島根県出雲市東神西町1475－1外	32203		35°19′11″	132°42′55″	H17.4.25～ H18.1.19	1,825㎡	出雲インター線建設
ハマイバヨンゴウフン 浜井場４号墳	シマネケン イズモシ ヒガシジンザイチョウ 島根県出雲市東神西町1458－1	32203		35°19′58″	132°42′14″	H18.8.1～ H18.8.31	60㎡	
アンヤヒガシコフン 間谷東古墳	シマネケン イズモシ シチイミヤチョウ 島根県出雲市知井宮町2449－1	32203		35°19′54″	132°42′98″	H18.9.13～ H18.12.20	500㎡	

遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
玉泉寺裏遺跡	住居跡	弥生時代 古墳時代	竪穴住居 建物跡土坑 溝状遺構	弥生土器	
浜井場４号墳	古墳	古墳時代			
間谷東古墳	古墳	古墳時代	前期古墳	土師器 須恵器 刀子	礫床を有する前期古墳

要約

本書は、平成17･18年度に実施した、玉泉寺裏遺跡･浜井場４号墳･間谷東古墳の調査成果を収録している。
玉泉寺裏遺跡では、弥生時代から古墳時代にかけての住居跡や土坑、溝状遺構等を検出し、弥生土器・土師器・須恵器などの遺物が出土した。
浜井場４号墳は地滑り等の影響により埋葬施設が確認されなかった。
間谷東古墳は、埋葬施設に礫床を有する前期古墳であり、土師器・刀子などが出土した。

一般県道出雲インター線建設事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ

玉泉寺裏遺跡
浜井場4号墳
間谷東古墳

発　行　2008年3月
編　集　島根県教育委員会
印　刷　柏村印刷㈱